

高所寺池発掘調査報告

—藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査—

独立行政法人文化財研究所

文化財研究所

2006



高所寺池遺跡全景（発掘区合成）

高所寺池発掘調査報告

—藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査—

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所

2006

序

万葉集の巻頭をかざる持統女帝の一首にも詠われた、天の香具山。その西方に、高所寺池があります。

その名のとおり、下流の集落・高殿・別所・法花寺にその水を注ぎ、それらの田畠を潤してきたこの溜め池は、樅原市内でも有数の広さをもつ池として、知られています。

今般、老朽化してきたこの池が、農林水産省近畿農政局による、国営大和平野総合農地防災事業の対象地にとりあげられ、その堤を中心に改修されることとなりました。

高所寺池は、その北半が特別史跡にも指定されている藤原宮跡と重なり、南半は藤原京城跡と重なっています。また、近傍の発掘調査によれば、それを前後する長い時間にわたって、人々の暮らしの跡が埋もれていることもわかっています。

近畿農政局では、このような状況を十分に理解され、工事に先立つ発掘調査に十全の協力を惜しまれませんでした。これを受け、奈良国立文化財研究所（のち、独立行政法人奈良文化財研究所）飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、2000年度から2003年度までの4カ年にわたり、施工範囲の発掘調査をおこないました。さらに、最終年度には、池底の一部についての学術調査もおこないました。

その成果は、期待以上のものがありました。藤原宮の東南隅部は調査が少なく、いわば、宮内の空白地区でもありました。今回、南面大垣と南面外濠・内濠を確認できたことは、藤原宮の四面に関する重要な発見となりました。また、官衙域の一部が判明したこと、貴重でした。

藤原宮をとりかこむ藤原京城部分の調査でも、条坊関連遺構をはじめとして、多くの遺構遺物をみいだしました。京内の宅地と寺院地とのあり方にも、一石を投じる知見もあります。

これ以外にも、県内でもまれな中国製内行花紋鏡の発見や、韓式系土器の出土は、香具山西麓の開発状況を語る上に欠くことのできない資料であり、また、13世紀を前後する鎌倉時代の遺構遺物は、文献史料とあわせ、周辺の中世的景観復元に欠かせないものとなるでしょう。

改修なった高所寺池の傍らに立つと、これら長きにわたる人々の営みが、常に、香具山のゆったりとした山塊に見守られてきたことを感ぜずにはいられません。

最後に、遺跡調査とその保存に関して尽力を惜しまれなかった農水省をはじめとする関係各位に篤く感謝するとともに、この報告書が広く各方面で利用されることを願ってやみません。

2006年3月

奈良文化財研究所

所長 田辺征夫

高所寺池発掘調査報告

— 藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査 —

目 次

第Ⅰ章 序 言	1
1 調査の経緯	1
2 報告書の作成	2
第Ⅱ章 調 査	4
1 調査地の位置と既往の調査	4
2 調査の概要	6
3 測量と地区割	6
第Ⅲ章 遺 構	9
1 藤原宮の南限施設	9
2 藤原宮東南官衙地区関連遺構	10
3 条坊関連遺構	12
4 藤原京左京七条二坊の遺構	14
5 宮直前期までの7世紀代の遺構	14
6 古墳時代の遺構	16
7 中世の遺構	17

第IV章 遺 物	19
1 木 簡	19
2 瓦 類	20
A 軒丸瓦	20
B 軒平瓦	21
C 丸 瓦	23
D 平 瓦	28
3 土 器 類	51
A 条坊関係遺構出土土器	51
B 藤原宮城内の遺構出土土器	56
C 藤原宮外の古代遺構出土土器	60
D 古墳時代遺構出土土器	64
E その他の遺構出土土器	69
F 中世遺構出土土器	70
G 特殊土製品	72
H 縄文土器・弥生土器	76
I 墳 輪	76
J 小 結	78
4 金属製品・石製品・木製品	79
A 銅 鏡	79
B 水晶製三輪玉	79
C 石 鍋	79
D その他	81
第V章 考 察	82
1 藤原宮南面外濠について	82
2 出土瓦の問題点	84
3 中世遺構についての覚書	90
第VI章 結 語	91
図 面	
図 版	

図面

PLAN

- | | | |
|---|----------|-----------------|
| 1 | 平面図の割り付け | |
| 2 | 池北西隅 | 第118次北区・西区 |
| 3 | 池北岸 | 第118次北区・東区 |
| 4 | 池西岸北半 | 第118次西区・第124次 |
| 5 | 池東岸北半 | 第118次東区 |
| 6 | 池西岸中央 | 第124次 |
| 7 | 池東岸中央 | 第113次 |
| 8 | 池南西隅 | 第131次東北区・東南区・西区 |
| 9 | 池南東隅 | 第113次・第131次東北区 |

図版

PL.

- | | | |
|---|-----------------------|--|
| 1 | 高所寺池東半部発掘調査区 | 1. 高所寺池南岸から東岸 (第113次)
2. 高所寺池東岸から北岸 (第118次) |
| 2 | 高所寺池西南部発掘調査区 | 1. 高所寺池西南部 南から
2. 高所寺池西部 北から
3. 高所寺池南西部 西から |
| 3 | 高所寺池東岸北発掘区 | 1. 宮の南面大塀 (第118次) 東から |
| 4 | 藤原宮の南面大垣と外濠 | 2. 宮の南面大塀 (第124次) 東から
3. 宮の南面外濠 (第118次) 北西から |
| 5 | 藤原宮の南面内濠・外濠とその間の掘立柱建物 | 1. 宮の内面内濠 (第118次) 東から
2. 内濠 (第118次) 西から
3. 外濠 (第118次) 西から
4. 宮の南面外濠 東から
5. 外濠上面瓦出土状況 (第124次) 北から
6. 掘立柱建物SB9750 東から |

PL.

- | | |
|--------------------|---|
| 6 北区全景と南北溝SD9564 | 1. 北区全景 東から
2. 南北溝SA9575 北から
3. 北区全景 西から
4. 東西溝SD9564 東から |
| 7 北区南北棟建物と池西南隅導水口 | 1. 北区南北棟建物SB99601 北から
2. 高所寺池西南隅導水口 南西から |
| 8 東区全景と東西砂溝 | 1. 東西砂溝SD9560 北西から
2. 第118次東区全景 北から |
| 9 条坊関連遺構 | 1. 東二坊跡路と内側溝 北東から
2. 六条大路北側溝SD2915 東から
3. 外濠と東二坊跡路の合流点 北西から |
| 10 南区の井戸・斜行溝と西区の土坑 | 1. 井戸SE9330 北から
2. 2本の斜行溝と六条大路北側溝 北から
3. 土坑SK9749 北東から
4. 木肩土坑SK9740 北から |
| 11 南区の建物と東区の井戸 | 1. 建物SB9333 北西から
2. 占墳時代の井戸SE9570 東から
3. 井戸SE9570完掘後 東から |
| 12 西区・南区の古墳周濠 | 1. 池南辺発掘区と古墳周濠SD9650 西から
2. 古墳周濠SD9871 北から
3. 古墳周濠SD9850 北西から
4. 古墳周濠SD9870 北から
5・6. 古墳周濠SD9870 北から |
| 13 中世の井戸 | 1. 井戸SE9328完掘後 北から
2. SE9882と先行するSE9881 東南東から
3. SE9884 北から
4. SE9345精査後 東から
5. SE9883 北から
6. SE9880 西から |
| 14 東西大溝SD9633出土土器 | 1. 上野器窯 (185) |
| 15 出土土器・埴輪 | 2. 窯内面の酸化鉄
3. 須恵器大甕 (179) 粘土類の土質の差
4. 円筒埴輪
5. 須恵器大甕 (179) の復原 |

PL.

- 16 軒丸瓦
- 17 軒平瓦
- 18 軒平瓦の技法写真
- 19 丸瓦 1類・2類
- 20 丸瓦 2類
- 21 丸瓦 2類
- 22 平瓦 1類・2類
- 23 平瓦 3類・4A類
- 24 平瓦 4B類
- 25 平瓦 4B類
- 26 平瓦 4B類
- 27 平瓦 4B・5A・5B類
- 28 平瓦 6類
- 29 平瓦 6類
- 30 面戸瓦・熨斗瓦
- 31 条坊関係遺構出土土器
- 32 六条条間路南側溝SD4752出土土器
- 33 藤原宮内の出土土器
- 34 東西大溝SD9633出土土器
- 35 藤原宮内外の出土土器
- 36 五角形井戸SE9330出土土器
- 37 井戸SE9570および溝SD9350出土土器
- 38 井戸SE9570出土須恵器大甕
- 39 古墳時代の周濠および溝出土土器
- 40 古墳時代の土器
- 41 中世遺構出土土器
- 42 中世遺構出土土器
- 43 土器・金属器・石製品

表

Tab.

- 1 2級基準点No.173の新旧成果 6
- 2 航空写真撮影一覧 7

Tab.

- 3 地区割の起点の座標値一覧 8
- 4 各遺跡計測点の座標 82

挿 図

Fig.

- 1 調査地の位置 3
- 2 調査区と周辺の調査地 5
- 3 新旧地区杭の位置関係 7
- 4 高所寺池調査地とその周辺の
地区割 8
- 5 大垣柱穴と内濠・外濠 9
- 6 建物・塀の柱穴断面図 11
- 7 東二坊坊間路西側溝 13
- 8 井戸SE9330と最下段井戸枠材 15
- 9 中世の井戸 18
- 10 出土木簡と釙文 19
- 11 軒丸瓦 20
- 12 軒平瓦 22
- 13 丸瓦 1類 24
- 14 丸瓦 2類 25
- 15 丸瓦 2類 26
- 16 丸瓦 2類 27
- 17 平瓦 1・2類 29
- 18 平瓦 2類 30
- 19 平瓦 3類 31
- 20 平瓦 3類 32

Fig.

- 21 平瓦 3・4 A類 33
- 22 平瓦 4 A・4 B類 34
- 23 平瓦 4 B類 35
- 24 平瓦 4 B類 36
- 25 平瓦 4 B類 37
- 26 平瓦 4 B類 38
- 27 平瓦 4 B類 39
- 28 平瓦 4 B類 40
- 29 平瓦 4 B類 41
- 30 平瓦 4 B類 42
- 31 平瓦 4 B類 43
- 32 平瓦 5 A・5 B類 44
- 33 平瓦 6類 45
- 34 平瓦 6類 46
- 35 面戸瓦・熨斗瓦 48
- 36 南面大垣内濠SD502・外濠SD501
出土土器 51
- 37 東二坊坊間路西側溝SD6032B
出土土器 52
- 38 東二坊坊間路東側溝SD6031
出土土器 53

Fig.

39	六条条間路南側溝SD4752 出土土器	54
40	六条条間路南側溝SD4752 出土須恵器	55
41	掘立柱建物・壙出土土器	56
42	東西大溝SD9633出土土器	57
43	東西大溝SD9633出土須恵器	58
44	南北大溝SD9577出土土器	59
45	土坑SK9660出土土器	60
46	五角形井戸SE9330出土土器	61
47	東西砂溝SD9560・南北砂溝SD9561 出土土器	62
48	斜行溝SD9722・9724 出土土器	63
49	大土坑SK9731出土土器	63
50	素掘井戸SE9570出土土器	64
51	溝SD9350出土土器	65

Fig.

52	古墳周濠SD9850・9870・9871 出土土器	66
53	南北溝SD9334出土土器	68
54	南北溝SD9581出土土器	69
55	その他の遺構出土土器	69
56	中世の土器	71
57	陶質土器	73
58	陶質土器・韓式系土器	74
59	韓式系土器	74
60	特殊遺物	75
61	円筒埴輪	77
62	金属器・石製品	80
63	出土木製品	81
64	藤原宮南面外郭施設	82・83
65	Tab. 4 をグラフ化	83
66	飛鳥藤原第75次調査出土瓦	85
67	飛鳥藤原第75次調査出土瓦 2	87

付 図

1 遺構全図

第Ⅰ章 序 言

1 調査の経緯

A はじめに

本書は、権原市高殿町に所在する、灌漑用溜め池「高所寺池」改修工事にともなう発掘調査報告書である。

高所寺池は、藤原宮跡の東南隅部に位置する。

今、藤原宮の大極殿跡にたたずみ、南の方を望めば、左手に香具山の山塊をみることができるが、この香具山のすぐ右手（西方）に、高所寺池がある。南北約220m、東西約110mの規模をもった長方形の農業用溜め池で、大和平野に多い「皿池」の特徴を備える。

「高所寺池」の名称は、その灌漑範囲にある3つの集落、つまり高殿・別所・法花寺の名称から1文字ずつをとって命名されたものである。

権原市内には、灌漑面積が10町歩をこえる用水池は36カ所あるが、この高所寺池はその一つで、灌漑面積は35町歩。これは、市内で7番目の広さである¹⁾。

高所寺池は、大和盆地条里でいうと、高市郡路東三十六条三里の四坪・五坪（字名は八子タ・コウ田）にあたる南北2坪をしめる。北方にある醍醐池（東西2坪分）、隅田池（キタイケ、1坪分）など、いずれも条里的坪単位を池としており、大和盆地では通有の形態である。

B 発掘調査の経緯

農林水産省近畿農政局（大和平野農地防災事業所）は、「国営大和平野総合農地防災事業」（1993～2006年度）として、田畠への灌漑と治水に利するため、大和盆地に所在する灌漑面積1ha以上のもの約3000カ所のうち、老朽化の著しい溜め池について改修整備を計画した。

この事業は、溜め池決壊による災害を未然に防止するとともに、地域農業経営の安定と国土および環境保全に資することを目的としている。関係市町村数15、受益面積3110ha、改修溜め池総数105、におよぶ。このうち、権原市内で対象とされた溜め池は3カ所である。

その一つが、権原市高殿町に所在する高所寺池である。

「国営大和平野総合農地防災事業」にともなう高所寺池改修工事に関する協議は、2000年度（平成12年度）に始まった。権原市内で対象となった3カ所の一つで、改修工事は、基本的に堤体内側に盛土をおこない、その表面をコンクリートブロック張りすること、および漏水の

確認される西側堤体については、内側基部で遮水施工をおこなうことが基本的な方針であった。これに加えて、取水口の底櫓の改修と洪水吐の改良も計画されていた。

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、農林水産省近畿農政局および大和平野農地防災事業所、そして奈良県教育委員会と事前の発掘調査についての協議を重ねた。その結果、行為地（高所寺池）は、未指定地区とはいえ、その多くが因特別史跡に指定されている藤原宮跡と重複すること、しかも工法によっては地下構造の破壊をともなう可能性があることから、事前の発掘調査は不可避であると判断された。

また、高所寺池東西両方で1979年におこなわれた発掘調査では、藤原宮の大垣や外濠の造構が検出できなかつたので、宮の南辺を確認するためにも、調査が必要とされた。

発掘調査は、当初、2000年度（平成12年度）に試掘調査を実施し、2001年度（平成13年度）から2003年度（平成15年度）の3カ年で本調査をおこなう計画であった。その後、工事計画の変更などがあり、最終的には、2000年度（平成12年度）から2003年度（平成15年度）の4カ年度にわたって発掘調査を実施した。調査総面積は7,150m²である。

2000年度は池の南岸から東岸にかけてを調査し、以後の調査計画を立案するため、東岸北部および北岸と西岸に試掘坑をもうけた（第113次調査）。

以後、逆時計回りに池堤体の内側に調査区を設定して調査を継続した。調査にあたっては、調査区より池の内部に土壤改良材を使った工事用道路をもうけ、それを使って調査区の重機搬削をおこなった。

2001年度は北岸および東西岸北端を中心で調査し（第118次）、2002年度は西岸（第121次調査）、そして、最終年の2003年度は、西岸および南岸の残余の区域を調査した。最終年度は、これに加え、池底の内部を学術調査として追加調査した（第131次調査）。

各年度の調査概要是、奈文研の定期刊行物（『紀要』）において報告してきたが、2004年度に出土遺物や資料の整理をおこない、2005年度に発掘調査報告書を作成した。註

1) 『権原市史』権原市役所、1962年、985～986頁

2 報告書の作成

報告書は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部において作成した。出土遺物については、各年度の整理業務では消化しきれなかったので、2004年度（平成16年度）も継続し、2005年度（平成17年度）に発掘調査報告書を作成した。

1. 高所寺池改修工事にともなう発掘調査各次数と、担当者・調査員を掲げ、調査員は一括して列記する。

飛鳥藤原第113次調査、2000年（平成12年）度

　部長：黒崎直、担当：花谷 浩

飛鳥藤原第118次調査、2001年（平成13年）度

　部長：田辺征夫、担当：花谷 浩

飛鳥藤原第124次調査、2002年（平成14年）度

　部長：田辺征夫、担当：小谷德彦

飛鳥藤原第131次調査、2003年（平成15年）度

　部長：金子裕之、担当：山崎信二・渡部圭一郎

調査員：石橋茂登、市大樹、内田和伸、小澤毅、

　笕和也、加藤貴之、飛田恵美子、富永里菜、西

川雄大、西口壽生、箱崎和久、播磨尚子、福山

比呂美、前岡孝彰、松村恵司、安田龍太郎、渡

辺彦彦、渡邊淳子

事務は、櫻井雅樹、松本正典、吉岡佐和子、木寅貢司、山田昇司が担当した。

2. 本報告書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章花谷、第Ⅱ章1・2花谷3内田和伸、第Ⅲ章花谷・西田紀子（SE9330）、第Ⅳ章1竹本晃2石田由紀子3飛田恵美子4長谷川透、第Ⅴ章1内田2・3花谷、第Ⅵ章花谷

3. 遺構および遺物の写真撮影は井上直夫がおこない、岡田 愛が協力した。X線写真の撮影は村上 隆がおこない、小野澤亮子と辻 広美が補助した。木材の年代測定と樹種鑑定は光谷拓実と大河内隆之（埋蔵文化財センター）がおこない、藤井裕之の協力をえた。

4. 図面・図版・挿図・表の作成は各執筆者が分担し、赤松一恵、稻田登志子、乾 隆子、井上富美子、上原敏伸、小野木ルリ子、神野八重、木瀬智晴、佐々木聖子、澤田知香、玉木学恵、増田朋子、宮原智美の協力をえた。

5. 奈良文化財研究所および奈良国立文化財研究所のこれまでの刊行物については、次のように略した。機関名も「奈文研」と省略した。

『奈良文化財研究所紀要2005』 →『紀要2005』

『奈良国立文化財研究所年報2000－I』

→『年報2000-I』

『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV』 →『藤原報告IV』

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』 →『藤原概報26』

6. 遺構図の座標値は、世界測地系の平面直角座標系第VI系によった。2003年3月以前の日本測地系との座標変異などについては、「紀要2004」例言および本文第Ⅱ章第3節を参照。

7. 遺構は、その種別を示すアルファベット記号と、一連の番号とを組合せて表記した。本報告の遺構番号は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設定した地区割（『藤原概報24』133～142頁）のうち、5 A J地区での通し番号である。

SA（署） SB（建物） SC（回廊）

SD（溝） SE（戸戸） SF（道路）

SG（池） SK（土坑） SX（その他）

8. 藤原京の条坊は、最近の発掘調査および研修成果により、東西を中ノ道と下ノ道、北を横大路、南をおおむね阿倍山田道とする岸俊男説（以下、「岸説藤原京」とよぶ）を大きくこえることは確実である。また、岸説藤原京では、4坪を1坊として、16坪が1坊を構成する平城京の1/4規模の藤原京条坊を想定していたが、これについても、平城京と同じ構造と考える所説が有力視されつつある。しかし、本報告書では、対象となる京城の範囲が狭いことでもあるので、これまでの奈文研での用例にならい、岸説藤原京の条坊呼称を踏襲した。

9. 藤原宮内の地区区分と各地区的名称は、『藤原概報26』で提示した区分案を踏襲した。今回の調査地は、そのうちの「東南官衙地区」にある。

10. 7世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥I～V、とあらわす。詳細は『藤原報告II』参照。藤原宮の軒瓦式型分類番号は『平城京・藤原京軒瓦型式一覧』参照。

11. 内行花紋鏡について、櫻原考古学研究樋口隆康所長に貴重なご教示を賜った。また、小山庵寺出土瓦の資料調査には、櫻原考古学研究所の近江俊秀氏と山田隆氏、同研究所附属博物館大西貴夫氏のお世話をいたたいた。記して謝意を示します。

12. 報告書中の人名については敬称を略した。

13. 註は、各節ごとにまとめた。

14. 本書の編集は、調査部長安田龍太郎の指導のもと、花谷 浩がおこなった。

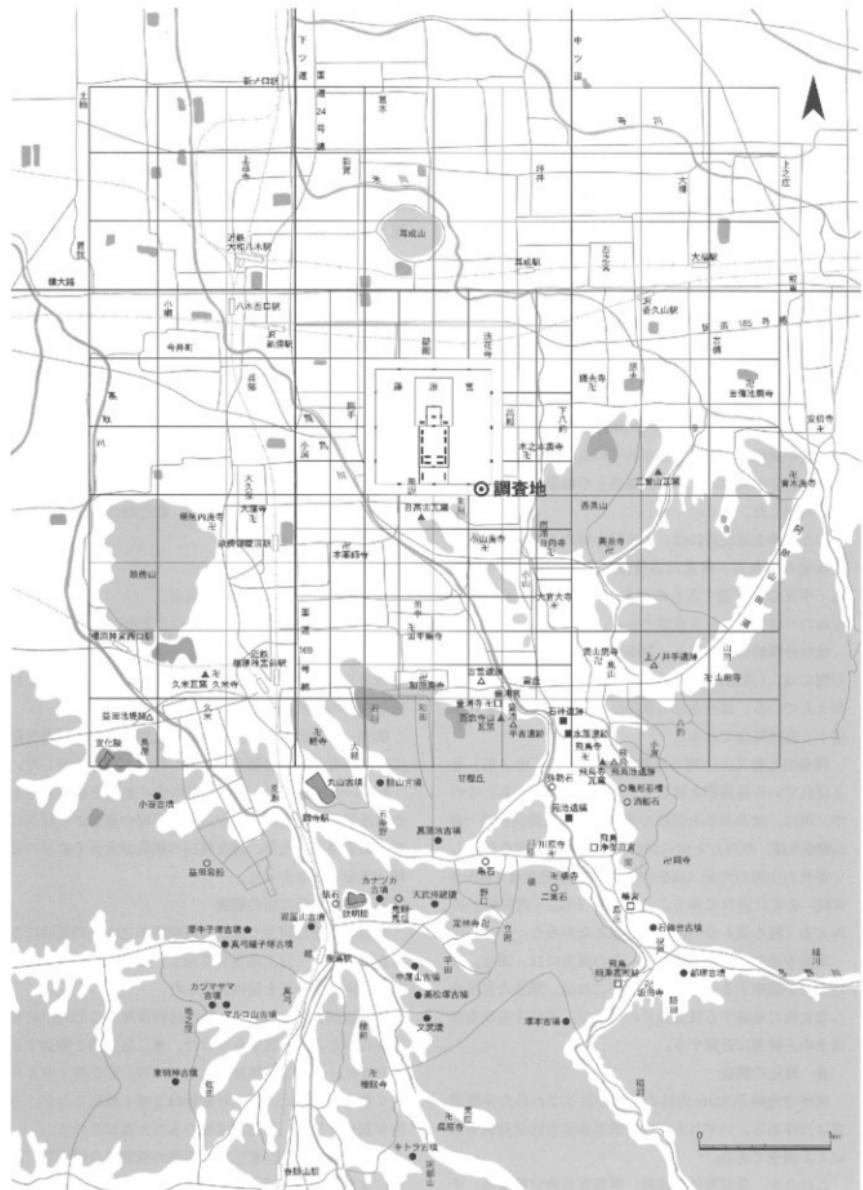


Fig. 1 調査地の位置

第Ⅱ章 調査

1 調査地の位置と既往の調査

A 調査地の位置

調査地は、藤原宮大極殿跡から南東に約600~800mを隔てた藤原宮跡の東南隅部にある。東方約500mには、香具山の山塊がそびえる。

調査地は、藤原宮東南隅に位置し、藤原宮の南面外郭施設と藤原宮東南官衙地区、そして藤原京左京七条二坊西北坪におよんでいる。

調査地の400m南方には、小山廃寺（通称・紀寺跡、藤原京左京八条二坊）がある。小山廃寺は、かつては、その伽藍中軸線が京の条坊とずれていた、と考えられてきたが、近年の検討によって、条坊と中軸線が合致することが判明した。

また、調査地北東には、7世紀中頃の瓦を出土する木之本廃寺がある。軒瓦は吉備寺廃寺と同様であり、丸瓦・平瓦にも共通するものがあるので、「高市大寺」所在地の一候補とされる遺跡である。

地形分類的に述べると、調査地の東方、香具山山麓との間には、「飛鳥面」とよばれる低位段丘面の北端部がおよんでいる。高所寺池の東岸は、この低位段丘面に隣接する自然堤防である。

飛鳥面と香具山山塊との間には、現在、「中ノ川」とよばれている河道が北流して、両者を隔てている。この中ノ川は、飛鳥酒船石遺跡の東麓から、現奥山集落（奥山廃寺寺域）の西方を北に流れ、大官大寺の西を迂回して香具山山塊の西側（現在の飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎東側）を北に流れてゆく。このルートは、「齊明記」にみえる「狂心渠」の一部とみて誤りかろう。

高所寺池の西岸に近接して、その西南には、現在、春日神社が鎮座する小丘陵がある。これは、飛鳥の雷丘から北北西に連続する浸食残丘の一つで、高所寺池西南部はその丘陵裾に近接する。

B 既往の調査

高所寺池周辺200m内外の範囲でおこなわれた発掘調査は12件ある。いずれも奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部による調査である。

これらを、藤原宮外郭施設、藤原宮東南官衙地区、そして藤原京左京七条二坊、の3つにわけ、概要を示す。

藤原宮外郭施設関係の調査

第13次調査は、農業用倉庫の新築工事にともない、高所寺池の西堤体の外側で実施された調査である。藤原宮期およびそれ以前の遺構は、後世の擾乱によって失われており検出できなかった。

第15次調査は、高所寺池東方約60mの地点において、藤原宮の東南隅を確認する目的で実施された学術調査である。掘立柱建物2棟、掘立柱塀4条、溝3条、土坑1基などを検出したが、宮大垣東南隅および外濠は検出できなかった。

第27~3次調査は、高所寺池東方約70mの地点でおこなわれた、家屋新築にともなう事前調査である。東面外濠とその内側の南北溝を確認したほか、7世紀後半（飛鳥IV）の井戸、12世紀代の土坑、弥生時代の土坑などを検出した。

藤原宮東南官衙地区の調査

いずれもごく小規模調査である。

第48~9次調査は、高所寺池の北方約60mの地点でおこなわれた農小屋建築にともなう事前調査である。7世紀前半の土坑1基と14世紀の南北溝1条を検出したが、藤原宮期の遺構はみつからなかった。

第66~14次調査は、高所寺池東北隅にある上げ橋改修工事にともなう事前調査である。柱穴1基を検出した。

第75~5次調査は、高所寺池のすぐ北側を走る道路下の水道管敷設替えにともない、藤原宮の東側から西側に至る間を調査したが、調査範囲の制約が大きく宮期の遺構は確認できなかった。

藤原京左京七条二坊の調査

今回の調査地南方では、市道飛脚木之本線の新設にともなって第74~75次調査を実施し、左京七条二坊の東南坪と西南坪の一部を発掘調査した。

第74次調査では、左京七条三坊西南坪から七条二坊東南坪にわたる調査区をもうけた。東二坊大路を検出するとともに、七条二坊東南坪においては、南北溝4条と井戸1基を確認した。掘立柱建物は3棟を検出したが、方位が振れており、藤原宮以降のものと推測された。

第75次調査では、東二坊坊間路の西側溝を検出し、さらに東南坪では井戸1基、西南坪では井戸2基と掘立柱建物1棟を確認した。

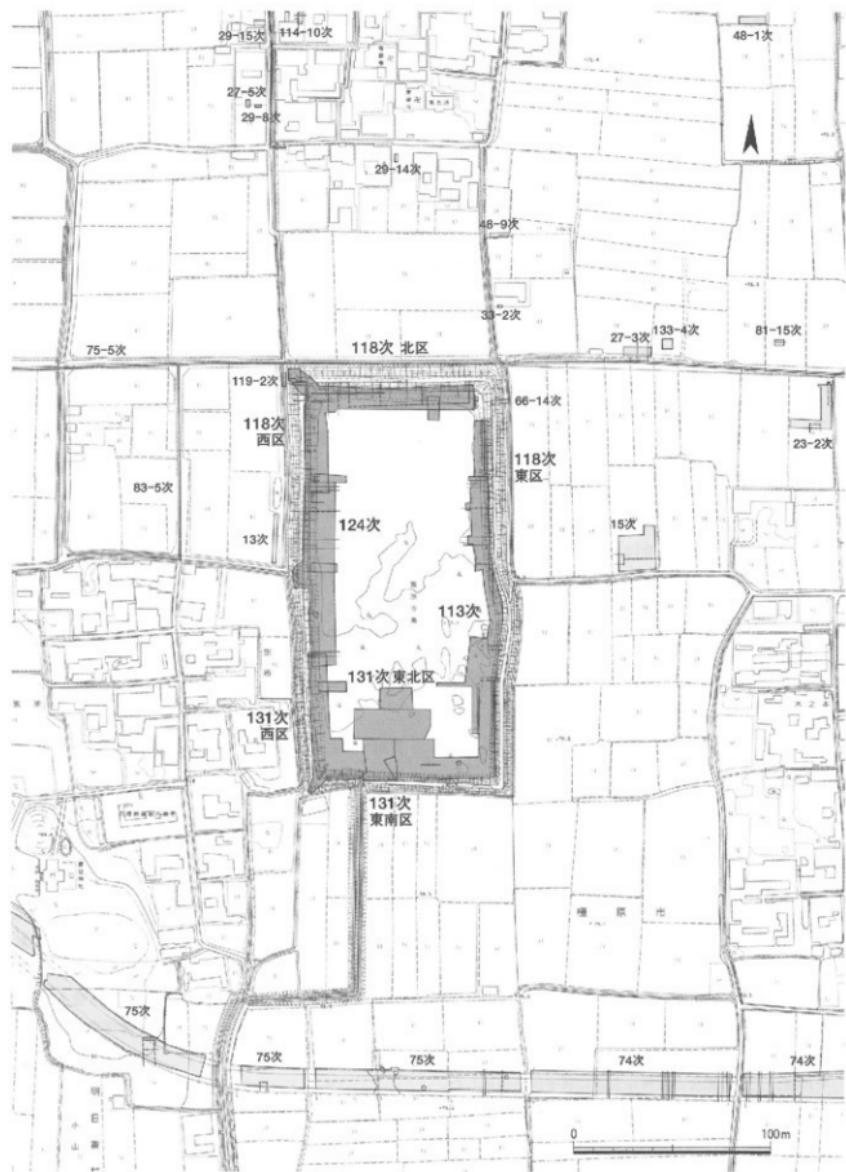


Fig. 2 調査区と周辺の調査地 1:2500

宮期の遺構をみると、東岸の七条三坊西南坪にくらべて建物規模や密度は小さい。しかし、七条二坊西南坪で小山廃寺同範の雷紋縁軒丸瓦 1 点や、同寺に関連する丸瓦・平瓦が出土しており、藤原京の宅地としてではなく、小山廃寺の寺域との関係をうかがう成果があがった。

さらに、第75次調査では、古墳時代（6世紀前半以前）の建物と堀、そして7世紀前半（飛鳥I～II）の建物や溝、井戸がみつかったほか、12世紀末～13世紀の居館跡が発見された。東西52.5m × 南北36.5mの長方形に濠が巡り、内部には建物、井戸、土器廐棄土坑などがあった。

このように、高所寺池周辺で過去におこなわれた調査では、藤原宮・京の時期だけでなく、その後、弥生時代から中世に至るこの地域の歴史が、発掘調査によって明らかにされつつある。

2 調査の概要

2000年度（平成12年度、第113次調査）は、当初、工事着手が翌年（工事は、平成13年度から15年度までの3カ年計画）とのことで、まず、高所寺池の堤体内側での地下遺構残存状況を確認する調査に入った。東西の池岸で3カ所ずつ、南北の池岸で1カ所ずつの合計8カ所に幅3mの試掘坑を設定した。試掘坑は池の中にもおよぶため、試掘坑の周囲を土壤改良した後、重機掘削をおこない調査に着手した。

その後、工事計画が変更され、2000年度中に一部工事が実施されることとなったため、その範囲にあたる南と東近南部の池岸の範囲を発掘調査することとなった。これとあわせて試掘坑の調査も実施した。

南岸を南区、東岸を東区とし、トレンチは東岸と北岸に1カ所ずつ（東・北トレンチ）、西岸に3カ所（北から西I～西IIIトレンチ）とした。調査の結果、六条大路および東二坊間路の側溝や、7世紀の掘立柱建物や井戸、中世期の井戸などを検出した。調査期間は2001年1月15日～4月5日、調査面積は2080m²。

2001年度（平成13年度、第118次調査）は、北岸を中心として、東西の岸の北部を含むコ字形の範囲、および、池の西北隅にある底樋改修工事に対応する範囲について調査に入った。

その後、工事の都合から西岸北部に調査区を追加した。この調査の過程で、底樋改修工事の範囲において大型の掘立柱建物（SE9600・9601）が確認された。

これを受けて遺構保全のために工事内容が変更され、それにともない調査区を一部拡張した。調査の結果、藤

原宮南面の掘立柱大垣と内濠、藤原宮東南官衙地区の掘立柱建物や堀などを検出した。調査期間は2001年10月29日～2002年2月20日、調査面積は2000m²。

また、取水口の工事にともなって池外側の水路改良工事の事前調査も実施した（第119～2次調査）。遺構は検出しなかった。調査は2002年4月3日、面積14m²。

2002年度（平成14年度、第124次調査）は、西岸の南部を調査して、藤原宮南面大垣と内濠のほか、7世紀代の遺構を検出した。また、洪水吐改修工事にともなう調査区をもうけて調査した。調査期間は2002年10月24日～12月20日、調査面積は1100m²。

2003年度（平成15年度、第131次調査）は、西岸南端と南岸の西部に調査区を設定するとともに、池内部にも調査区を設定して、これを学術調査として実施した。藤原宮期の遺構は削平を受けてみつかなかったが、古墳の周溝や中世期の井戸を検出した。調査期間は2003年10月21日～12月25日、調査面積は1960m²。

3 測量と地区割

A 测量

測地系の変更 2002年4月1日の改正測量法の施行に伴って、測量の基準が日本独自の基準（日本測地系）から世界標準である世界測地系に変更され、以後、公共測量はこれに準拠して実施することとなった。標高に関しては、実質的に著しい変化はなく、大きな問題はない。しかし、位置の基準となる平面直角座標系の原点は、東南方向へ緯度で約12秒、経度で約10秒移動し、移動量（座標変位量）が地域ごとに異なる。これまで、公共測量に準じて設置した3級基準点などを基準に日本測地系での調査をおこなってきた当研究所であるが、それへの対応が必要になった。

そこで、発掘調査等に世界測地系を導入するまで、施行後1年間の準備期間を設けることとし、その間に既設基準点の改測（再測量）・改算（旧観測値を用いた再計算）作業を実施して、座標変位量を確定すること、過去の日本測地系の成果は、今後、世界測地系へ読み替えること、などの基本方針を決定した。そして、発掘調査は2003年

Tab. 1 2級基準点No.173の新旧成果

基準点	X座標	Y座標	標高
日本系	-166,949.961	-17,044.252	79.416
世界系	-166,603.438	-17,305.828	79.416
差	+346.523	-261.576	

1月から世界測地系へ全面的に移行した。本報告の対象地では、調査の最終年度の第131次調査のみが世界測地系での調査にある。

当該地域では日本測地系の座標値を世界測地系に変換するためには、実用上、X座標で+346.5m、Y座標で-261.6mを加えればよいという結果を得ており、本調査に用いた基準点No.173の新II成果とも合致する（Tab.1）。

B 地区割

概要 奈文研では飛鳥藤原地区の発掘調査において平面直角座標第VI系に基づく地区割をおこなっていた。

この地区割りは小地区・中地区・大地区からなる。小地区は一辺3mの正方形で、それぞれX座標値・Y座標値ともに3の倍数からなるグリッドで構成される。

次に中地区は、原則として、東西222~228m（小地区74~76区画分）×南北54m（小地区18区画分）の区画である。中地区南辺をAライン、北へ3mごとにB、C、D…とし、東辺を10ライン、西へ3mごとに11、12、13…とする。すなわち、中地区東南隅を起点A10とし、小地区東南隅のアルファベット1文字と2桁の数字の組合せで表すグリッド名称を小地区名とする。その小地区名の前に中地区を表すアルファベット1文字を冠する。

大地区は東西672m（中地区東西3列分）、南北324m（中地区南北6列分）からなる。大地区名は先頭から時代を表す数字（飛鳥時代は5）、遺跡の種類を表すアルファベット（都城はA、寺院はBなど）、位置または遺跡名（飛鳥寺はAS、豐浦寺はTUなど）を示すアルファベット

Tab. 2 航空写真撮影一覧

調査次数	撮影年月日	フィルム種別	図化に用いた垂直写真
第113次	2001.2.21	カラー	4コース31カット
第118次	2001.11.27	カラー	3コース10カット
第118次	2002.1.29	カラー	3コース15カット
第124次	2002.12.13	カラー	1コース8カット

2文字の組合せからなる。

前述のように、世界測地系への移行に伴う座標変位量は3の整数倍とは一致しないため、それぞれの座標系に基づく方眼は、新旧2つの地区割でそれを生じることになった。飛鳥藤原地域でのずれの大きさは、

$$X座標が、+346.5 - (3 \times 115) = +1.5m,$$

$$Y座標は、-261.6 - (3 \times 87) = -0.6m,$$

であるため、日本測地系に基づく旧地区杭の南東（南へ1.5m、東へ0.6m）に、世界測地系に基づく同名の地区杭が設定されることとなった（Fig.3・4）。

基準点測量と実測 本報告に関わる発掘調査で使用した基準点の概要を以下に記す。

調査対象地の高所寺池北西隅の堤上には、第66~14次調査では、当調査部が設置した基準点No.8があり、基準点No.1を後視、調査地脇の新設点を前視とした開放トランバースを行い、これを基準点としている。

また、調査対象地の高所寺池の北堤上には、当調査部が設置した2級基準点No.173がある。

第113・118・119~2・124次の各調査では、この基準点を既知点とし、観測点となる移動局の座標をリアルタイムで得られるRTK-GPS法で、小地区の地区杭や遺構面に実測の基準となる座標値をもつ基準線を設定し、実測の基準としている。

第131次調査では、調査区を囲む3個所の2級基準点を既知点とし、GPS短縮スタティック法により調査区隣接地に2個所の基準点を新たに設け、その点を用いてトータルステーションで基準線を設定し、小地区の地区杭や実測の基準とした。

実測図の縮尺はいずれも1/20で、平面図作成後、標高を記入した。標高は、水準点から標高をとりつけている基準点No.8・No.173の標高を基準としている。

航空写真測量と編集図 調査時には標定点を写し込んだ航空写真測量も実施しており、各調査区ともこれを図化して遺構平面図とした。各次数ごとにおこなった図化画面を実測図により校正し、それらを接合した編集図を作成した。本報告の平面座標は世界測地系で表示し、日本測地系の数値は一部を示すにとどめた。

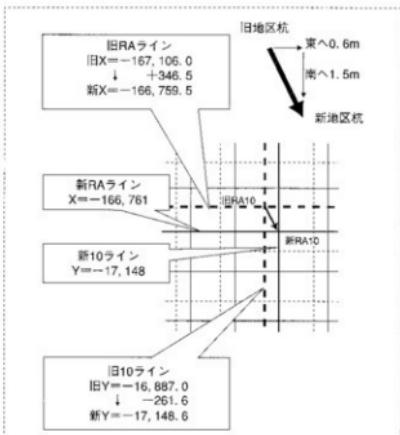


Fig. 3 新旧地区杭の位置関係

Tab. 3 地区割の起点の座標値一覧

日本測地系							
大地区	中小地区	X座標	Y座標	大地区	中小地区	X座標	Y座標
5AJG	FA10	-166,944	-17,115	5AJC	UA10	-166,944	-16,887
5AJH	AA10	-166,998	-17,115	5AJD	PA10	-166,998	-16,887
5AJH	BA10	-167,052	-17,115	5AJD	QA10	-167,052	-16,887
5AJH	CA10	-167,106	-17,115	5AJD	RA10	-167,106	-16,887
5AJH	DA10	-167,160	-17,115	5AJD	SA10	-167,160	-16,887
5AJH	EA10	-167,214	-17,115	5AJD	TA10	-167,214	-16,887

世界測地系							
大地区	中小地区	X座標	Y座標	大地区	中小地区	X座標	Y座標
5AJG	FA10	-166,599	-17,376	5AJC	UA10	-166,599	-17,148
5AJH	AA10	-166,653	-17,376	5AJD	PA10	-166,653	-17,148
5AJH	BA10	-167,707	-17,376	5AJD	QA10	-167,707	-17,148
5AJH	CA10	-166,761	-17,376	5AJD	RA10	-166,761	-17,148
5AJH	DA10	-166,815	-17,376	5AJD	SA10	-166,815	-17,148
5AJH	EA10	-166,869	-17,376	5AJD	TA10	-166,869	-17,148

Fig. 4 高所寺池調査地とその周辺の地区割 1:3000
(括弧内は日本測地系)

第Ⅲ章 遺構

4カ年4回にわたる発掘調査で、古墳時代から近代に至る数多くの遺構を検出した。以下では、これらを、藤原宮に関連する遺構、藤原京に関連する遺構、その他の古代の遺構、古墳時代の遺構、中世以降の遺構にわけて報告する。

1 藤原宮の南限施設

第118次調査東区および第124次調査区において、藤原宮南面大垣および外濠と内濠を確認した。これらは、藤原宮南面中門（朱雀門）以東で、はじめて確認された藤原宮の南限施設である。

南面大垣SA2900 (PLAN 4・5、PL.3・4、Fig.5) 第118次調査東区と第124次調査区で、それぞれ柱穴4基・3間分ずつを確認した。柱間約2.7m(9間)の掘立柱跡である。柱掘形は一辺約1.5m前後の方形で、深さ0.7~1mが残っていた。柱はすべて北または南に抜き取られていた。

南面外濠SD501 (PLAN 4・5、PL.3~5、Fig.5) 南面大垣の南17mにある素掘の溝であり、断面形は台形である。東岸の第118次調査東区では、幅4.5m、深さ1.2mの規模、西岸の第124次調査区では、幅4.5~4.7m、深さ0.7mの規模であった。埋土は、砂や粗砂を主体とする流水堆積層であって、埋め立てられた痕跡に乏しかった。

少量の土器と瓦が出土した。第124次調査区の外濠SD501最上層には暗灰色粘質土が堆積し、その上面から、ほぼ完形の丸瓦と平瓦が敷き並べた状態で出土した。

南面内濠SD502 (PLAN 4・5、PL.3~5、Fig.5) 南面大垣の北約12mにある素掘溝である。第118次調査東区では、幅2.7m、深さ1.3mの規模で、溝の断面形はV字形をしていた。また、第118次調査西区では、幅2.0m、深さ1.1mの規模で、断面形状はともに台形であった。

溝内の下層には、青灰色砂を主体とする厚さ0.2~0.4mの流水堆積層があり、少量の土器と瓦が出土した。上層には黄灰褐色砂質土が堆積していた。これは、内濠を埋め戻した土層であろう。

掘立柱建物SB9750 (PLAN 4、PL.5) 第124次調査区の南面大垣SA2900と内濠SD502との間で検出した。梁行2間で、梁行・桁行とも10尺等間の東西棟建物。西妻柱穴は確認したが、東は池で失われ、建物の全長は不明である。柱掘形は一辺約1.2m、残存した深さは0.7mである。

北側柱の柱掘形は、内濠SD502の南岸に近接しており、掘形の北壁は垂直ではなく傾斜して掘られている。おそらく、内濠の南岸を壊さないように配慮して柱掘形が掘削されたためであろう。とするならば、SB9750は内濠開削後に建設された可能性が大きく、両者は併存していると推測できる。

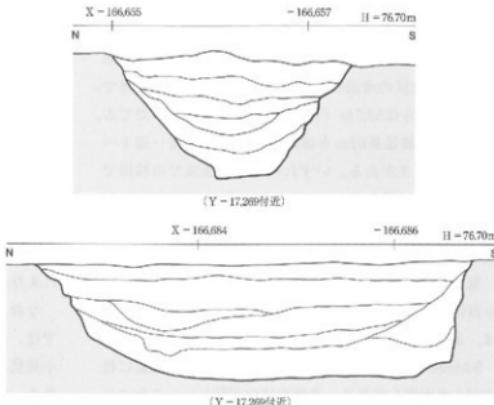
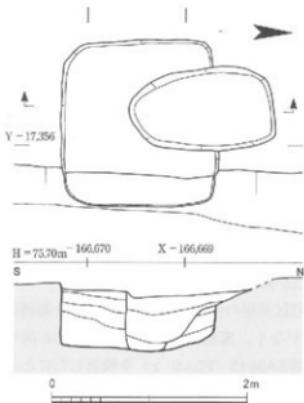


Fig. 5 大垣柱穴(左)と内濠(右上)・外濠(右下) 1:50

このSB9750の南側柱筋と南に約1.5m（5尺）を隔てた位置に、素掘の東西溝SD9745（PLAN 4）がある。幅約1.2m、深さ約0.3mの規模で、溝底に流水痕跡とみられる砂が堆積する。

SD9745は、南面大垣から計ると、その北約3m（10尺）の位置にもあたり、大垣の北雨落溝の可能性も想定される。しかしながら、大垣の南側に同様の溝が確認できることと、さらに、過去の調査で大垣雨落溝の検出例がないことから、SB9750の雨落溝とみるのが妥当であろう。

2 藤原宮東南官衙地区関連遺構

宮の南限施設以北は、東南官衙地区と仮称している地区に相当する。この地区は、東を東面大垣、南を南面大垣、西を南面東門から北に延びる宮内道路（推定）そして北を東面南門から西に延びる宮内道路（推定）で囲まれた一郭である。現状でいえば、高所寺池北部から高殿集落南端部におよぶ範囲にある。

東南官衙地区については、過去にまとまった面積の発掘調査がほとんどおこなわれておらず、内部の状況がまったくわかつていなかった。第118次調査区は、北区を中心としてその多くがこの地区に及んでいて、そこで、いくつか重要な知見をうることができた。

検出した遺構には、掘立柱建物3棟と掘立柱廻6条のほか、溝や土坑がある。これらと重複して、宮内先行系坊間係の遺構も検出したが、これらについては、後にまとめてとりあげる。

A 区画堀

第118次調査北区で、掘立柱東西堀1条とこれに接続する掘立柱南北堀4条を検出した。

東西堀SA9580（PLAN 2・3、PL.6、Fig.6）は、第118次調査北区の南辺に平行して検出された掘立柱堀で、南面大垣からは52.7m（150大尺、180小尺）をへだてる。東西23間、總延長62mを確認した。柱掘形は一辺1～1.5mの大きさがある。いずれの柱穴も池底での検出であったため、深さは0.3～0.5mしか残っていなかった。柱間は、約2.7m（9尺）等間である。一部、第113次調査時に土壤改良をおこなったため柱穴が欠けている。

東西堀SA9580の西端は、南北堀SA9605との接続部より西には柱穴がないので確定する。西端の柱穴の東隣には、より新しい柱穴が重複していた。

SA9580の東端では、南北堀SA9575と交わる位置に柱穴が2基重複しており、東側の柱穴が新しい。これより東は、池の上げ橋改修工事にともなう攪乱によって遺構

面が失われていたため、柱穴が続くのかどうかは確認できなかった。また、後述する、東二坊坊間路西側溝との重複部分も同様に破壊されていて、確認できなかった。

なお、これより東方で1992年におこなった調査（第66～14次調査）では、東西堀SA9580の東延長に近い位置で柱穴1基を確認した（『藤原概報23』）が、柱筋が若干ずれていて一連の柱列にはならない可能性が高い。

東西堀SA9580に接続する南北堀は4条ある。東から順に述べる。

南北堀SA9575（PLAN 3、PL.6、Fig.6）は、第118次調査北区の東端にある掘立柱堀である。東西堀SA9580の東端の柱穴につながる。柱穴2基を検出し、調査区外の北に延びる。柱掘形は一辺1.1～1.2m。北側の柱掘形は深さは0.7mあり、南側の柱掘形は深さ0.5mであるが、柱抜取穴は深さ1mある。2基とも柱を東へ抜き取っている。

南北堀SA9585（PLAN 3、Fig.6）は、南北堀SA9575の西23.8mにある掘立柱堀である。東西堀SA9580の柱間でいうと、西に9間のところである。柱穴2基を検出した。SA9580との接続部から南を第113次調査の際に土壤改良のために、接続部以南の状況は不明である。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さは0.7～1mある。柱は2基とも、ほぼ真上に抜き取られていた。

南北堀SA9595（PLAN 2）は、南北堀SA9585の西21.7mにある掘立柱堀である。東西堀SA9580の柱間では、SA9585から8間分、西に位置する。柱穴2基を確認したところである。柱掘形は一辺1.2m、柱間は約2.7mである。

南北堀SA9605（PLAN 2）は、東西堀SA9580の西端に接続する掘立柱堀である。SA9580の北で柱穴を2基検出した。南北堀SA9595とは15.9mを隔てる。東西堀SA9580の柱間では6間分である。

南北堀SA9605と東西堀SA9580が接続する位置より南は、調査できなかつたため、ここで両者がし字形につながるのか、南北堀SA9605が南に延びてT字形に接続するかは確定できない。

以上の南北堀4条のうち、東西両堀のSA9575とSA9605は、約62mを隔てる。これは、175大尺（210小尺）にあたる可能性が高い。

なお、掘立柱区画堀の内側（北側）では、調査範囲内では、建物跡がなく、南北堀SA9595とSA9605の間で、小規模な東西堀SA9615（PLAN 2）を検出したところである。柱穴は、一辺約0.5m、深さ0.5mの方形の柱掘形をもち、柱間は約1.5mである。西端の柱穴は、南北堀

SA9605の柱抜取穴に壊されている。

B 挖立柱建物 (PLAN 2、PL.7、Fig.6)

区画塀の西方においては、比較的規模の大きい掘立柱建物2棟が逆L字形に配置されていた。掘立柱東西棟建物SB9600と、掘立柱南北棟建物SB9601である。

掘立柱建物SB9600は、東妻柱筋と北側柱筋の柱穴を検出した。東妻柱穴4基が並ぶので、南北付き東西棟建物と推定する。柱間は、梁行・桁行とも約2.7m(9尺)である。身舎の柱掘形は一辺1.2~2m、深さ1.1~1.3mある。東南隅にある南北柱穴の柱掘形は、一辺1.3m、深さ0.7mでやや浅い。柱掘形の底に建築部材の断片を発掘として掘えていた。なお、柱はすべて抜き取られていた。北側柱筋の東から2間目の柱抜取穴は、底近くで柱痕跡状となり、それによると柱径は30cmはある。この柱抜取穴からは、ほぼ完形の土器器皿が出土した。

掘立柱建物SB9601は、SB9600の東側にある南北棟建物である。梁行2間、桁行5間以上、柱間約2.7m(9尺)の規模だが、妻柱の位置は不明である。柱筋は、SB9600と揃っている。柱掘形は一辺約1.2m、深さ0.8~

1.0mある。柱はすべて抜き取られており、東側柱は西へ、西側柱は東へ抜かれていた。西側柱の柱穴抜取穴で判断すると、柱の径は20~25cmと推定できる。

建物SB9600の東妻柱筋とSB9601の西側柱筋とは、約9m(30尺)を隔てる。また、SB9601と南北塀SA9605との間隔は約6m(20尺)である。

東西棟建物SB9600の北には、掘立柱南北塀SA9636がある。柱掘形の一辺1.2m、深さ0.5mあり、柱間約1.8m(6尺)の解である。南端の柱穴には、直径20cmの柱材が残っていた。SA9636は、建物SB9600の東妻柱から2本目の北側柱と柱筋が揃うように思う。

建物SB9600の南方、約40mを隔てて、掘立柱東西棟建物SB9648がある。第118次調査西区の西壁に沿って、柱穴3基が南北に並んでいるので、建物の東妻柱列と判断した。柱掘形は一辺1.2~1.6m、深さ1mの規模である。柱間は2.4m(8尺)等間。柱筋が、北にある東西棟建物SB9600と揃うようにもみえる。だが、柱掘形の全体を検出して柱位置を確定させるに至らなかったので、可能性を指摘するにとどめる。

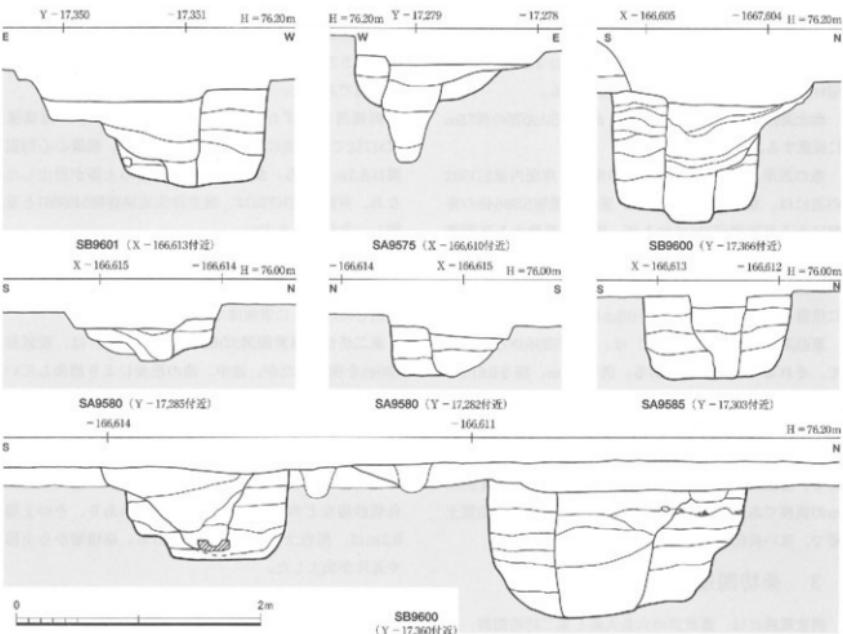


Fig. 6 建物・塀の柱穴断面図 1:40

C その他の遺構

第118次調査東区の北部には、東西溝SD9560と、L字形に接続する南北溝SD9561がある。

東西溝SD9560 (PLAN 5, PL.8) は、溝の幅16m、内濠SD502に近接し、両者の心心間距離は5.4mである。

南北溝SD9561 (PLAN 5) は、幅13~15m、深さ0.4~0.6mあり、総延長約26mを検出した。水は、SD9560を西へ、SD9561を北に流れる。

東西溝SD9560および南北溝SD9561南端部には、灰白色の砂が堆積し、激しい流水状況をうかがわせるとともに、そのなかには大量の瓦が埋没していた。また、SD9561からは、ほぼ欠損のない軒丸瓦6274型式B種と6275型式A種が各1点出土した。

なお、東西溝SD9560と内濠との距離（心心距5.4m）は、第118次調査西区にある掘立柱東西棟建物SB9648の南側柱筋と内濠溝心との距離に近い。

第118次調査北区には、東西溝SD9633と南北溝SD9577がある。

東西溝SD9633 (PLAN 2) は、溝幅1~2m、深さ約0.2m。土器のほか、中国製内行花紋鏡片が出土した。掘立柱建物SB9600およびSB9601と重複し、それらより古い溝である。次節でのべる六条条間路SF4750の南側溝SD4752とは、溝心で約3.5~4mを隔てる。

南北溝SD9577 (PLAN 3) は、南北溝SA9575の西7.5mに位置する。溝幅約12m。

池の西岸、第118次調査西区の南端、南面内濠SD502の北には、東西溝が2条ある。東西棟建物SB9648の南側にある東西溝SD9645および、建物と重複する東西溝SD9646である。

東西溝SD9645 (PLAN 2) は、内濠SD502の北2.2mに位置し、溝幅約1m、深さ0.3mの規模である。

東西溝SD9646 (PLAN 2) は、建物SB9648と重複して、それより新しい溝である。溝幅1.4m、深さ0.6mの規模である。2条とも土器などの遺物は出土しなかった。

このほか、比較的の規模の大きな土坑として、掘立柱東西棟建物SB9600の北に隣接する、溝状の土坑SK9637がある。土坑SK9637は、長さ2m以上、幅1.6m、深さ0.6mの規模である。埋土は、暗褐色ないし暗灰色の粘質土層で、薄い炭化物層や腐食物層をはさんでいた。

3 条坊関連遺構

調査範囲には、藤原京の六条大路と東二坊坊間路、そして、藤原宮内先行条坊の東二坊坊間路と六条条間路の

存在が予想された。調査の結果、これらを第113・118・124次の各調査区において確認した。

六条大路SF2910 (PLAN 6・7) 第113次調査区で北側溝SD2915（長さ約7m）と南側溝SD2909を、また第124次調査区でも北側溝SD2915（長さ約5m）を検出した。

六条大路北側溝SD2915 (PLAN 6・7, PL.9) は、溝幅2.3m、深さ0.8mあり、下層は砂と粘土が互層をなす流水堆積層である。第124次調査区では、溝幅2.4m、深さ0.6mの規模である。灰褐色粘質土と灰褐色砂質土が堆積し、最終的に黄灰色粘質土で埋め立てられていた。

六条大路南側溝SD2909 (PLAN 9) は、第113次調査区で確認したが、第131次調査西区では確認できなかった。溝幅2m、深さ0.35mの規模で、北側溝よりも浅い。

第113次調査区での、六条大路南北両側溝の心心間距離は16.2m、路面幅はおよそ14mである。

六条条間路SF4750 (PLAN 2) 第118次調査北区において、南北両側溝を検出した。ともに素掘溝である。

六条条間路北側溝SD4751 (PLAN 2) は、北区拡張区で長さ2mを確認した。溝幅0.4m、深さ0.3mである。

六条条間路南側溝SD4752 (PLAN 2) は、北区の西部で長さ30mにわたって検出できたほか、東部でも南岸のみを長さ20分検出した。溝幅1.0~1.2m、深さ0.2~0.3mの規模であった。

両側溝はいずれも、灰褐色土を埋土とし、南側溝SD4752では溝底に粗砂の堆積を認めた。側溝心心間距離は6.3mである。側溝からは、少量の土器が出土した。なお、南側溝SD4752は、掘立柱南北棟建物SB9601と重複し、それよりも古い。

東二坊坊間路SF6030 (PLAN 9, PL.9) 第113次調査東区と第118次調査東区・北区において、東西両側溝を検出した。ともに素掘溝である。

東二坊坊間路東側溝SD6031 (PLAN 9) は、総延長180mを検出したが、途中、池の浸食により消失していたり、調査区外に位置したため、検出できなかったところもある。六条大路以南では、溝幅0.6~0.8m、深さ0.15~0.2mの規模である。六条大路と南面大垣との間では、溝幅1.6m、深さ0.5mの規模である。下層には褐灰色粗砂層などの流水堆積層が厚さ0.3mあり、その上層0.2mは、褐色土の埋め立て層である。堆積層から土器や瓦片が出土した。

東二坊坊間路東側溝SD6031と外濠SD501との交差部分では、外濠の南岸において、東側溝SD6031から外濠にむかって粗砂が流れ込んだ状態を認めた。これに対し

て、内濠SD502との交差部分では、そのような状況が確認されず、東側溝SD6031を埋め立てたのちに内濠が開削されたと推測できた。

東二坊坊間路西側溝SD6032 (PLAN 9, PL. 9, Fig. 7) は、第113次調査区と第118次調査北区の東端で確認した。

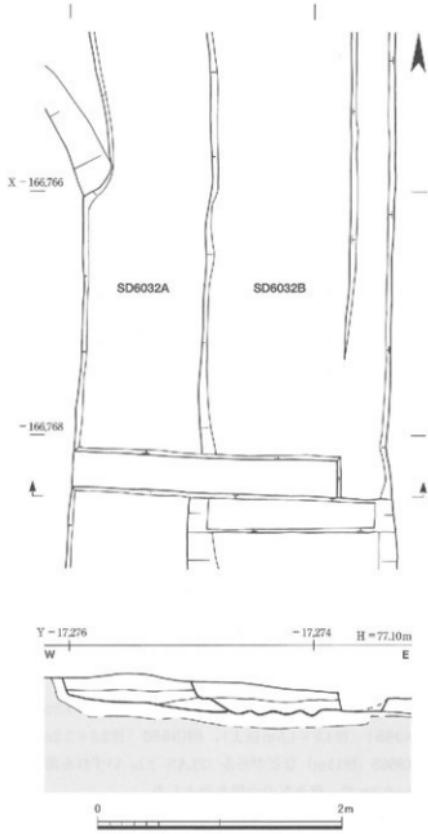
第113次調査区の南部で確認した東二坊坊間路西側溝SD6032は、溝心をずらした新旧2条があった。西側にあるSD6032Aが古く、東側にあるSD6032Bが新しい。溝心で比較すると、1.2mのずれがある。

東二坊坊間路西側溝SD6032Aは、溝幅1.1m、深さ0.3mの規模で砂の混じる褐色粘質土を埋土とする。遺物は

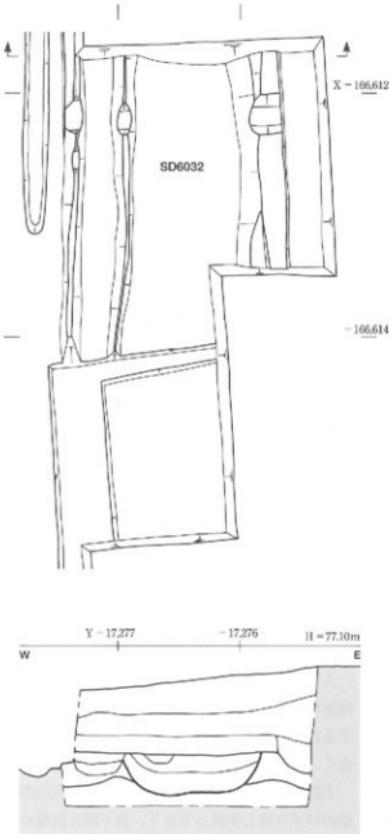
ほとんど出土しなかった。東側溝との溝心・心間距離は8.1mである。

掘り直し後の東二坊坊間路西側溝SD6032Bは、溝幅が最大で1.6mあり、深さも最大0.8mである。深い部分には下層に流水堆積層があり、多量の土器が出土した。そのなかに、「大鳥評」と箋書きされた須恵器杯B蓋がある。東側溝との溝心・心間距離は6.9mである。

第118次調査北区の東端で検出した東二坊坊間路西側溝SD6032には、掘り直しの痕跡を認めなかった。東岸が調査区外にあり、溝幅は確定できない。幅1.1m以上、深さは0.3mである。



西側溝SD6032A・B(第113次)



東二坊坊間路西側溝 1:40

西側溝SD6032(第118次北区)

4 藤原京左京七条二坊の遺構

第113次調査区と第131次調査東南区が、藤原京左京七条二坊東北坪にふくまれるが、第131次調査東南区は、高所寺池の水口に近いこともあって削平が著しく、藤原宮の時期を含め7世紀代の遺構は、残っていなかった。第113次調査区で検出した遺構について述べる。井戸、溝と掘立柱解がある。

井戸SE9330(PLAN 9、PL10、Fig. 8)は、東二坊坊間路西側溝SD6032の西約10m、調査区南辺から約10mのところにある、横板組の五角形井戸である。掘形は直径約25mの円形平面で、検出面からの深さは2m。

井戸枠は差し渡しの径が1.5mあり、下の2段が原位置を保っていた。井戸の中には、上段の枠板6枚が捨て込まれていた。うち2枚は腐朽が著しかったため、取り上げができなかった。井戸の底には川原石が敷かれ、埋土を掘り上げるときれいな水が湧き出した。

最下段の井戸枠5枚(東北面をA板、以下時計回りにB～Eとよぶ)は組手接で、A板が上下に割れており、他の4枚は完形に近い。A板とC板(東南面)は両端を四字形、東面B板(東面)とE板(西北面)両端を凸字形、D板(西南面)はC板側を凸字形、E板を凹字形に造り出す。枠板は全長が103～106cm、高さは62～64cm、厚さは4～5cmで、五角形の一辺の内法は93～96cmである。檜材で、大径の老松木から木取りされている。A板とC板が樹芯に近い。

枠板にはチョウナ、ノコギリ、ノミによる加工痕を確認できる。D板とE板の井戸の外側にあたる面にはチョウナ痕がよく残る。井戸の内側の面は外側の面にくらべ加工痕が明瞭ではないが、同様にチョウナ仕上げとみられる。木口はノコギリで切断した痕跡があり、組手をつくり出す際にノミも併用しているとみられる。木口は組手の接合面を五角形の角度にあわせて斜めに加工し、その他の面は、ほぼ直角に仕上げる。ただし、B板のA板側凸部のみはヨキで斜めに削った組手上げである。

A板のB板側の下寄りには長方形の釘穴がある。釘穴は五角形の組手に近い角度で貫通している。仕口を固定するための釘穴と思われるが、対応するB板には釘穴がなく、実際には使用されなかつたようである。

上段の枠板は欠損・風蝕が大きいが、木口の段欠き・枘のつくり出しが残っており、最下段と同様の三枚組接とみられる。寸法も最下段の枠板とほぼ等しい。上下の枠板は突付けて重ねている。

井戸枠内の埋土から、土器や瓦、木製品が出土した。出土土器は、土師器杯A・C、皿、高杯、鉢、甕、須恵器杯A・B、杯B蓋、平瓶、長頸壺、甕などがある。これらの土器の時期は、7世紀後半から藤原宮期(飛鳥IV～V)である。井戸底から出土した近江産の長胴甕は、頸部から体部表面に籠形の痕跡が残っており、釣瓶として使われたことがわかる。

東西溝SD9323(PLAN 9)は、第113次調査区の南辺に沿った位置にある素掘溝である。南岸が調査区外にあり、調査区内で幅1m分を検出した。深さは0.4～0.5m。溝の位置は、六条大路路面心から南約60m、六条大路南側溝SD4752から南約52mなので、七条二坊東北坪を南北に二分する区画溝の可能性もある。埋土上層には灰褐色沙質土、下層には青灰色粘土が堆積していた。7世紀後半から藤原宮期にかけての比較的多量の土器や瓦が出土した。

掘立柱東西堀SA9331(PLAN 9)は、井戸SE9330の西にある掘立柱解である。6間分を検出した。柱掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形ないし隅丸長方形で、深さは0.3～0.5mである。柱間は1.8～2.1m(6～7尺)と不揃いである。柱は抜き取られたものが多い。

5 宮直前期までの7世紀代の遺構

各調査区では、出土した土器の型式や、遺構の重複関係などから、藤原宮以前の7世紀代と判断できる遺構をいくつか検出した。これらを、おおむね、新しい順に述べる。

A 7世紀後半から藤原宮直前期までの遺構

おもに飛鳥IVの土器を出土した遺構をまとめる。

第118次調査東区北端から約5m南に東西溝SD9567がある。幅1m、埋土は礫混灰茶色沙質土。土坑SK9568と重複し、それより新しい。飛鳥IVの土器が出土した。

第118次調査北区東部に、東西溝SD9576(PLAN 3)がある。溝は東で北に振れる。南北堀SA9575と重複し、それより古い。溝幅1.5m、深さ0.5mで、埋土は炭粒を含む黒褐色土。飛鳥IVの土師器甕などが出土した。

第118次調査西区には、土坑SK9650(径1.5×1.2m)、SK9651(径1.5×1.5m以上)、SK9660(径2.4×2.2m)、SK9663(径1.5m)などがある(PLAN 2)。いずれも深さ0.2～0.3mで、飛鳥IVの土器を出土した。

第124次調査区には、直径3×2.2mの隅丸台形の土坑SK9731(PLAN 6)がある。深さ0.4mで、完形に近い土師器小型甕が出土した。時期は飛鳥IVである。

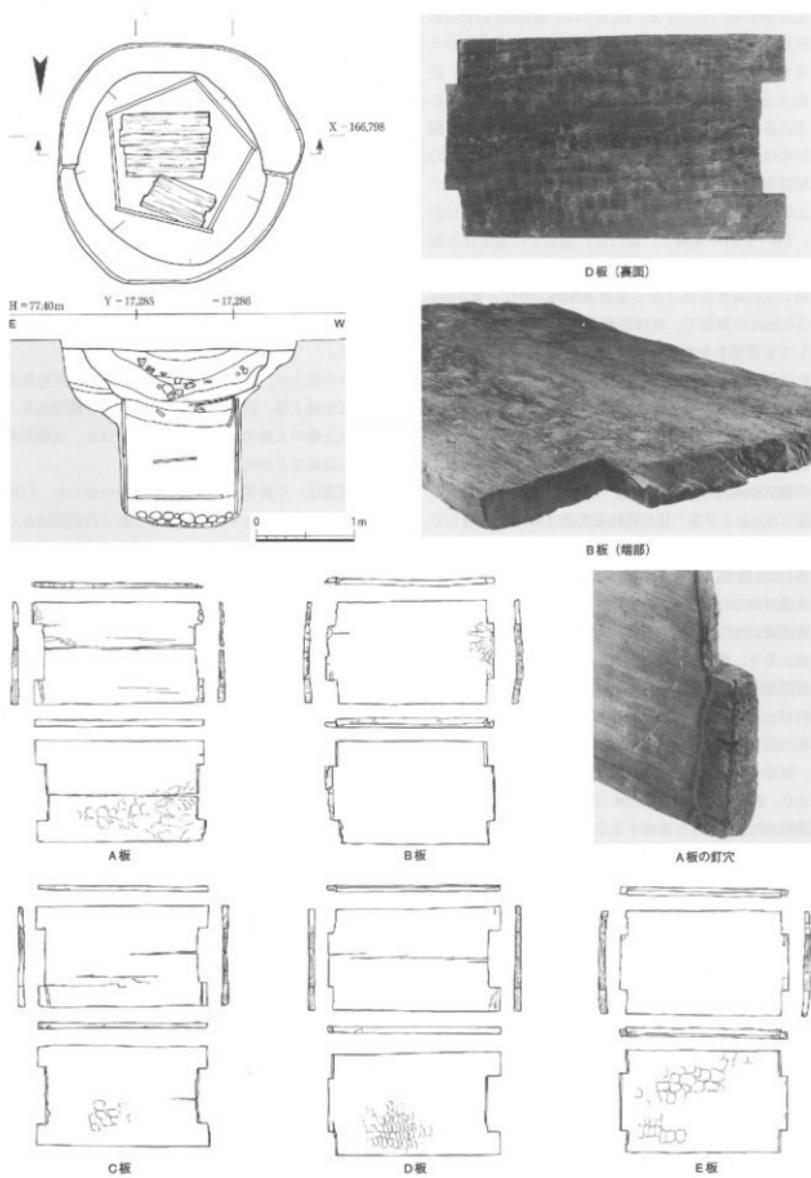


Fig. 8 井戸SE9330と最下段井戸枠材 1:30 (造構のみ 1:50)

土坑SK9740 (PLAN 6、PL.10) は、第124次調査の拡張区西南隅にある。全体の約1/4を検出したが、そのうち東半分は、擾乱によって削平されていた。土坑は、直径約3mの円形をなすようで、深さは約0.9mである。埋土に多少の炭を含む。土器、建築部材のはつり屑、縁羽口のほか、木簡削屑のほか、飛鳥IVの土器が出土した。藤原宮造営にともなう廃棄土坑であろう。

土坑SK9743 (PLAN 6) は外濠の南岸から南3mにある。1.6×1mの規模で、梢円形。飛鳥IVの把手付土師器壺が出土。

第124次調査南部にある南北溝SD9730は、幅0.5m、深さ0.25mの規模で、ほぼ同規模の東西溝SD9729と接続してL字形をなす。SD9730は土坑SK9731と重複してそれより古い。7世紀後半の遺構であろう。

B 7世紀中頃の遺構

7世紀中頃と確定できた遺構は、素掘溝に限られる。

第118次調査東区では、藤原宮南面外濠SD501の南に、斜行溝SD9540がある。溝幅0.6~0.8mの規模である。南面外濠SD501および東二坊間路東側溝SD6031と重複しており、それより古い。飛鳥Iの土器が少量出土した。

第124次調査区の南部では、ほぼ正方位をとる2条の東西溝SD9720とSD9725を検出した。

東西溝SD9720 (PLAN 6) は、六条大路北側溝SD2915の南にあり、溝幅2.2~3.0m、深さ0.25mの規模である。

東西溝SD9725 (PLAN 6) は、SD9720から心心問距離で約19m北にある。溝幅2.7m、深さ0.3mの、よく似た規模の溝である。溝堀土上部には、黄灰色砂質土が堆積し、埋め立てられた状況がみてとれた。

また、斜行溝SD9722・9724 (PLAN 6、PL.10) は、東西溝SD9720・9725と重複する位置にあり、それより古い溝である。両者はほぼ平行し、東にある斜行溝SD9722は、溝幅1.2m、深さ0.6m、西にある斜行溝SD9724は、溝幅1.5m、深さ0.6mのきぼである。とともに、溝の断面形はV字形をしている。須恵器壺H、土師器杯C・Hなど、飛鳥Iの土器が出土した。

6 古墳時代の遺構

第113次調査区と第118次調査東区と北区、そして131次調査区において、古墳時代の遺構を検出した。

掘立柱建物SB9333 (PLAN 9、PL.11) は、北で西に18度ふれる方位。桁行4間（総長8.8m）、梁行3間（総長4.6m）。柱掘形は一辺0.6~0.8m、深さ0.3~0.5mである。

東二坊間路路面と重複して斜行溝SD9340・9341

(PLAN 9) がある。SD9340は溝幅2m、SD9341は溝幅0.5mで両者ほぼ平行する。

第113次調査区北部の六条北側溝SD2915と重複する位置に2条の溝、SD9350とSD9351 (PLAN 7) がある。とともに5世紀後半の土器が出土した。

第113次調査区の西端近くに斜行溝SD9334がある。溝幅は最大で1.8mあり、深さ0.3mある。須恵器壺が出土した。緩く湾曲するので古墳周溝の可能性もある。

井戸SE9570 (PLAN 5、PL.11) は、直径約2mある円形平面の素掘の井戸である。掘形の上部は漏斗状に開き、下部はほぼ円筒形をしている。井戸底は湧水層の灰色砂礫層に達する。検出面から井戸底までの深さは1.1mである。

井戸の埋土は、下層から、腐植物混じり暗灰色粘土層、暗茶灰色粘土層、炭混じり黒褐色土、の3層である。暗灰色粘土層の上面で、須恵器大型壺のほか、土師器高杯、溝式土器鉢などが出土した。

大型壺は、1個体が潰れた状態でみつかった。口縁部が井戸の西北部にあり、その南東にあった底部はあらかじめ打ち欠かれていた。さらに、腹部の破片に重なるように、径25cmほどの石があった。これらによって、井戸を埋める際、底を抜いた須恵器大型壺を置き、石をぶつけて破碎したと判断して過たないであろう。土師器高杯などは、転落して埋没した状態であった。井戸を埋め立てる時の儀礼の痕跡として、注目すべき一例である。

第118次調査北区には、南北溝SD9581と斜行溝SD9582 (PLAN 3) がある。ともに砂質土を埋土とし、5世紀代の須恵器と土師器が出土した。

第131次調査区では、古墳周溝3条を確認した。いずれも円墳の周溝であろう。

東北区にある溝SD9850 (PLAN 8、PL.12) は、最大幅2.25mの弧状の溝で、内径21m、外径26m、残存長18m。溝の底から、赤色顔料の付着した土師器壺や須恵器高杯のほか埴輪が出土した。

西区中央にある溝SD9870 (PLAN 8、PL.12) は、最大幅2.5mの弧状の溝で、内径は20m、外径は25m、残存長22m。溝は深さ0.4mが残り、灰褐色粘土質土と茶灰色粘土質土が互層に堆積する。須恵器高杯・壺、土師器壺・ミニチュア壺が散乱して出土した。

西区の北部にある溝SD9871 (PLAN 8、PL.12) は、内径17.5m、外径20m、溝の最大幅は1.3m。溝は深さ0.3mが残り、灰褐色粘土質土と茶褐色粘土質土が互層に堆積していた。溝の最下部から、土師器高杯が出土した。

7 中世の遺構

鎌倉時代（13世紀後半を中心とする）の井戸と土坑および溝が、池の南半にもうけた調査区（第113次調査区、第131次調査西・東北・東南区）に分布している。

井 戸 川原石積みの井戸と曲物側板を重ねた井戸、曲物の上に板材を縱板組した井戸がある。

井戸SE9328 (PLAN 8, PL13, Fig.9) は、第113次調査区南西部にある石組井戸。掘形は円形で、直徑は2.8×2.5m、検出面から井戸底までの深さは1.9mある。井戸底から約1.2mの高さに、川原石積みの円形石組が残る。石組は、下段の5～6段に径30～40cmの大型の石を積み、それより上には径20～30cmの小ぶりの石を積み上げる。検出面から0.9mほどの積み石は抜き取られていた。井戸埋土および抜取穴壁上から、瓦器、土師器や木製品などが出土した。時期は、13世紀後半である。

井戸SE9345 (PLAN 7, PL13, Fig.9) は、第113次調査区の北部にある石組井戸である。直徑1.8m、深さ1.5mの平面円形の掘形の底に、底を抜いた曲物（直徑42cm、高さ40cm）を据え、その上に川原石を使った円形の石組を積み上げる。現存する石組は8段ないし9段で、高さは1.05mである。埋土から、瓦器、土師器、木製品のはか石鍋1点が出土した。13世紀後半。

井戸SE9346 (PLAN 7) は、井戸SE9345の北西約5mにある石組井戸である。掘形は一辺約2.5mの方形をなし、川原石を円形に積み上げている。13世紀後半。

第131次調査では、7基の井戸を検出した。西北にある井戸から記述する。

井戸SE9880 (PLAN 8, PL13, Fig.9) は、高さ45～50cmの曲物の側板を3段重ねた上に、厚さ0.8cmほどの板材8枚を縱板組で組み、不整な八角形の井戸枠とした井戸である。縱板井戸枠の内径は0.5m。下から2段目と3段目の曲物側板の間には、小石を挟み込み、さらに曲物底板を差し込んで曲物側板を固定していた。掘形は、平面が円形で直徑1.1m、深さは1.6m以上である。

井戸SE9881・9882 (PLAN 8, PL13) は、井戸SE9880の東、約4mにある。SE9882は、井戸枠の上部が大きく抜き取られており、下半分の曲物側板4段だけが残っていた。曲物は最下段のものが直徑38cm、最上段は直徑54cmあって、上のものほど径が大きい。また、抜取穴の底からは、曲物の側板1個が遊離した状態で出土した。井戸の掘形は直徑1.1mの円形で、深さは1.6mである。裏込めには、曲物の底板が入っており、井戸を作る過程

で曲物を分解して積み上げた様子がうかがえる。この井戸SE9882は、西側にある井戸SE9881と重複し、それよりあとに構築されたことがわかる。井戸SE9881は、抜取穴を確認しただけで井戸枠の構造は不明である。

井戸SE9883 (PLAN 8, PL13, Fig.9) は、調査区の西南隅、井戸SE9880の南約15mにある井戸。SE9880と構造は似ているが、掘形の形などで違いもある。井戸掘形は上面で一辺1.8～2.6mの台形平面をし、この形で掘り下げた後、西に偏った位置を径0.6mの円形に、さらに0.55m掘り下げる。現状での掘形の深さは1.6mである。掘形底から曲物側板を5段積み重ね、その高さまで掘形を埋めた後、縦板を組み上げる。縦板は下端の部分が痕跡的に残っていた。

井戸SE9884 (PLAN 8, PL13, Fig.9) は、井戸SE9882の南約14m、井戸SE9883の東約7mにある井戸。直徑2.4mの円形掘形の中央に、川原石を積み上げて井戸枠としている。石積みは内径約0.6mである。

井戸SE9885・9886 (PLAN 8) は、井戸SE9884の北東約10mにある。SE9885は、直徑0.85mの掘形を掘ったのち、東に寄った位置を径0.4mでさらに掘り下げ、そこに曲物の側板を据えている。曲物は4段が現存する。井戸SE9886は、SE9885の東側に重複するそれより古い井戸であるが、抜取穴だけしか残っていない。

井戸SE9860 (PLAN 8) は、第131次調査東北区にある井戸。曲物側板を重ねて井戸枠とした井戸である。3.85×2.8mの規模をもつ長方形平面の井戸掘形中央に、曲物側板を積み重ねて井戸枠とする。井戸枠の上部0.9mは抜き取られ、下の3段だけが残っていたが、3段目も半壊していた。現存の深さは1.5mである。井戸枠の底には、拳大の川原石が詰められており、粗砂が堆積していた。井戸枠抜取穴から、瓦器や土師器が出土した。

井戸SE9861 (PLAN 8) は、直徑約1mの円形素掘りの野井戸である。深さは1.1m。近世の遺構であろう。

土 坑 第113次調査南区の西南隅に方形の土坑が2基ある。土坑SK9326とSK9327 (PLAN 8・9) は、井戸SE9328の南にある2基の土坑である。東西に並んでいる。ともに一辺2mの方形の土坑である。瓦器や木器が出土した。瓦器の時期は13世紀後半だが、井戸SE9328よりやや古い。

溝 東西溝SD9875 (PLAN 8) は、第131次調査西区の北端にある。溝幅1.1～1.5m、深さ0.6mで、断面は台形である。埋土は、上層が茶灰色砂質土、下層が青灰色粘質土である。13世紀の瓦器が出土した。

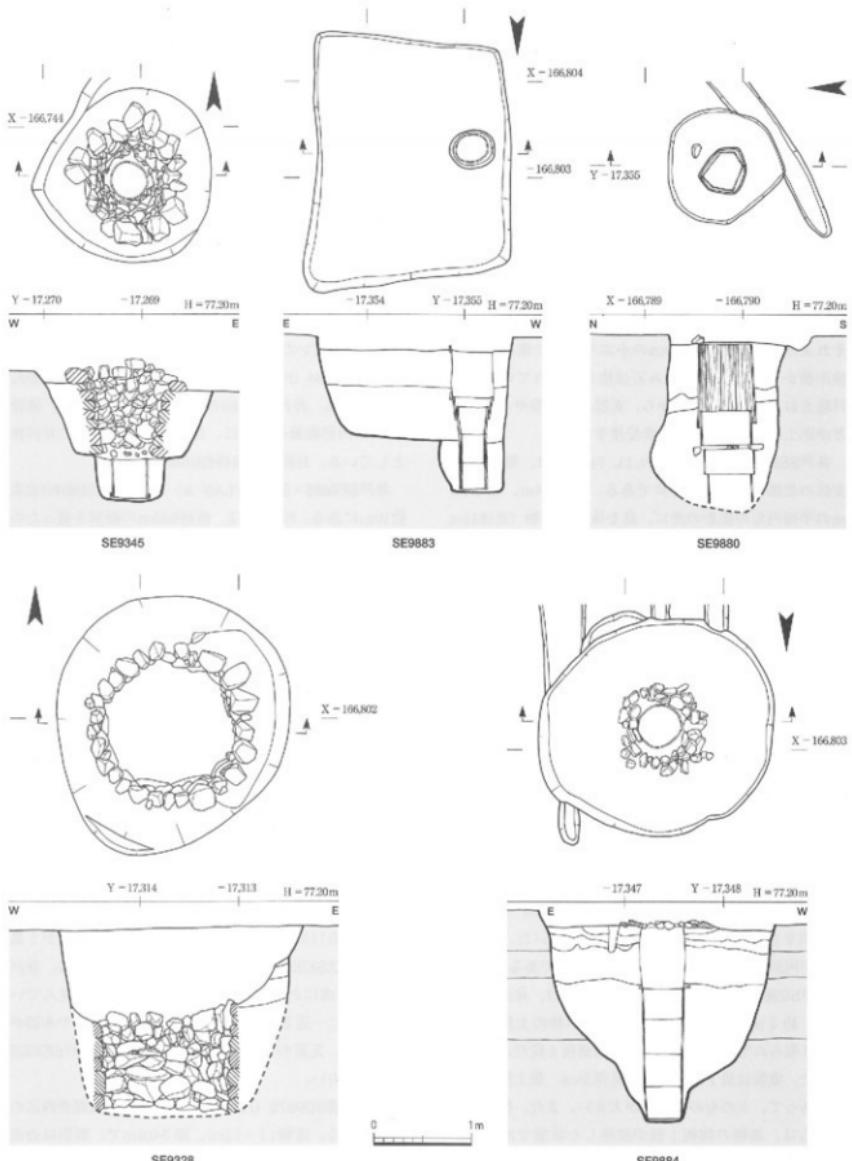


Fig. 9 中世の井戸 1:50

第IV章 遺 物

1 木 簡

第113次調査区の石組井戸SE9328から1点¹⁾、第118次調査の南面内濠SD502から3点（すべて削崩）、第124次調査の木屑土坑SK9740から14点（すべて削崩）²⁾、合計木簡18点（うち削崩17点）が出土した。各遺構の時期は、石組井戸SE9328が13世紀後半、南面内濠SD502が藤原宮期、木屑土坑SK9740が藤原宮直前期である。このうち詣読可能な木簡5点を報告する。

1の「下寸主」は、「しものすぐり」と読む。「寸主」はカバネで「村主」「寸主」にもつくり、「寸」は「村」の省略形としてよく使用される。「寸主」に続く字画は、個人名あるいは漢数字「二」の可能性があるが断定できない。冒頭の「□人」には、百済人や新羅人などの帰属をあわらす用語、あるいは地名や人數が想定できる。

2は2片が接合。2文字目は残画から「男」と読め、個人名の可能性が高い。3も2片が接合。「口」の単位は、飛鳥藤原地域の木簡では、大刀、小刀、大盤、針、鍼などに類例がある³⁾。4は正丁14人に相当するものと思われる。5は1文字のみであるが、詣読不能の木簡のなかに、1点だけ同一木簡と思われるものがある（接合しない）。「下」は、位階や氏の名称などが想定できる。

下村主の形成 下村主という名称は、国史では養老4年（720）の河内手人刀子作広麻呂への賜姓記事⁴⁾を初見とするため、雑戸号の免除とともに、このとき下村主が成立したと考えられている⁵⁾。

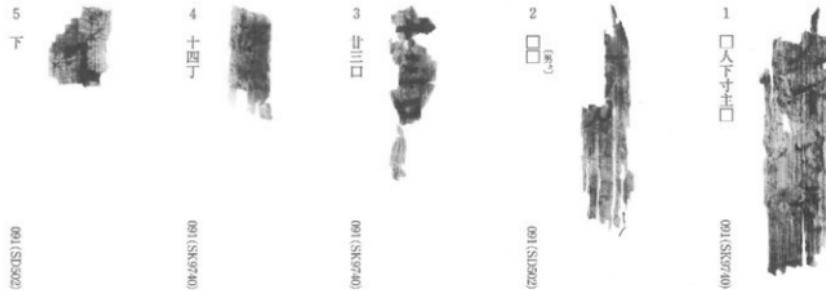
ところが、平城遷都直前期とされる藤原宮跡の遺構か

ら「下主寸葉」と記された木簡が出土しており⁶⁾、養老4年以前の事例はすでに存在していた。さらに、1が出土した遺構の年代が藤原宮直前期であることから、7世紀末の事例を確認できたことになる。7世紀末に下村主が成立していたならば、養老4年の賜姓記事の認識を改める必要があるだろう。なぜなら河内手人広麻呂は、既存の下村主姓を賜ったことになるからである。

下村主は一般に、知識あるいは写経所に出席する経師や校正などとして知られていた⁷⁾。ところがそうした下村主氏は、元来いた下村主に河内手人らを加えた複合的な組織であることが、1によっていっそう明白となったのである。今後は、広麻呂が下村主姓を賜った経緯や、一つの氏としてどのように機能していたかを探ることが課題となるであろう。

註

- 1) 「藤原本木簡概報15」
- 2) 「藤原本木簡概報17」、「木簡研究」第25号、2003年。なお、第124次調査の木簡で、新たに接続したものがあるのと合計数を変更した。
- 3) 「藤原宮木簡一」471号ほか
- 4) 「戊申、河内国若江郡人正八位上河内手人刀子作広麻呂、改陽・下村主姓・免・雑戸号」（『続日本紀』養老4年6月戊申条）
- 5) 佐伯有清編「日本古代氏族事典」雄山閣出版、1994年
- 6) 奈良県教育委員会編「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊 藤原宮－国道165号線バイパスに伴う宮城調査－」1969年、93頁
- 7) 『寧楽遺文』中613・618頁、『大日本古文書（編年）』25ノ174、14ノ124、5ノ427、22ノ472、9ノ39ほか



2 瓦類

本調査区から出土した瓦類は、平瓦が圧倒的に多く、ついで丸瓦、そして少量の軒丸瓦・軒平瓦・面戸瓦・熨斗瓦がある。そのほとんどが、飛鳥時代から藤原宮期にかけての瓦であるが、近世から近代にかけての瓦も少数含む。しかし、後者はすべて池の堆積土もしくは池の水路からの出土なので、ここでは取り扱わない。

出土した瓦の量は、調査区や遺構によって大きな偏りがあり、南面外濠SD501、南北溝SD9561もしくは第113次・131次調査区から出土したものがほとんどである。ここでは、上記の遺構または調査区からの出土瓦を中心にして、軒瓦・丸・平瓦、道具瓦の順で報告する。

A 軒丸瓦 (Fig.11, PL.16)

軒丸瓦は5型式6種、計8点出土した。その内訳は、6273Bが1点、6274Abが1点、6275A・Bが各1点、6276Cが3点、6278Bが1点である。出土量は丸・平瓦

の出土量に比べて非常に少ない。いずれも藤原宮所用の軒丸瓦であり、ここではその中で残存状態の良い4点を報告する。

6273型式は、外区に珠文、外縁に凸鋸歯文を配する複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A～Dの4種あり、B種のみ出土した。

1は、6273型式B種の破片資料。2次焼成の煤が瓦当裏面から側面、瓦当上半部にかけて付着するので、裏面調整は不明だが、側面には范の被りの痕跡が確認できる。丸瓦の接合部には丸瓦凹面の布圧痕が反転して残っており、丸瓦端部は未加工だったことがわかる。焼成は軟質。精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫が多く含む。色調は7.5Y6/1灰色。第113次RK48褐色土出土。

6275型式は、珠文・線鋸歯文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A～E・G～K・Nの11種があり、中房の連子の数が1+4+12のA種と、1+4+8のB種が出土した。

2は、6275型式A種の完形品。全長40cm、瓦当部から

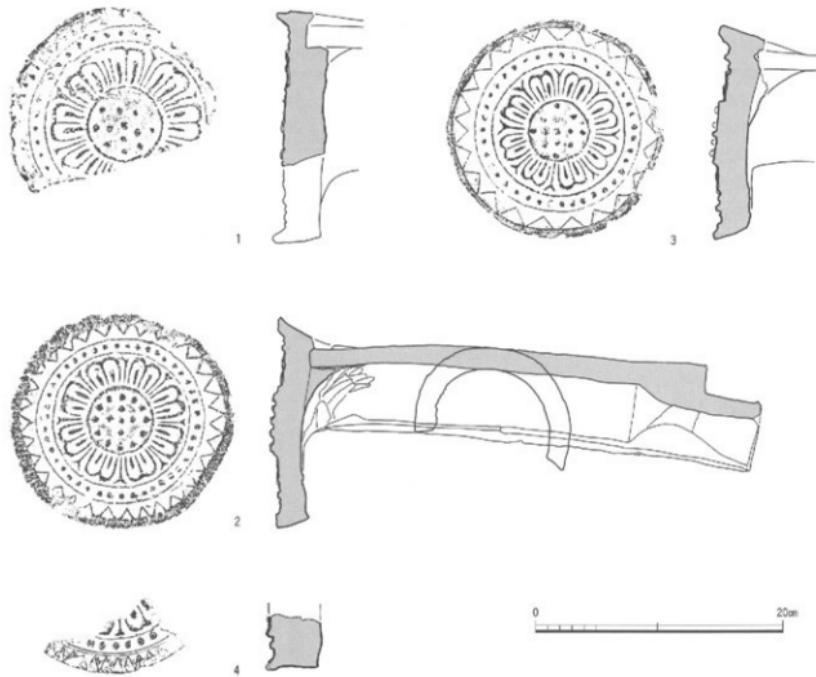


Fig. 11 軒丸瓦 1:4

丸瓦部にかけての長さ35.5cm、玉縁長4.5cm、段部幅16cmを測る。丸瓦部は焼成時の焼けひずみが激しい。6275Aについては、危傷の進行と製作技法の違いによって3段階の変遷をたどれることを播磨尚子が指摘しており（衆鳥藤原第100次調査「年報2000-II」）、その段階設定に従えば、本例は第3段階に該当する。瓦当面は、外縁上端を0.6~1.3cm削り、蓮子・運弁・珠文のあちこちに危傷が生じる。裏面は丁寧な指ナデ調整。丸瓦の取り付け位置はやや低く、その先端部分は未加工で、接合部の充填粘土は少ない。瓦当側面は、丸瓦部とともに縱方向の板ナデで調整する。丸瓦部四面に布の疵ち目の始末をしないため、ほつれが著しい布の重ね目痕が残る。側縁は、玉縁凹面側の面取りが幅広い。焼成は堅緻で、1mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5B4/1暗青灰色。南面外濠SD501出土。

3は、6275型式B種の軒丸瓦。瓦当面は、外縁上端を4~8mm削る。丸瓦の取り付け位置はやや低く、丸瓦先端部は未加工。瓦当側面は周に沿って丁寧になんで、裏面は指ナデのあとに外周に沿ってヘラケズリ調整をする。焼成は堅緻で、精良な胎土に1mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は5B5/1青灰色。南面外濠SD501出土。

6276型式は、珠文・獣齒文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A・C・E~Gの5種あり、中房がやや突出するC種が出土した。

4は、6276型式C種の破片資料。瓦当側面には、範型の被りの痕跡がある。裏面はヘラケズリ調整。焼成は堅緻で、精良な胎土に2mm程度のクサリ礫を少し含む。色調は10Y6/1灰色。第124次QG80灰茶土出士。

B 軒平瓦

軒平瓦は、計16点出土しており、重弧文軒平瓦（3点）と偏行唐草文軒平瓦（13点）に分けることができる。

重弧文軒平瓦（Fig.12, PL.17）

3点とも第113次調査区からの出土である。重弧文の挽き型はそれぞれ異なり、製作技法にも違いがある。

5は三重弧文軒平瓦。凹線と弧線はほぼ同じ太さだが、第一弧線上にごく浅い凹線が1条巡り、あたかも四重弧文のように見える。瓦当厚は3.3cm。頭部は長さ1.3cm、頭の深さ1.3cmの貼り付け段頭。凹面には、瓦当面から0.7mmの位置に施文型のあたりがある。側面は、凹凸面両側からヘラケズリして断面三角形に仕上げる。焼成は軟質で、精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5YR7/4にぶい橙色。東二坊坊間路西側溝SD6032B出土。

6は、頭が剥落して弧線が2本分のみ残っている。頭の接合面は、重弧文風の型挽きで凹凸をつける。凹面には、瓦当面から1.3cmの位置に施文型のあたりがある。焼成は良好で、2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5Y7/1灰白色。第113次RF52表土出土。

7は、平瓦部が剥落し、頭部のみ残存する。弧線は丸みを帯び、凹縁は断面U字形である。接合面には、斜め方向に走る糸切り痕と、重弧文風の型挽きの痕跡が反転している。頭面はナデ調整で、側面はヘラケズリを行う。ちょうど粘土板の合わせ目で削れており、S型とわかる。焼成は軟質で、やや粗い胎土に1mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。色調はN7/0灰白色。井戸SE9330出土。

偏行唐草文軒平瓦（Fig.12, PL.17・18）

偏行唐草文軒平瓦は計13点出土し、そのうちの12点について型式を判別できた。いずれも藤原宮所用瓦で、5型式8種を数える。その内訳は、6641Eが1点、6642Aが1点、6642Cが1点、6443Aaが2点、6643Abが3点、6643Cが1点、6647Cが3点である。ここでは残存状態の良い6点を報告する。

6642型式は、外区・脇区とも珠文をならべる右偏行唐草文軒平瓦である。A~Dまでの4種あり、A種とB種が出土した。C種の資料について報告する。

8は、6642型式C種の破片である。推定瓦当厚5cm。頭部長6.3cm。頭の深さは0.4mmと浅い。頭面は粗いヘラケズリを施すが、段部はほとんど未調整である。凹面は布压痕が明瞭に残り、瓦当面際はヘラケズリする。焼成は良好で、精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調はN6/0灰色。南面外濠SD501出土。

6643型式は、外区・脇区とも珠文をならべる左偏行唐草文軒平瓦である。A~Eまでの5種あり、Aa種とAa種を改範して脇区の幅を広げたAb種、そしてC種が出土した。

9は、6643型式Aa種の頭部で破損している資料である。推定瓦当厚4.3cm、頭部長7.2cm、頭の深さ1.3cm。頭面と段部は横方向に丁寧にナデ調整する。凹面には布压痕が残り、瓦当面際は横方向にヘラケズリする。焼成は堅緻で、精良な胎土に1mm大の石英をわずかに含む。第118次QN50包含層出土。

10は、6643型式Ab種の軒平瓦。平瓦部まで残存するほぼ完形の軒平瓦で、全長41cm、瓦当幅30.4cm、頭部長6.8cm、頭の深さ1.3cm、瓦当厚4.9cm。瓦当文様は、右から5単位部分に範割をおこしている。頭面は横方向にヘラケズリする。段部と平瓦部は、丁寧に横方向にナデ

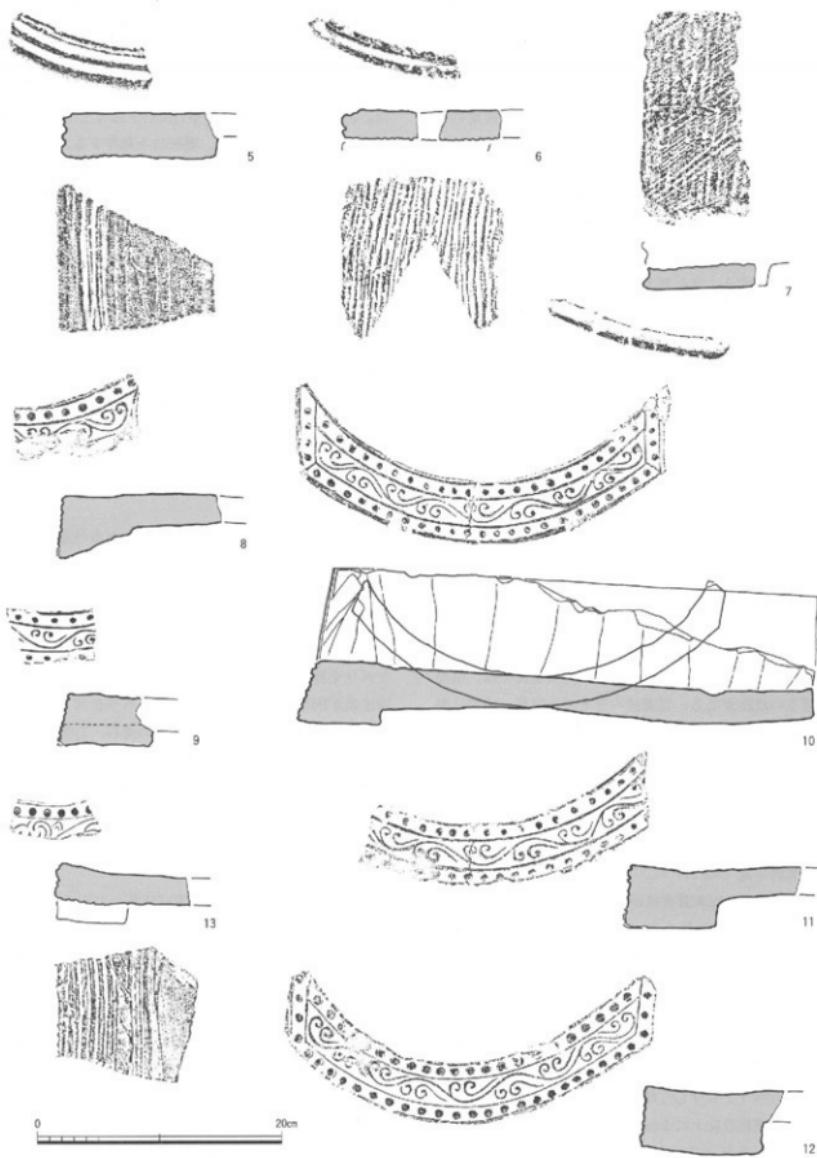


Fig. 12 轩平瓦 1:4

て、接合部分は直角に仕上げる。凹面は粘土繊接合痕、布圧痕が明瞭に残り、瓦当面の際は横方向にヘラケズリを行う。また、凹面の中央付近には布のじわせと、瓦を分割する際に指標となる分割界点が上下2カ所確認できる。焼成は良好で、胎土は高台・峰寺瓦窯産に特徴的なクサリ縞を多量に含み、9とは全く胎土が異なる。色調は5B5/1青灰色。南面外濠SD501出土。

11も、6643型式Ab種の破片資料。頸部長7.3cm、頸の深さは2.2cmと深い。瓦当厚は5.4cm。10と同じく瓦当文様は、右から5単位目に範削がある。凹凸面の調整手法・焼成・胎土とともに10とはほぼ同様である。色調は10Y6/1灰色。南面外濠SD501出土。

12は、6643型式C種の軒平瓦。瓦当幅30.5cm、頸部長9.9cm。頸の深さは2.5cmと深い。瓦当厚は5.0cm。頸面は、横方向にヘラケズリし、段部と平瓦部の接合部分は直角になる。平瓦部には、段部を削り出す際のヘラのあとが残る。段部と平瓦部は横方向のナデ調整。凹面は、粘土繊の接合痕と布圧痕が残り、瓦当面の際には幅広のヨコヘラケズリをする。焼成は堅緻で、2mm大の長石・石英・クサリ縞を含む。色調は5B4/1暗青灰色。南面外濠SD501出土。

6647型式は、上外区珠文、下外区鋸歯文の左偏行変形忍冬唐草文軒平瓦。A～E・G～Iの8種あり、そのうちのC種が出土した。

13は、6647型式C種の頸が剥落した小片である。頸部接合面には、重弧文風の型挽きで凹凸がつけてある。凹面は横方向の丁寧なナデで、布圧痕を完全にナデ消す。焼成は良好。精良な胎土に2mm大のクサリ縞を少量含む。色調は5Y7/1灰白色。第124次表上出土。

C 丸 瓦

本調査区からは、破片総数342点、重量82.7kgの丸瓦が出土した。丸瓦の出土量は、平瓦に比べて少なく、そのほとんどは、第113・131次調査区もしくは、第124次調査区の南面外濠SD501からの一括資料に偏っている。本報告ではこれらの丸瓦を2類に分類した。

丸瓦1類 (Fig.13, PL.19)

粘土板巻きつけ技法の丸瓦の一類である。完形品はなかったものの、おそらく行基式丸瓦であろう。全て第113・131次調査区から出土しており、その位置関係から小山庵寺所用の瓦である可能性が高い。凸面の叩きなど、第1次成形技法の痕跡は、丁寧にナデ消されていて確認できない。製作技法・瓦の厚さ・胎土・焼成など、14と15は同じ一群だが、ほかはそれぞれ異なる様相を示す。

14は、凹面に左上がりの糸切り痕を確認できる。左の側縁の近くには、ぐし縫いの布の縫い目痕があるが、同じ目痕は側縁に沿ったヘラケズリ調整で消滅している。側面調整は、分割截面・破面をヘラケズリしたのち凹面側をヘラケズリするc1手法¹¹。焼成は軟質で、最大3mmの長石・石英・クサリ縞を含む。色調は7.5YR4/3褐色。東二坊間路西側溝SD6032Bより出土。

15は、凸面を縱方向にナデ調整する。凹面には、左上がりの糸切り痕が残る。側面調整はc1手法。焼成・色調・胎土ともに14に同じ。井戸SE9330より出土。

16は、厚さが約2.5cmとやや厚手の丸瓦。凹面は、右上がりの糸切り痕が明瞭に残る。側面は、凸面側を面取りし、凹面側は幅の広いヘラケズリ調整を行う。焼成は良好で、精良な胎土に2mm程度の長石・クサリ縞を少量含む。色調は7.5Y5/1灰色。中世の井戸SE9884出土。

17も、丸瓦の最大厚が2.8cmと厚手である。凸面は縱方向の板ナデ調整。凹面には、横位の布圧痕と糸切り痕が確認できる。側面調整は、分割破面・截面とともにヘラケズリするc手法。広端面の凹面側もヘラケズリする。焼成は堅緻で、最大3mmの長石・石英を少し含む。色調は2.5YR3/1暗赤灰色。中世の井戸SE9885出土。

18は、凹面に残る布圧痕の一部を、縱方向に粗くナデてすり消す。側縁は凸面側を面取りし、凹面側は側縁に沿って幅広のヘラケズリをする。広端面も凹面側を面取りする。焼成は堅緻で、2mm程度の長石・石英を含む。色調はN6/0灰色。東二坊間路西側溝SD6032より出土。丸瓦2類 (Fig.14～16, PL.19～21)

粘土紐巻きつけ玉縁式丸瓦の一群。21以外は全て南面外濠SD501からの出土である。凸面は、縦縄叩きをナデ消す。凹面玉縁部から筒部にかけては、緩やかに傾斜し、明確な段差を作らない。製作技法と胎土の違いでaとbに分類した。

丸瓦2類a (19～31)は、やや粗い胎土に2mm大の長石・石英を大量に含む一群。凸面調整は、多くが玉縁部から筒部中央にかけて回転台を利用したヨコナデ・筒部中央部から広端までは縦方向のナデである。凹面には、布圧痕を明瞭に残す。玉縁部凹面には何条かの布縫の縫じわが確認でき、なかでも19～21は特に多い。

19は、玉縁長6.4cm、段部幅15.9cm、玉縁部端部幅9.6cmを測る。凹面には、筒部と玉縁部を繋ぐ粘土繊の接合痕が明瞭に残る。また、筒部中央より少し上がったところに横位のヘラ描き線がある。側面調整はc1手法。焼成は堅緻で、色調は5B4/1暗青灰色。

20は、玉縁長6.2cm、段部幅16.5cm、推定玉縁端部幅10.5cm。凹面に19と同じく、筒部上方に横位のヘラ書き線をもつ。側面調整は四面側を面取りするc1手法だが、部分的に凸面にもヘラケズリを加える箇所がある。焼成は良好で、色調はN5/0灰色。

21は、玉縁長6.2cm、段部幅16.2cm、推定玉縁端部幅

10.5cm。凹面に粘土紐の接合痕が明瞭に確認できる。側面調整はc1手法。焼成は堅緻で、5B3/1暗青灰色。第124次QH79灰褐土より出土。

22は、玉縁長6.6cm、段部幅16.2cm、玉縁端部幅11.5cm。焼成段階でひずみ、やや扁平な形状をなす。側面は、凹凸面とも面取りし、玉縁端面も凹面からヘラケズリをす

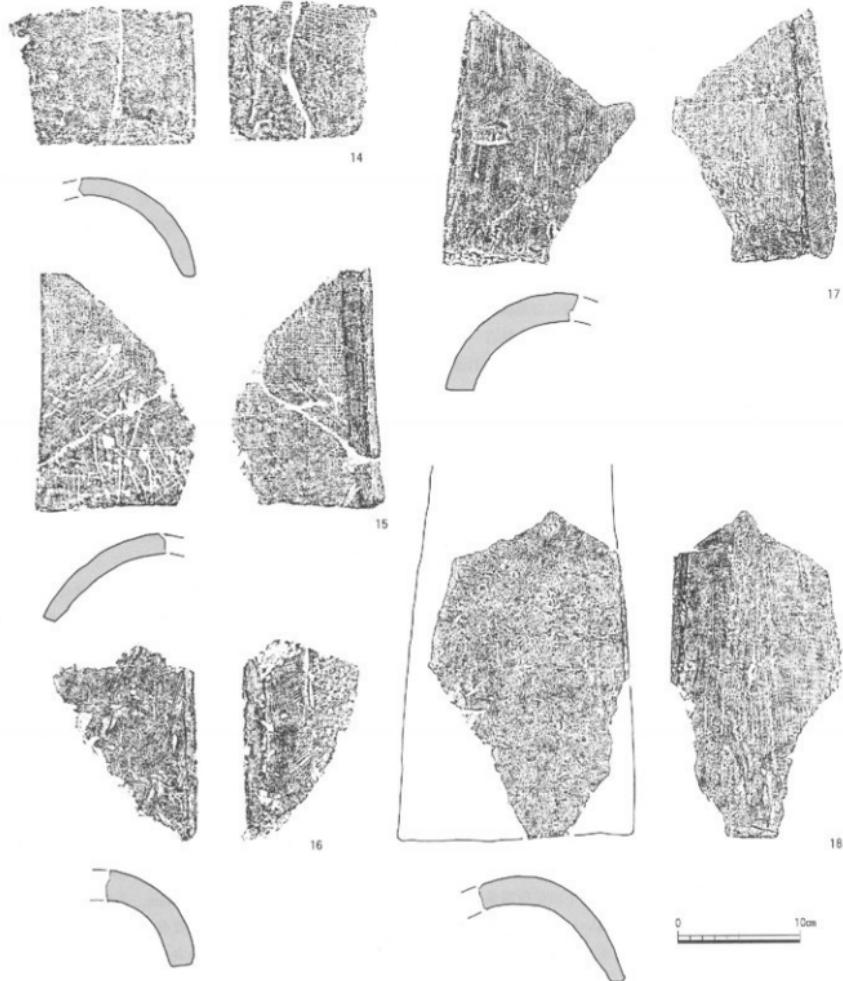


Fig. 13 丸瓦 1類 1:4

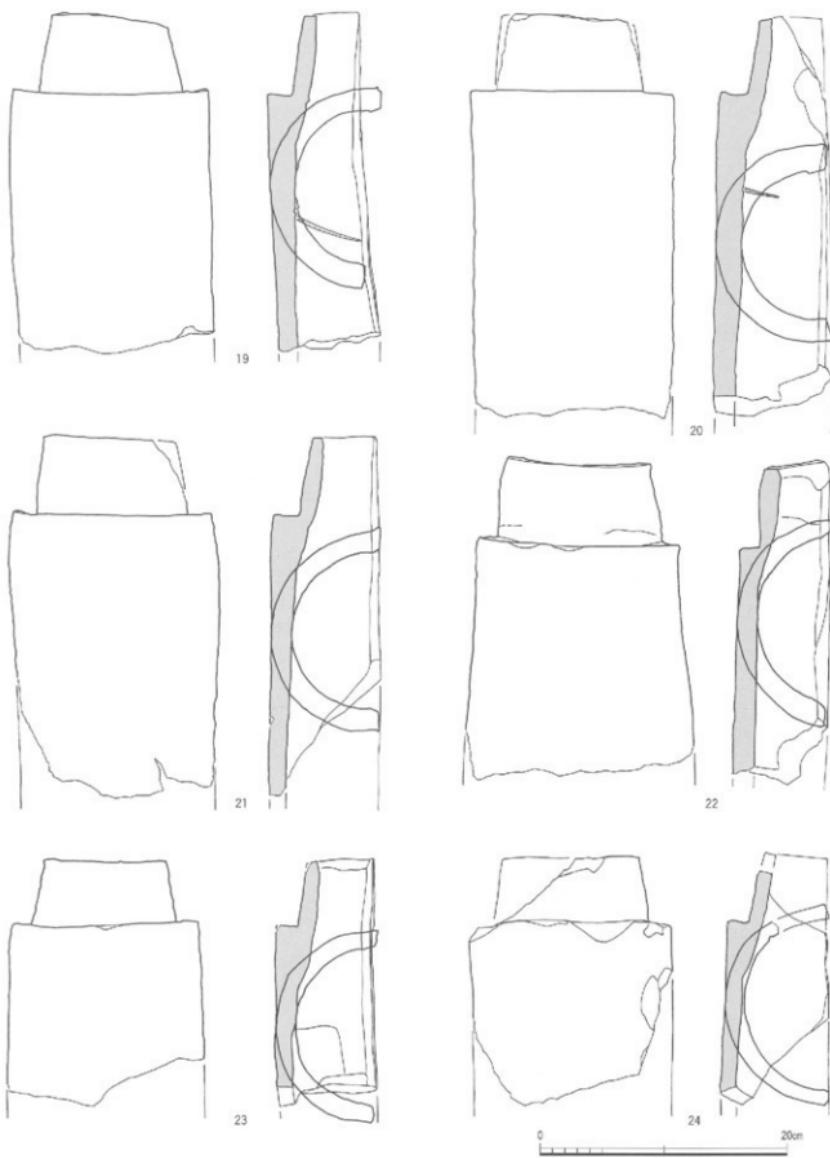


Fig. 14 丸瓦 2類 1:4

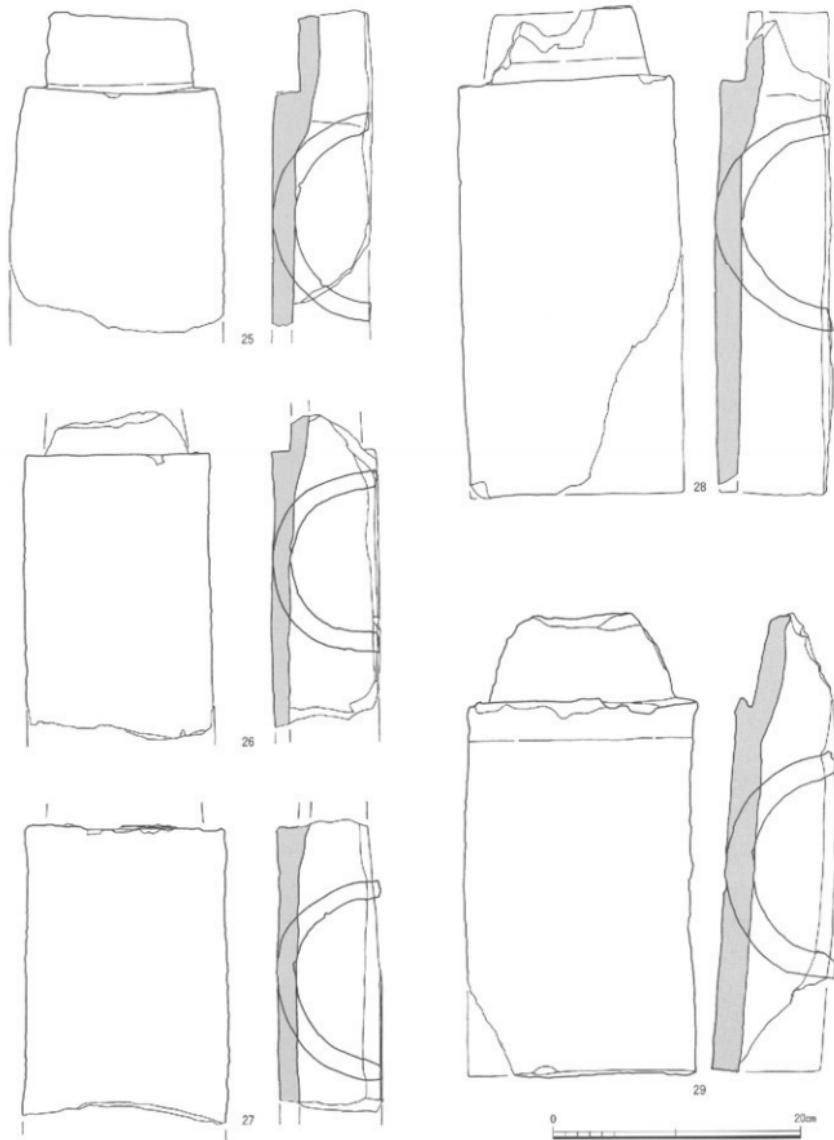
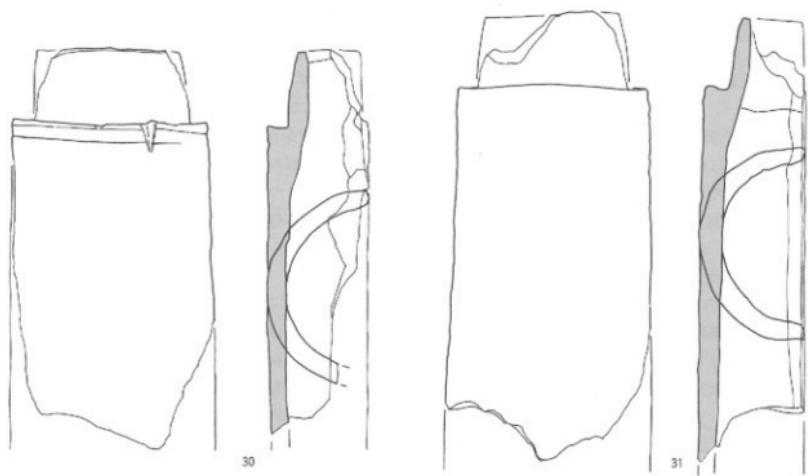


Fig. 15 丸瓦 2類 1:4



30

31

32

33

0 20mm

Fig. 16 丸瓦 2類 1:4

る。焼成は良好で、色調は5B4/1暗青灰色。

23は、玉縁長5.1cm、段部幅15.2cm、玉縁端部幅4.9cm。筒部凹面は、板状工具でやや強めに縦方向にナデて布圧痕を消す。側面は2回に分けてヘラケズりし、また玉縁端部も凹面側を面取りする。焼成は良好。色調は5Y5/1灰色。

24は、玉縁長5.2cm、推定段部幅16.4cm。凹面段部の布圧痕は凸型台に当たって潰れている。また、凹面向かって左側で、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕が確認できる。側面調整は、側面の調整を全く行わないa手法。焼成は堅緘で、色調は5B4/1暗青灰色。

25は、玉縁長6.1cm、段部幅15.3cm、玉縁端部幅11.2cm。凸面は、ヨコ方向のケズリ調整。凹面には、玉縁部から筒部まで続く布筒のしわが2条ある。側面調整はc1手法。焼成はやや良好で、色調は5Y2/1黒色。

26は、段部幅14.8cm。凹面には、筒部の一部に指ナデが確認できる。玉縁凹面には、布筒のしわがみられない。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調はN4/0灰白色。

27は、段部幅16.1cm。玉縁部が欠損している。凹面には、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕がある。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調は5B3/1暗青灰色。

28は、全長40.2cm、筒部長34.6cm、玉縁長5.6cm、段部幅17.3cm。凹面には、布筒と模骨の間にくぐる捺り紐の圧痕が確認できる。また、凹面段部の布圧痕は凸型台に当たって潰れている。側面調整はa手法。焼成は軟質で、色調はN3/0暗灰色。

29は、全長38cm、筒部長31.1cm、玉縁長6.9cm、推定広端幅18.3cm、段部幅18.8cm。玉縁端部幅は、焼成段階でひずんだために幅が広くなっている。そのため玉縁の両側を、凸凹面両側から打ち欠く。凸面は全体的に調整が粗く、段部には回転台を利用して段部を成形した際にできた余分な粘土がそのまま付着している。側面調整はc1手法だが、玉縁端面は未調整である。色調は7.5YR6/1灰色。

30は、玉縁長6.1cm、段部幅15.8cm、玉縁端部幅11.5cm。凸面には、段部から約1.5cm下に回転台を利用したヘラ描き状の鋭い線が残る。工具のあたりであろうか。凹面は筒部に一部ナデ調整がみられる。側面調整はc1手法で、玉縁端面も凹面側を粗くヘラケズりする。色調は10YR7/3にびい黄橙色。

31は、玉縁長6.0cm、段部幅15.2cm。広端を欠損しているが、残存長は37cmあり、ほぼ全長に近いと思われる。凹面は、筒部と玉縁部とを繋ぐ粘土紐の接合痕が明瞭に

残り、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕を縦方向にナデつけているのが確認できる。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調は10YR7/3にびい黄橙色。

丸瓦 2類b (32・33)は、2類aと似るが、2類aよりも瓦が分厚い。側面調整はc手法。胎土は精良で、長石・石英の他にカオリ岩を含む。

32は、筒部長30.8cm、広端幅17.7cm、推定段部幅16cm。凹面は粘土紐の接合痕、布圧痕が明瞭に残り、玉縁部には布袋を軽くつまんで纏ったダーツがある。右の側縁の凹面側には、分割裁線を失敗した痕跡があり、それを削るために小さく面取りをする。焼成は堅緘。色調はN4/0灰色。

33は、全長推定38.5cm、筒部長は31.9cm、段部幅は18.1cm、厚さは2~2.5cmと厚めの丸瓦。凸面の段部は、親指と人差し指でつまんで回転ナデ調整を行う。凹面には、粘土紐の接合痕、布圧痕、布筒の下にくぐる捺り紐の圧痕が確認できる。また、凹面向かって右の側縁には、分割裁線を引きぬいた痕跡がある。焼成は良好。色調は5Y6/1灰色。

D 平 瓦

本調査区から、総数1908点、総重量346.8kgの平瓦が出土した。ほとんどは、第113・131次調査区もしくは南北溝SD9561、南面外濠SD501からである。ここでは平瓦を叩きなどをもとに6類に分類した。さらに叩き板の違いや調整手法で細分して報告する。

平瓦1類 (Fig.17, PL.22)

凸面に格子刻線叩きをもつ粘土板桶巻作り平瓦の一群である。叩き板の種類は、1種類のみ確認できた。叩き板の大きさは不明だが、短辺4.8cm、長辺7cm以上の長方形を呈す。刻線の太さは1~3mmで、格子目は1辺が4~8mmの正方形もしくは長方形になる。凹面は、布圧痕と桶の側板痕が明瞭に残る。側板の幅は、3.8~4cm。胎土はいずれも精良で、長石・石英を少量含む。

34は、凸面を一度全体的に叩いて半乾燥させた後に、広端部を同じ叩き板で再度補足叩きをして、粘土円筒のゆがみを修正する。側面調整はc手法。色調は10Y6/4にびい黄橙色。井戸SE9330出土。

35は、凸面に残る叩き目の重なりが広端から狭端へと向かっているのがわかる。凹面には、側縁に近い部分で、布目の中にもぐる捺紙の圧痕がある。粘土円筒を分割する際に指標となる、分割界線と考えられる。側面調整は、凸凹面側とともに面取りをおこなうc3手法。色調は10YR3/1黒褐色。井戸SE9330出土。

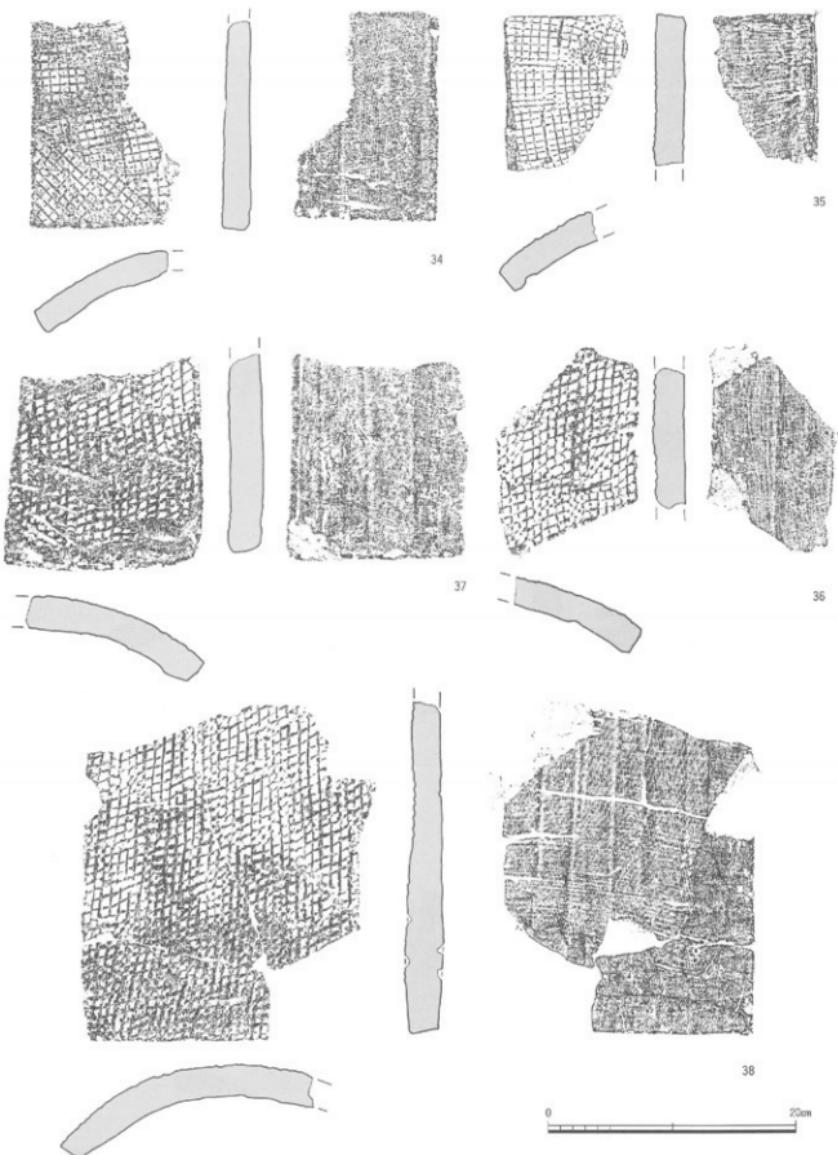


Fig. 17 平瓦 1・2類 1:4

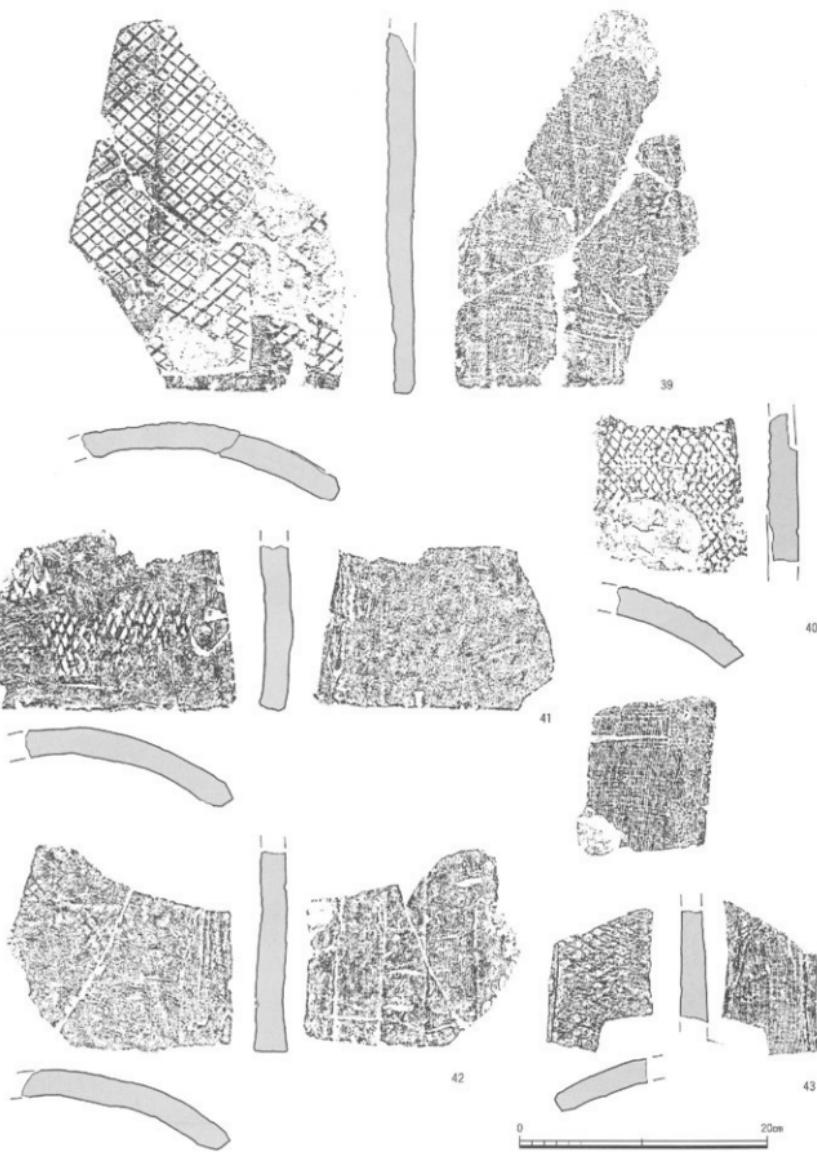


Fig. 18 平瓦 2類 1:4

平瓦 2 類 (Fig.17・18、PL.22)

斜格子刻線叩きをもつ粘土板桶巻作より平瓦の一群。叩き板は a ~ d の 4 種類確認できる。またその他に、ナデ消されて叩き板の同定はできないが、斜格子叩きの確認できる一群を e とした。

平瓦 2 類a (36~38) は、格子目の刻線が木目に直交および斜交する叩き板を使用する。叩き板の刻線は、2 ~ 3 mm の太さをもつ。凹面には、段差の大きい幅 2.4 ~ 3.7 cm の側板痕、および布压痕が明瞭に残る。胎土は長石・石英を少し含むだけで精良。

36は、凹面に糸切り痕を明瞭に残す。側面調整は c 手法。焼成は良好で、色調は 10YR7/3 にぶい黄橙色。井戸 SE9330 出土。

37は、広端から狭端に向かって叩き板の重なりが確認できる資料である。側面調整は c1 手法。焼成は軟質で、色調は 2.5Y6/1 黄灰色。井戸 SE9330 出土。

38は、瓦の厚さが 2.6 ~ 3 cm と厚手である。凹面に残る布压痕は、布が横方向に引っ張られていたために、横方向のしわがいくつかできている。側面調整は広端部分に分割破面が少し残っている。a 手法とわかる。また、幅の広いヘラケズリを凹面側の側縁や広端に沿って行う。焼成は堅緻で、色調は N8/0 喧灰色。井戸 SE9885 出土。

平瓦 2 類b (39) は、叩き板が、短冊形を呈するものである。叩き板の大きさは幅 8.5 cm、長さは恐らく広端から狭端まであり、格子目は木目に斜交する。

39は、S型の粘土板の合わせ目で割れている。合わせ目には、接着面を増やすために指で凹凸をつけてある。凹面には側板痕と布目痕が残り、側面調整は凹凸面ともヘラケズリする c3 手法。焼成は軟質で、胎土はやや粗く、長石・石英・黒色粒を含む。色調は 2.5Y6/1 黄灰色。井戸 SE9330 出土。

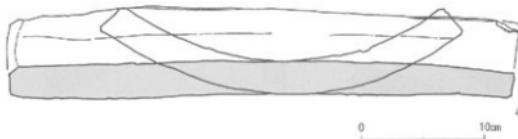
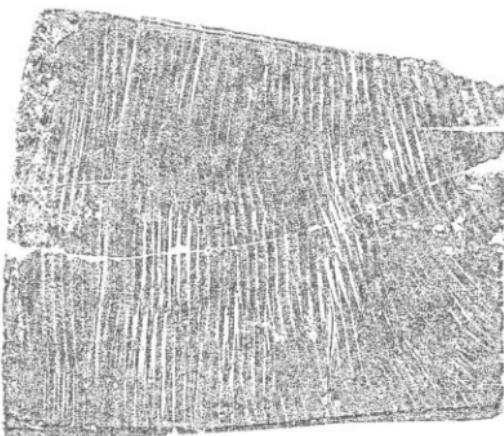


Fig. 19 平瓦 3 類 1:4

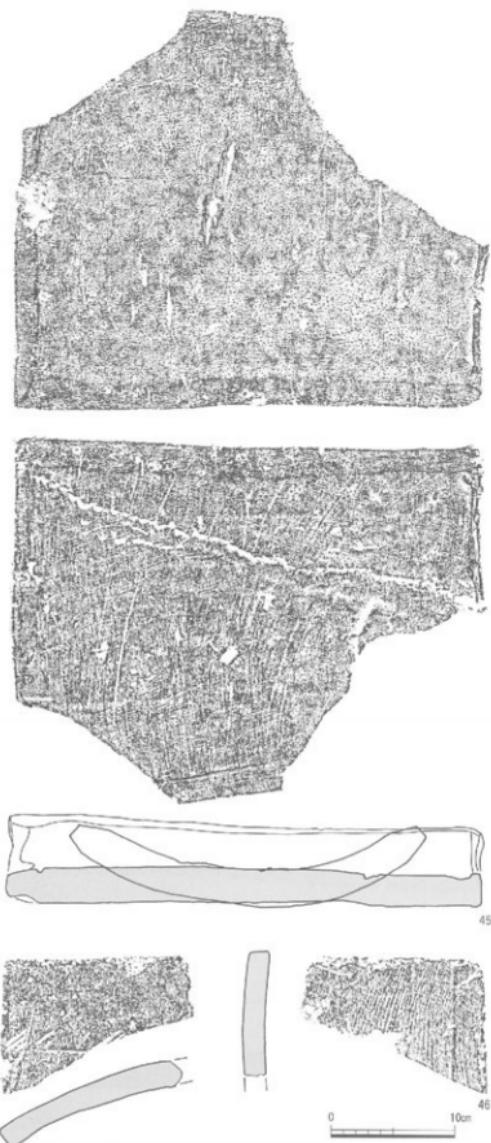


Fig. 20 平瓦 3類 1:4

平瓦 2類c (40) の叩き板は、斜格子の刻線がシャープで細かい。刻線の太さは1～4mmある。

40の凹面は、明瞭な布庄痕をもち、側縁に沿って幅広のヘラケズリがある。側面調整はc手法。焼成は良好で、精良な胎土に、長石・石英を少し含む。色調は7.5Y7/1灰白色。第131次SF73包含層出土。

平瓦 2類d (41) は、横方向に叩き目をナデ消されており、叩き板の詳細な形状はわからない。しかし、刻線はやや太く、縦長の斜格子をもつ。凹面は、縦方向のち横方向の丁寧なナデ消しにより布目をほとんど残さない。側面はc3手法で調整するが、その断面形状は劍先形に近い。焼成は良好。胎土は精良で、長石・石英を含む。色調は7.5Y7/1灰白色。東二坊坊間路西側溝SD6032B出土。

平瓦 2類e (42・43) は、斜格子叩きと確認できるものの、ナデ消されて叩き板の同定是不可能なものである。

42は、凸面にかすかな叩きが認められるが、ほとんどナデ消されている。凹面には、幅3.3～3.9cmの側板痕が明瞭に残り、広端から1.8cm上方に布端の圧痕をとどめる。側面調整はc3手法。胎土は精良で、長石・石英・クサリ礫を含む。色調は7.5Y8/1灰白色。第113次SN49包含層より出土。

43は、斜格子叩きを斜め方向にナデ消している資料。凹面には2次焼成痕が残る。側面調整はc3手法。堅微な焼きで、胎土は精良。長石・石英・クサリ礫を含む。色調は10YR6/2灰黄褐色。井戸SE9330出土。

平瓦 3類 (Fig. 19～21, PL. 23)

平行叩きをもつ粘土板捲巻作り平瓦の一群である。平行叩きをもつものはすべて、叩き目を粗くナデ消す。したがって、叩き板の同定はできなかった。凹面には布庄痕を明瞭に残す。完形品が2点ある。

44は、全長41.0cm、推定狭端幅27cm、広端幅31.1cm、厚さ1.9～2.9cm。叩き板の刻線の幅が6～8mmと広いのに対して、刻線と刻線の間隔が2～3mmと狭い。凸面の叩

き目は、広端では平行しているが、狹端に近くなるにつれて右上がりになる。その後、回転台を利用して、板状工具で粗く横ナデ調整する。凹面は、右上がりの糸切り痕が明瞭に残り、布筒の下に狹端から広端まで直線に伸びる棒状の圧痕がある。分割界線と思われる。側面調整はc3手法。焼成は良好。胎土中には、長石・石英・雲母・クサリ難・チャートを大量に含む。色調は5Y7/1灰白色。東西溝SD9323出土。

45は、全長38.3cm、推定狭端幅25cm、推定広端幅31cm、厚さ2.4~2.8cm。叩き目は、ほとんど横ナデですり消されるが、平行叩きとわかる。凹面には、緩い円弧を描きながら横位に走る糸切り痕と、布のとじ合わせ痕が残る。側面調整はc3手法。狹端面・広端面と凹凸面に面取りのヘラケズリをする。粘土をよく練らずに使用したためか、胎土中に気泡が目立つ。焼成は軟質で、胎土は石英・長石・金雲母を含む。色調は7.5YR6/6橙色。糸切りの方向・焼成・胎土・色調ともに44とは全く異なる。東西溝SD9323出土。

46は、凸面の平行叩き目を横ナデ調整している資料。凹面は、縦方向の糸切り痕、側板痕を残す。側板の幅は3.6cm。側面調整はc手法。焼成は良好で、胎土はやや粗く、3mm程度の長石・石英・クサリ難を多く含む。色調は7.5Y5/1灰色。中世の井戸SE9346出土。

47は、凹面に縦方向に走る糸切り痕と、分割界線と思われる布筒の下にくぐる撚り組の圧痕が残る。側面調整はc手法。焼成・胎土・色調ともに46に同じ。井戸SE9330出土。

48は、凸面に側縁と狹端に平行して細いヘラ描き線に入る。横方向のナデ調整の後につけられていること

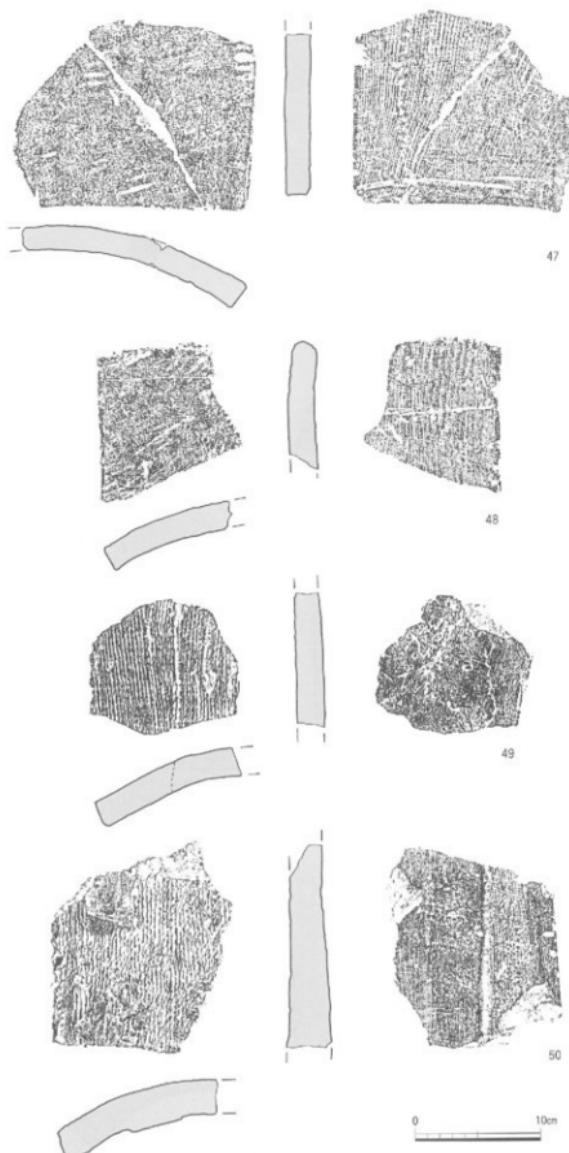


Fig. 21 平瓦3・4A類 1:4

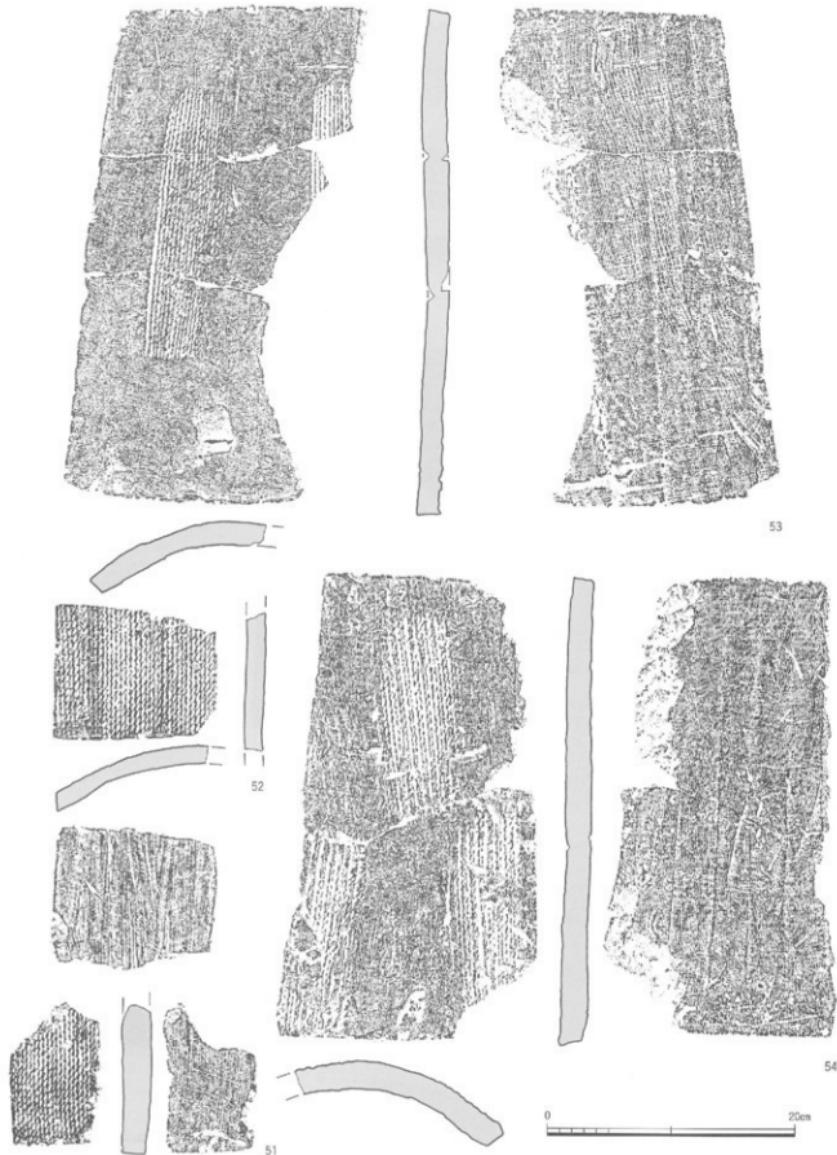
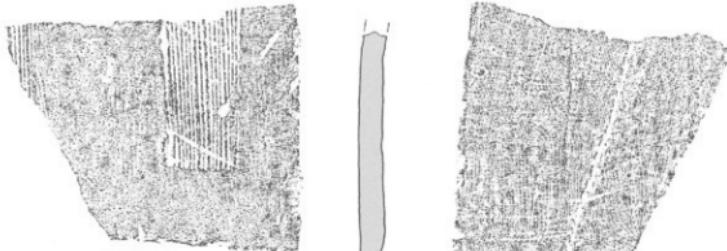
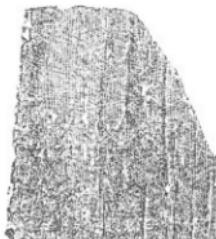
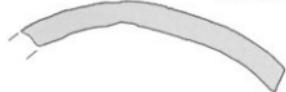


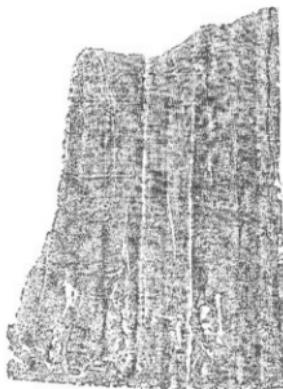
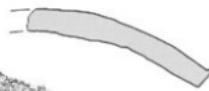
Fig. 22 平瓦 4A - 4B類 1:4



55



56



57



Fig. 23 平瓦 4B類 1:4

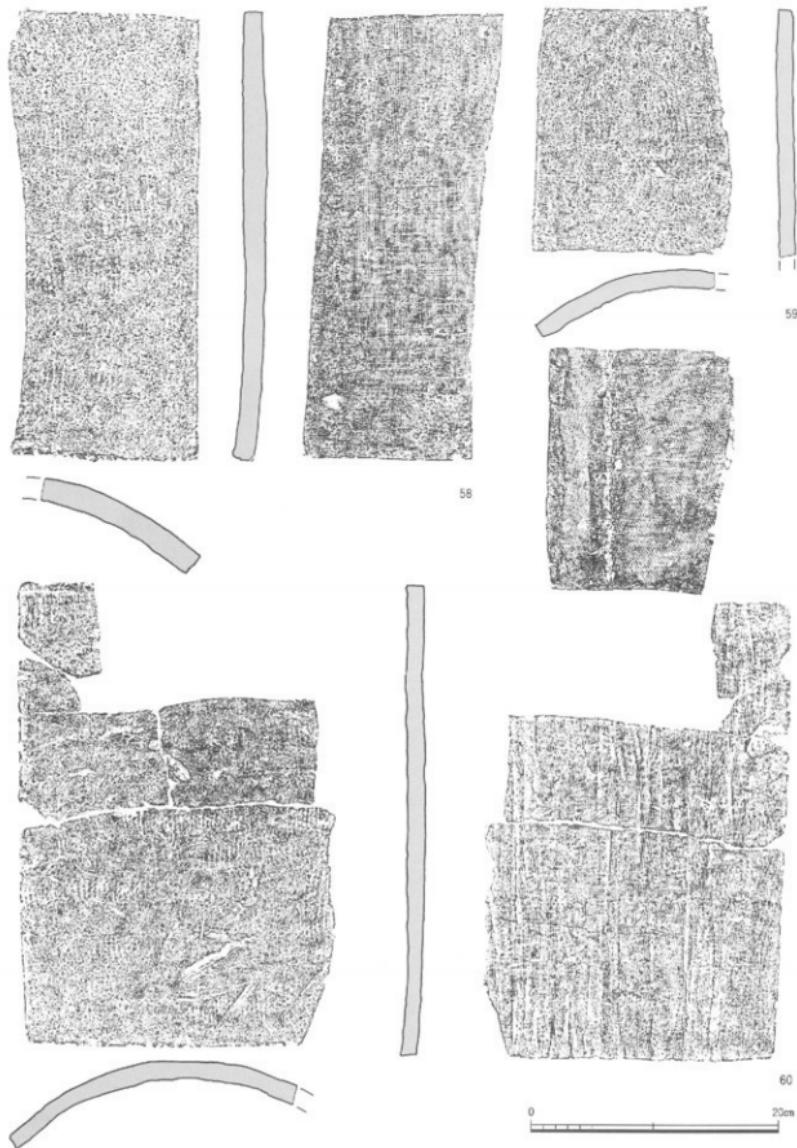


Fig. 24 平瓦 4B類 1:4

から、瓦の規格を揃えるためのケガキ線と考えられる。側面はケガキ線に近い部分をc3手法でもって調整されている。その一方で、狭端面はケガキ線があるにもかかわらず、未調整のままである。凹面には、糸切り痕と布压痕が残る。やや軟質の焼きで、胎土は2mmの大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は25Y6/1灰黄色。井戸SE9330出土。

平瓦4類 (Fig.21~31, PL.23~27)

凸面に綱叩きをもつ平瓦の一群である。平瓦4類は、粘土板桶巻作りと粘土紐桶巻作りの2つの異なる製作技法がみられ、前者を4A類、後者を4B類に分類した。

1. 平瓦4A類 (49~51)

平瓦4A類は、綱叩きをもつ粘土板桶巻作りの一群である。綱叩きの原体の形状によってaとbに細分できる。

平瓦4A類a (49・50)は、正方形に近い綱叩き板で叩かれたもの。叩き板の縄はやや細く、10本/3cmの密度。凹型台を使用するため、叩き痕の一部が押し潰される。側面調整はc手法であり、凸面と側面との角度が鈍角になる。焼成は良好で、精良な胎土に2mmの大の長石・石英・クサリ礫を含む。

49は、2次焼成痕がある。凸面は、綱方向に軽くナデ調整する。色調は5Y7/1灰白色。中世の井戸SE9885出土。

50は、厚さが2.5~3.5cmと厚手である。49と同じく2次焼成痕がある。凹面は側板痕の段差が大きい。側板の幅は4.0cm。側縁に沿って幅広のヘラケメリを施す。色調は5Y7/1灰白色。第131次SF73包含層出土。

平瓦4A類b (51)は、叩き板が短冊形を呈す綱叩きをもつもの。縄は太く、密度は8本/3cm。1点のみ出土した。

51は、綱方向のナデ調整で、凹面の布目痕をほとんどナデ消す。側面調整はc手法であり、凸面と側面との角度

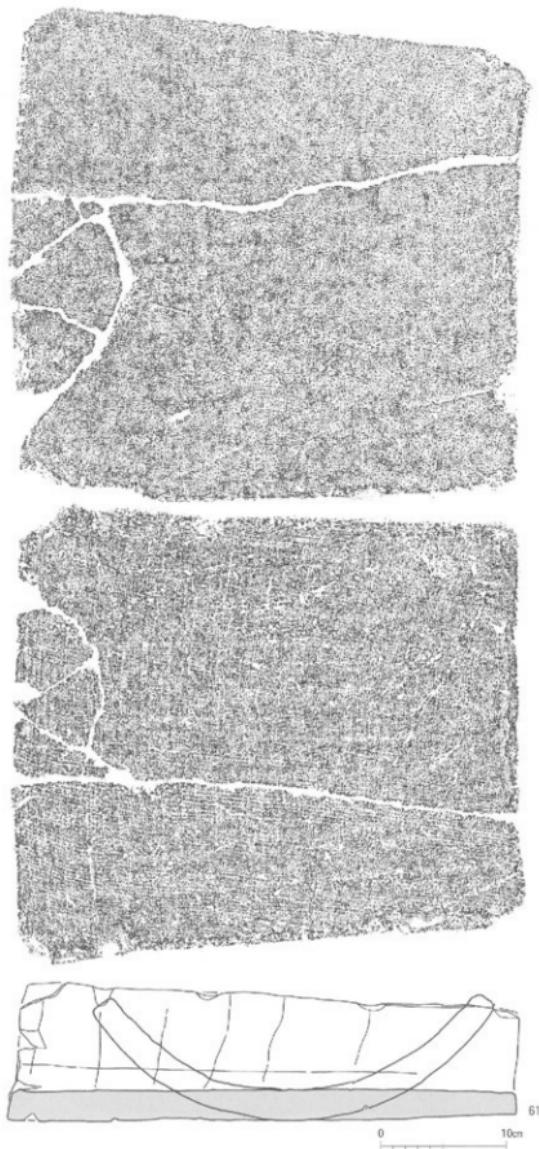


Fig. 25 平瓦 4B類 1:4

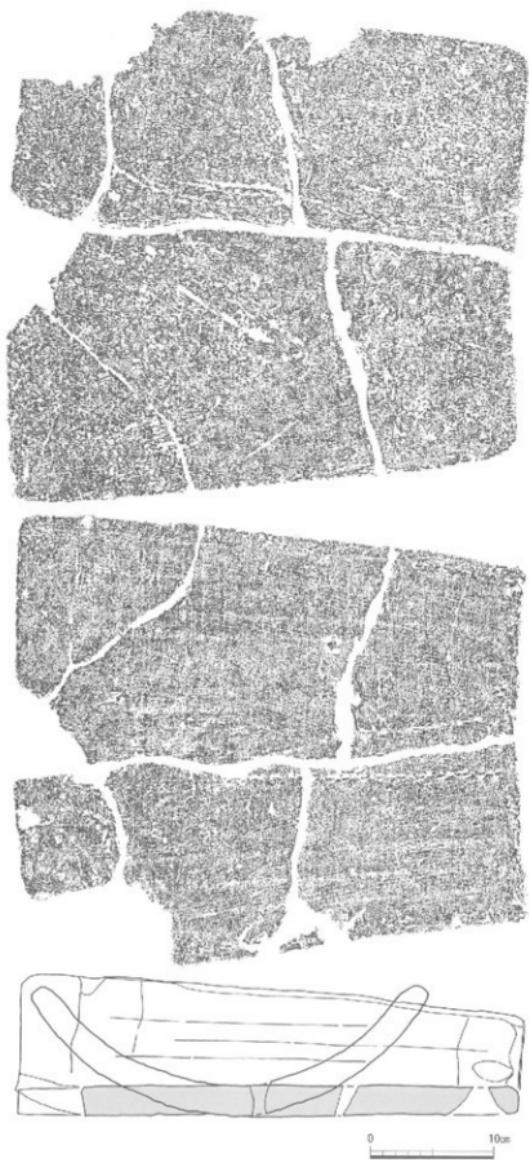


Fig. 26 平瓦 4B類 1:4

が鈍角になる。焼成は軟質。胎土はやや粗く、1mm大の長石・石英・チャートを含む。色調は5Y4/1灰色。井戸SE9346出土。

ii. 平瓦4B類 (52~68)

平瓦4B類は、粘土紐桶作りの綱叩きをもつ一群。叩き板の形状や、その後の調整手法で、a～cに分類できる。さらに平瓦4B類cについては、胎土や焼成の特徴からc1とc2に細分した。

平瓦4B類a (52) は、凸面全体に綱叩きをもつものである。綱の密度は7本/3cm。1点確認した。綱方向のナデ調整で、凹面の布圧痕および側板の段差をほとんどナデ消して平滑にする。側面調整はc手法で、凸面と側面との角度が鈍角になる。焼成は軟質。胎土はやや精良で、1mm大の長石・石英を少量含む。色調はN6/0灰色。南面外濠SD501出土。

平瓦4B類b (53～55) は、短冊形を呈す叩き板で、凸面全体を叩き調整した後にナデ消し、再度まばらに綱叩きを行う一群。綱叩きの綱の密度は、約8本/3cm。叩き板はいくつかバリエーションがあるが、明確に判別できなかった。凹面には調整がなく、粘土紐の接合痕、布圧痕を明瞭に残す。粘土紐の幅は4～5cm。焼成は軟質で、2～5mmの長石・石英を多く含む。

53は、全長41.4cmを測る。凹面には、布筒のとじ合わせ痕が確認できる。布のとじ目はぐし縫いで、縫い目もぐし縫い。側面調整はc手法で、凸面と側面の角度は鋭角になる。軟質の焼きで、2mm大の長石・石英を含む。色調は5Y6/1灰色。南面外濠SD501から出土した。

54は、全長38.4cmを測る。凹面には幅3.4cmの側板痕が残る。側板の段差が大きいところは、その連結部を綱方向にナデ調整をして平滑にする。側面調整はc3手法。色調は5Y6/1灰色。南

面外濠SD501出土。

55の凹面には、布筒のとじ合わせ痕が残り、向かって左側が布とのじ目痕、右側が布の縫い目痕で、どちらもまつり縫いである。色調は5Y6/1灰色。南面外濠SD501出土。

平瓦4B類c (56~68) は、報縄叩きで成形した後に繩叩きをナデ消す一筋である。焼成と胎土の特徴から4B類c1と4B類c2に2分できる。

平瓦4B類c1 (56~60) は、南面外濠SD501から一括出土した。瓦の厚さは薄手のものが多い。焼成は基本的に良好で、胎土には2mm程度の長石・石英を含む。

56は、回転台を利用した横方向の板ナデで叩き目をナデ消す。凸面の側縁際には、凹型台の痕跡がある。凹面は、縱方向に粗くナデされているが、側板痕が強い部分は布圧痕が残っている。側面調整はc手法。色調は2.5Y6/2黄灰色。

57は、凹面に、粘土紐接合痕、布圧痕、幅4cmの側板痕を明瞭に残す。側面調整はc1手法である。堅緻な焼成で、色調は5B5/1青灰色。

58は、全長36.7cm。凹面には、布圧痕と粘土紐の接合痕が残る。粘土紐の幅は約6cm。一部に布のとじ合わせ痕を留めるが、縱方向にナデで平滑にする。側縁際には、狭端と広端の2箇所に分割界点がある。側面調整はc手法。堅緻な焼きで、色調は5B4/1暗青灰色。

59は、厚さが1.2~1.5cmの薄手の平瓦である。凹面は、布のとじ合わせ痕が凹凸を縦方向にヘラケズリして平滑にする。側面調整はc1手法。色調はN4/0灰色。

60は、全長38.6cmを測り、粘土紐の接合面で割れているのがわかる資料。粘土紐の幅は6~8.5cm。凸面の側縁際の上半部には、凹型台の圧

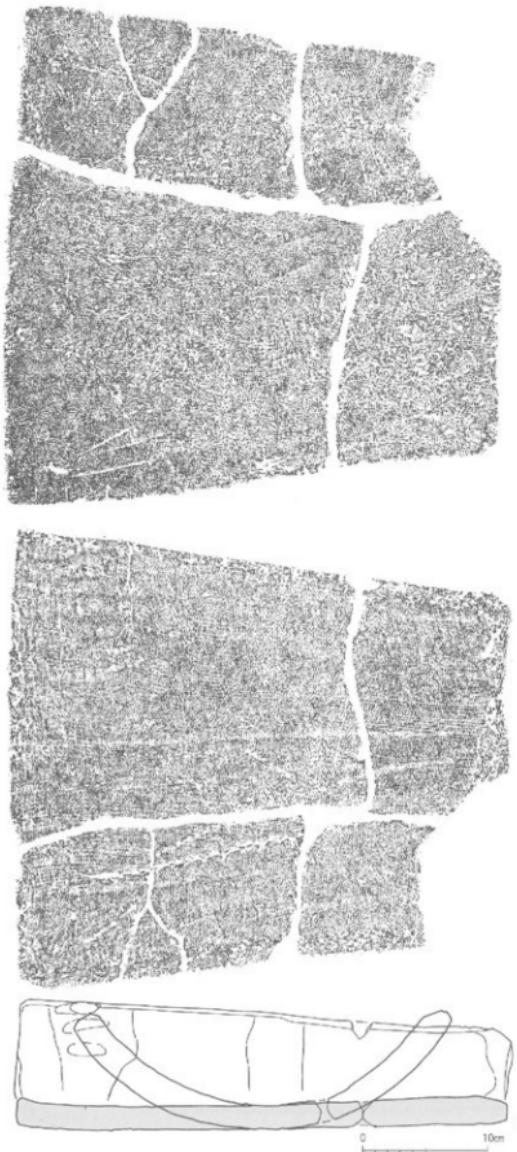


Fig. 27 平瓦 4B類 1:4



Fig. 28 平瓦 4B類 1:4

痕がある。側面調整はc手法。色調は5YR5/6明赤褐色。

平瓦4B類c2(61~68)は、南北溝SD9561から一括出土した。瓦は厚さ2.5~3.5cmと厚い。粘土縫を3分割した平瓦である。凹面には、粘土縫の接合痕、布压痕を明瞭に残す。焼成は軟質で、粗い胎土。3mm大の長石や石英を大量に含む。

61は、全長40.9cm、狹端幅29.6cm、推定広端幅33cm。凹面には、粘土縫の接合痕と布压痕が残る。粘土縫は、約4cmの幅で9段積み上げる。両側縁には、狹端側と広端側にそれぞれ2カ所の分割界点がある。側面調整はc手法。右の側縁は広端に近い部分で分割裁線を引き損じた痕跡がある。色調は2.5Y6/1黄灰色。

62は、全長41cm、狹端幅28.4cm、推定広端幅35cm。凹面には、布のとじ合わせ痕がある。とじ目・織い目ともまつり織い。また、瓦の中央付近の、狹端から1cm下がった部分に径3.5cmの円形の窪みがある。桶のとじ合わせに関係する痕跡だろうか。側面調整はc1手法で、狹端も凹面側をヘラケズリする。色調は2.5Y6/1黄灰色。

63は、全長39.5cm、推定狭端幅26cm、広端幅34.3cm。凸面全体を丁寧に斜位方向にナデ調整する。凹面には、幅5.2~6cmの粘土縫の接合痕と布のとじ合わせ痕が残る。布のとじ合わせ痕は、どちらもまつり織いである。また、右側縁際に分割界点がある。側面調整はc1手法。色調は10YR7/4にぶい黄橙色。

64は、全長39.1cm、推定狭端幅32cm、広端幅36.8cm。凹面には、粘土縫の接合痕、幅2.8cmの側板痕が明瞭に残る。また、両側縁には、分割界点がある。凹面向かって左の側縁の8mm内側に分割裁線の引き損じが残る。側面調整はc手法。色調は2.5Y6/6橙色。

65は、全長41.2cm。凹面からみて狹端の右側の角は、粘土縫の合わせ目で欠損している。合わせ目の上には狹端から広

端まで続く布のとじ合わせ痕があり、それに合わせ目を沿わせたのがわかる。側面調整はc手法。色調は2.5Y7/2灰黄色。

66は、全長41.3cm、狹端幅26.2cm、広端幅34cm。凹面に残る粘土紐の接合痕は、幅約4~6cmで、10段積み上げている。右の側縁には、分割界点が2カ所ある。また、62と同じように、分割界点とは別に、中央左寄りの狭端から4cm下に突起状の圧痕がある。側面調整はc手法。狹端の凹面もハラケズリして面取りをする。色調は5Y6/1灰色。

67は、広端幅34.1cm。凸面は、斜位にナデ調整する。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、どちらもまつり縫い。また、分割界点も両側縁に明瞭に残る。色調は7.5Y6/6橙色。

68は、推定広端幅32cm。凹面に残る粘土紐接合痕の幅は、他の4B類c2のそれよりも狭く、約3cmである。また、布のとじ合わせ痕も確認でき、ともにまつり縫いである。側面調整はc手法。色調は2.5Y5/6明赤褐色。

平瓦5類 (Fig.32, PL.27)

凸面をナデやハケ目などで調整して、もとの叩き目を全く残さない一群である。粘土板桶巻作りの5A類と粘土紐桶巻作りの5B類に分けることができる。

1. 平瓦5A類 (69~72)

69は、凸面を縱方向にハケ目調整する。また、焼成する際に、別個体の側縁が溶着した痕も残る。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、布とじも布の縫い目もまつり縫いである。側面調整はc手法。焼成は良好で、やや精良な胎土には長石・石英を若干含む。色調は10YR5/1褐灰色。第113次SN49東二坊坊間路東側溝SD6031から出土。

70は、Z型の粘土板の合わせ目で割れている資料。凸面には、横方向の板ナデ調整を行う。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、布のとじ目がぐ

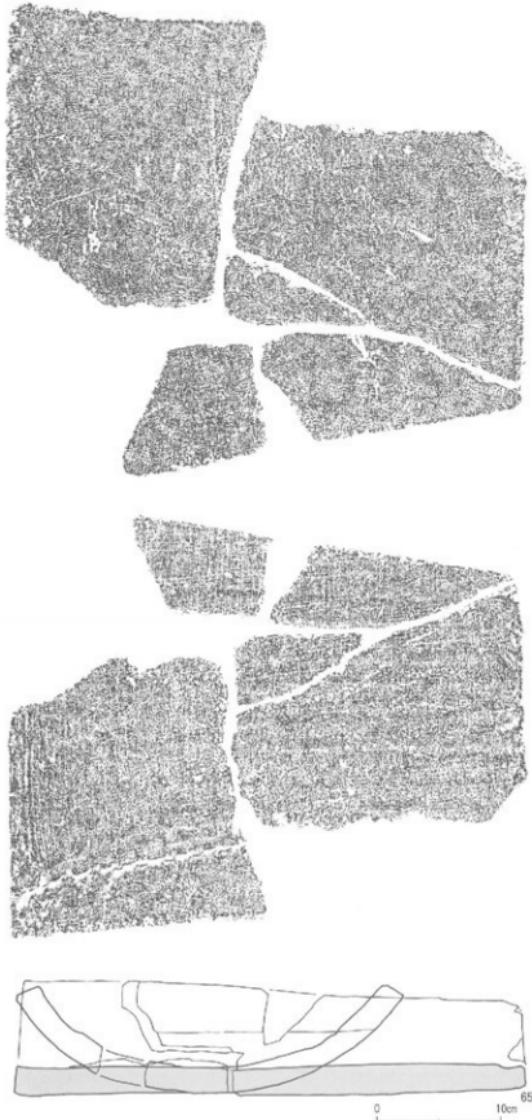


Fig. 29 平瓦 4B類 1:4



Fig. 30 平瓦 4B類 1:4

し縫い、布の縫い目がまつり縫いとわかる。また側縁際には分割界線の痕跡がある。焼成はやや軟質で1mm大的長石・石英・クサリ礫を少し含む。側面調整はc手法。色調は5YR5/1褐色。第113次SO49東二坊間路東側溝SD6031出土。

71は、凸面を縱のち横方向のナデで調整する。凹面は、左上がりに走る糸切り痕、布圧痕が明瞭に残る。側面調整はc3手法。焼成はやや良好で、長石・石英・クサリ礫を含む。色調は2.5Y6/1黄色。東西溝SD9323出土。

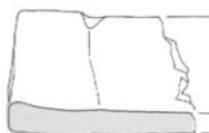
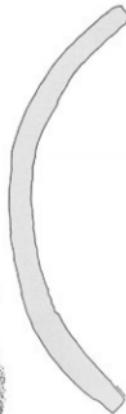
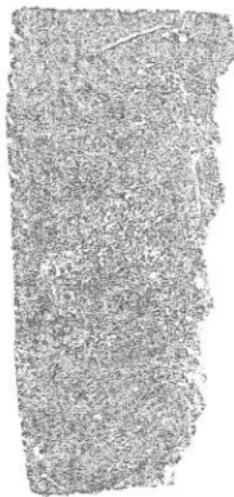
72は、凸面を回転台を利用した横ナデで調整する。凹面には、側縁際には筒と模骨の間にくぐる縱位の燃り繩の圧痕がある。分割界線と思われる。側面調整はc3手法。広端面は凹面側を取りする。焼成は堅緻で、2mm大的長石・石英・クサリ礫を大量に含む。色調は10Y5/1灰色。第113次SN49包含層出土。

ii. 平瓦5B類 (73)

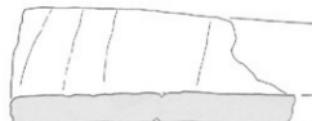
73は、粘土紐桶巻作りの平瓦。凸面調整は、横方向のハケ目で調整した後に、無文叩きで広端側を叩く。凹面には粘土縫の接合痕が残る。広端に近い側縁際には、分割界点の痕跡が残る。側面調整はa手法。堅緻な焼成で、胎土には1mm程度の長石・石英を若干含む。色調は10R5/2灰赤色。南北溝SD9561出土。SD9561から出土した中では、唯一須恵質の瓦である。焼成と胎土の特徴以外は、凹面に粘土縫の接合痕を明瞭に残すこと、分割界点、凸面ナデ調整など平瓦4B類c2と共通する点も多い。

平瓦6類 (Fig.33・34, PL.28・29)

凸面布目平瓦の一群である。本調査区から出土した凸面布目平瓦については、小谷徳彦が一部報告している²⁾。ここでは、氏の分類を基本的に踏襲してa～dに細分した。それぞれ小谷分



67



68

0 20cm

Fig. 31 平瓦 4B類 1:4



Fig. 32 平瓦 5A・5B類 1:4



74



75



76



78



79



0 10cm

Fig. 33 平瓦 6 類 1:4

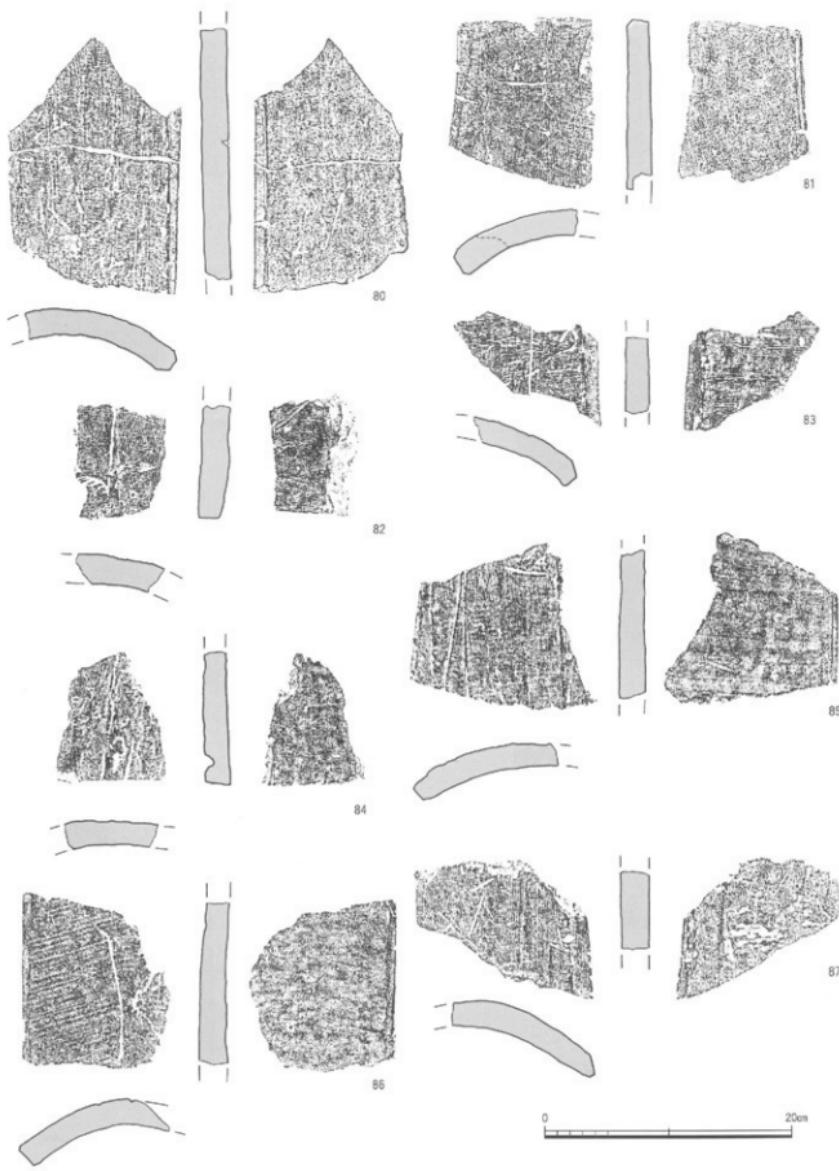


Fig. 34 平瓦 6類 1:4

類の1~4類に対応する。

平瓦6類a(74~77)は、凸面に布压痕と側板痕を明瞭に残す一群。狭端幅が残存する77から、かなり小型の平瓦とわかる。川原寺所用の凸面布目平瓦にあるような、布を側板に留めつける捺り紐(布留痕)は明瞭には確認できない。4.5~5cm毎に布が左右に引っ張られた痕跡がかすかにがあるので、かろうじて側板に布を留めつける捺り紐があつたと推測できる程度である。凹面は棒状の工具などで丁寧にナデて、叩きなどの痕跡は一切残さない。側面調整は全て、分割截面・破面とともにヘラケズリした後に凹凸面とも面取りするc3手法。胎土は精良で、1mm程度の長石・石英・クサリ礫を少し含む。小谷はこの一群を荒坂瓦窯産としているが、荒坂瓦窯産に特徴的な断面剣先形の側面をもつものがないこと、布留痕が明確に確認できることからも、荒坂瓦窯と比定するには若干疑問が残る。

74は、凸面に残った側板痕の幅は2.3cm。凹面は縦方向のナデ調整。焼成は良好で、色調は10Y5/1灰色。井戸SE9330出土。

75は、凸面に横位に走る糸切り痕が確認できる。堅敏な焼きで、色調は10BG4/1暗青灰色。井戸SE9328出土。

76は、凸面に残る側板の幅は2.3cm。凹型台を使用したためか、布目が一部潰れる。焼成は良好で、色調は2.5Y6/1黄灰色。井戸SE9330出土。

77は、狭端幅19.3cm。凸面には、横位に走る糸切り痕と縦の側板痕が確認できる。側板の幅は2.5cm。凹面は縦方向のナデの後に横方向にも丁寧にナデ調整する。側面は両側とも、広端から狭端に向かってヘラケズリする。焼成は良好で、色調は2.5Y7/1灰白色。東二坊間路西側溝SD6032より出土。

平瓦6類b(78~81)は、6類aに類似するものの、異なる点が3つある。1点目は、凸面の側板痕は平滑で、布留痕は確認できることである。2点目は、側面調整はすべてc3手法だが、凹凸を幅広くヘラケズリする場合が多いこと、3点目は、胎土が粗く、最大5mmの長石・石英・クサリ礫を多く含むことである。

78の凹面には、横方向のヘラ抜き線のような細い線が、破片の中央少し上よりと、広端側の側面に入っている。それを横方向にさらにナデ消す。詳細は不明だが、ナデ調整の工具が当たったとも考えられる。焼成は堅敏で、色調は5B5/1青灰色。第113次RE52表土出土。

79は、凸面に左上がりの糸切り痕が確認できる。凹面は、縦方向の丁寧なナデ調整。堅敏な焼成で、色調は

N3/1暗灰色。井戸SE9330出土。

80は、凸面に左上がりの糸切り痕、幅2.3cmの側板痕が確認できる。凹面は縦方向にナデた後、部分的に横方向にもナデで整える。焼成は良好で、色調は10YR7/2にぶい黄橙色。井戸SE9330出土。

81は、凸面に左上がりの糸切り痕と粘土板の合わせ目Z型が確認できる。凹面は縦方向のナデ調整。狭端は凸面側を面取りする。焼成は良好で、色調は5Y6/1灰色。第113次SN51包含層より出土。

平瓦6類c(82~86)の凸面には、糸切り痕を明瞭に残す。桶の側板痕は、明瞭に残るものと、そうでないものとがある。また、縦10cm程度の捺り紐の圧痕を残すものが多い。小谷徳彦は、これを布を側板に留めつけるための捺り紐と考えた¹⁾。実際に86をみると、捺り紐は布目の上にあり、しかもその両端は布筒の下にくぐるのがわかる。したがって、やはりこれは布留めのための捺り紐とみてよからう。布留痕ほど、側板に布をきっちり留めつけていないので、ところどころ布がよれているものが多い。凹面は粘土タタラを十分に練っていなかったせいいか、表面の凹凸が激しい。焼成は甘いものが多く、胎土は3mm大の長石・石英・クサリ礫を若干含む。

82は、凸面に布のはつれがみられ、広端から1.6cm上に捺り紐の圧痕が確認できる。凹面は横方向のナデ調整。焼成は軟質で、色調は7.5Y2/1黒色を呈す。第113次RF55灰褐土から出土。

83は、凸面に、横方向の糸切り痕と捺り紐痕が確認できる。凹面は横方向にナデしているが、凹凸が激しい。側面調整は、凸面側をヘラケズリするc2手法である。焼成は軟質で、色調はN4/0暗灰色。井戸SE9330出土。

84は、凸面の凹凸が激しい。凹面は横方向のナデ調整。焼成は軟質。色調は10YR7/3にぶい黄橙色。東西溝SD9323出土。

85は、凸面に幅2.8cmの側板痕が明瞭に残る。横方向の糸切り痕と捺り紐痕が確認できる。また、側縁に近い部分で、側板の上を斜めに走るダーツの痕跡があるが、縦い日痕は確認できない。凹面は横方向のナデ調整。側面調整はc3手法である。井戸SE9330出土。

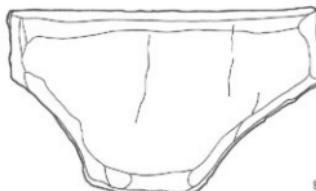
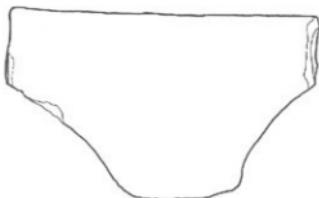
86は、Z型になる粘土板の合わせ目で割れている。凸面には、やや右上がりの糸切り痕と捺り紐痕が確認できる。凹面は横方向にナデしているが、凹凸が激しい。側面調整はc3手法。焼成は軟質で、色調は2.5Y3/2黒褐色。

4類d(87)は、軟質の焼成で、黄橙色の色調を呈する一群である。胎土は精良で、1mm程度の長石・石英・

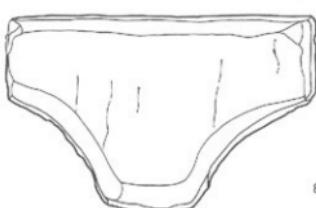
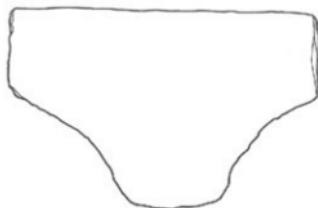
クサリ縫を含む。

87は、凸面に側板の圧痕を明瞭に残す。側板の幅は2.5cm。凹面は横方向のナブ調整。側面調整はc3手法だ

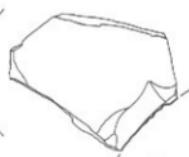
が、凸面からのヘラケズリが深く、凹面側は、凹面に沿うように幅広く面取りしているので、剣先形のような断面を呈す。第113次SH49包含層より出土。



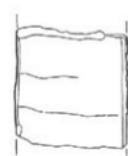
88



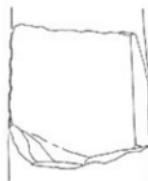
89



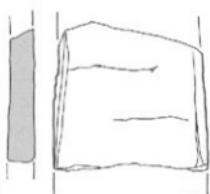
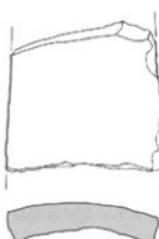
90



91



92



93



Fig. 35 面戸瓦・贊斗瓦 1:4

E 面戸瓦 (Fig.35, PL.30)

面戸瓦は全部で7点出土した。全て粘土紐巻きつけ技法の丸瓦を焼成前に加工した切面戸瓦である。ここでは、完形2点を含む3点を報告する。

88は、全長25.3cm、舌部上下幅16cm、両袖部の端部幅7.5cm、厚さ1.5cmを測る。凸面の調整は摩滅が著しく不明だが、凹面には布圧痕が明瞭に残る。また、面戸瓦の端面周囲全てを、凹面側からみて時計逆回りにヘラケズリする。焼成は軟質で、やや精密な胎土に2mm程度の長石・石英・クサリ繊を多く含む。色調は2.5YR3/1暗赤灰色。南北溝SD9561より出土。

89は、全長25cm、舌部上下幅15cm、左袖端部幅7.6cm、右袖端部幅9cm、厚さ1.3cm。凸面には、縦縄叩き後に、回転台を利用した縱方向のナデ調整を行う。面戸瓦に成形する前の丸瓦円筒の段階での調整である。凹面には、布圧痕が明瞭に残り、周囲全てを何度も分けてヘラケズリする。焼成は堅緻で、2mm程度の長石・石英を少し含む。色調は10R4/2灰赤色。南北溝SD9561出土。

90は、凸面からみて右の舌部から袖部にかけてが残存している。凸面は、縦縄叩きの後に横方向のナデ。凹面は、布圧痕が明瞭に残る。端面は、舌部から袖部に向かって凹面側からやや幅広のヘラケズリを行う。焼成は堅緻で、やや粗い胎土に2mm程度の長石・石英を多く含む。色調はN5/0灰色。南北外溝SD501出土。

F 賢斗瓦 (Fig.35, PL.30)

全部で5点出土した。全て粘土紐桶巻作り平瓦を焼成前に分割加工した切賢斗瓦である。そのうちの3点を報告する。

91は、破片の中央部の幅が9cm、厚さ1.4cmを測る。凸面は、縦縄叩きを横方向にナデ消す。凹面には、粘土紐の接合痕、布圧痕、幅約2.5cmの側板痕を明瞭にとどめる。側面調整は片方はa手法、もう片方はc手法である。焼成は良好で、胎土には2mm程度の長石・石英を多く含む。色調はN5/0暗灰色。土坑SK9740出土。

92は、破片中央部の幅が11cm。平瓦の側縁をそのまま用いたためか、片方の側縁が斜めに傾いて一方で幅が狭くなっている。凸面は、縦縄叩きを横方向にナデ消す。凹面には、布圧痕、幅約3cmの側板痕が残る。側面調整はc手法。焼成は良好で、2mm程度の長石・石英・クサリ繊を含む。色調は10YR7/3にぶい黄橙色。南北外溝SD501より出土。

93は、破片中央部の幅が12.5cm。92と同じく、幅が狭い方を上にした場合、凸面からみて左側が斜めに傾く。

凸面は縦縄叩きのちに、横方向のナデ調整。凹面は粘土紐の接合痕、布目痕、幅約3.3cmの側板痕が明瞭に残る。側面調整は片方がc手法、もう片方が凸面側を取りするc2手法。焼成は良好で、1mm程度の長石・石英・クサリ繊を多く含む。色調は7.5YR7/4にぶい橙色。南北外溝SD501出土。

G 小結

以上、これまで出土した瓦類を報告したが、本調査区には粘土板巻きつけ技法と粘土紐巻きつけ技法という異なる二つの技法で製作された瓦が存在する。これらは地點を変えて出土しており、六条大路SF2910を境にして以南では粘土板巻きつけ技法の瓦が、以北では粘土紐巻きつけ技法の瓦が主体を占める。つまり外周帯を含む宮内とその外とでは、瓦の様相が異なる(『紀要2001』)。ここでは、本調査区出土の瓦について、六条大路を挟んで南と北にわけて若干の考察を加え、小結としたい。

i. 六条大路以南の瓦—小山庵寺の瓦—

第113・131次調査区SF2910以南から出土した瓦類は、井戸SE9330もしくは包含層から出土したものが大半で、明確な建物の遺構に伴うものはない。しかし、重弧文軒平瓦、行基式の丸瓦1類、刻線叩きをもつ平瓦1~3類、平瓦6類とした凸面布目平瓦(以下、凸布)など、藤原宮の瓦とは明らかに異なる一群が分布する。さらに凸面に繩叩きがある瓦がほとんどないことも特筆できよう。

これらの瓦は、調査区から約200m南に位置する小山庵寺所用の可能性が高いことが『紀要2001』でも指摘されている。

小山庵寺所用の重弧文軒平瓦は、近江俊秀によって8型式に分類されている¹¹⁾。しかしながら、本調査で出土した重弧文軒平瓦は、そのどれとも合致しない。

また、櫻原考古学研究所が収蔵する小山庵寺の丸・平瓦の資料を実見すると、丸瓦は繩叩きが、平瓦は繩叩きと凸布が主体で、斜格子叩きはごく少量あるものの、本調査区出土の平瓦1・2類とは叩き原体が異なる。さらに平行刻線叩きに至っては全く確認することができなかった。このように小山庵寺の丸・平瓦は、六条大路以南出土の瓦とかなり異なる様相を示す。

ただし、凸布である平瓦6類は、細分したa~dの4種全て小山庵寺の凸布と共通することが確認できた。特に長い燃り紐痕をもつ平瓦6類cは、小山庵寺特有の凸布として注目できる。

したがって、平瓦6類のみが小山庵寺所用瓦で、それ以外の瓦は他の場所からの流出とするより、平瓦1~3

類も含めて小山廃寺所用の瓦と考えるほうが自然である。小山廃寺は、近江による出土瓦の詳細な分析で、最初に金堂・講堂が造営され、一定期間を経て中門・回廊、続いて藤原宮の造営中に南門造営と、建物によって瓦の様相はかなり異なることが明らかにされている¹⁾。現状では小山廃寺の堂宇の中で、平瓦1~3類と凸布を主体とする未発掘の建物が存在すると想定しておきたい。

ii. 六条大路以北の瓦—藤原宮の瓦—

六条大路SF2910以北から出土した瓦の量は、出土位置によって大きな偏りがあり、ほとんどが南面外濠SD501と南北溝SD9561からの出土である。特に南面外濠SD501出土の瓦は、埋没した外濠の上面に並べるような形で出土しており、意図的かは不明なもの、一括性が高い。

これらの瓦類は、藤原宮大極殿や朝堂院所用瓦と比べて若干小さい。また、軒瓦、丸・平瓦、道具瓦ともに一定の規格性があり、それぞれの瓦がぴったりと組み合う。したがって、この一群は、同じ建物で使用した瓦であり、出土位置からみても南面大垣の所用であろう。

藤原宮大垣所用軒瓦は、東面大垣で6276C-6647（飛鳥藤原第24次調査「藤原概報9」）、東面北門では6279B-6646C、6276C-6647C、6274Aa-6646A-Bのセットであり、また南門中門付近では6278B-6647D、6278C-6647Eが比較的多く出土することが指摘されている⁴⁾。

今回出土した軒瓦は非常に数が少なく、南面大垣の所用瓦を特定することは不可能である。しかし、南面外濠SD501出土の軒瓦に限れば、6275A・B、6643Cなど高台・峰寺産の製品が目立つ。また、6642Abは本調査区において3点出土しているが、そのうちの2点がクサリ繩を非常に多く含む高台・峰寺産の胎土だった。6642Abは高台・峰寺産の軒平瓦と製作技法が類似しながらも、クサリ繩を含まない粗い胎土であるが故に产地不明のPグループに分類されている⁵⁾。今回高台・峰寺産の胎土を備える6642Abの出土によって、6642Aの日高山寺瓦窯から最終的に高台・峰寺瓦窯へ移動した可能性が高くなつた⁶⁾。

さて、軒瓦は高台・峰寺窯が比較的目立ったが、丸・平瓦に目を転じると、高台・峰寺産の製品は少なく、丸瓦2類a、平瓦4B類といった、クサリ繩を含まない、砂粒の多い粗い胎土の製品が大部分を占める。これらの丸・平瓦は、ともに粘土紐巻きつけ技法である。

藤原宮造瓦における粘土紐巻きつけ技法は、その生産地が大和盆地内に限られる。南面外濠SD501と南北溝

SD9561から出土した瓦類の粘土紐巻きつけ技法の割合は、軒瓦も含めて100%である。この数値は、南門中門地域出土の軒丸瓦の粘土紐巻きつけ技法が占める割合が57%であることに比べると圧倒的に高い（『藤原報告II』）。もっとも、軒丸瓦のみと、丸・平瓦も含んだ瓦類全てとを単純には比較できない⁷⁾。しかしながら、大垣周辺部でも粘土紐巻きつけ技法の割合の高い箇所があり、しかも軒瓦と丸・平瓦とでは胎土や焼成が異なること、特に丸・平瓦の胎土は特徴的で、あまり宮中樞部ではみられないことは指摘できると思う。

大和盆地内で生産された藤原宮屋瓦には、瓦窯が特定できない造瓦グループが3つ存在する¹⁰⁾。本調査区で出土した丸・平瓦は、断定はできないが、そのうちのNやPといったグループの胎土に非常によく似ている。

今回の調査で、南面大垣周辺で粘土紐巻きつけ技法の瓦が多く出土したことは、藤原宮の大垣造営過程を考える上で重要である。また、藤原宮屋瓦は、宮造営を周辺部から中樞部へと進める中で、高台・峰寺瓦窯にその生産を集中させると考えられている。今回報告した六条大路以北の瓦によって、その前段階の宮周辺部造営における大和盆地産の瓦の一様相をうかがい知ることができた点でも大きな成果といえるだろう。

註

- 1) 人脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」「研究論集IX」奈文研、1991年
- 2) 小谷徳彦「飛鳥における凸面布目平瓦の一事例」「奈良文化財研究所紀要2004」奈文研、2004年
- 3) 前掲註2) 参照
- 4) 近江俊秀「7世紀後半の造瓦の一形態－明日香村小山廃寺を中心として－」「瓦衣千年」森郁夫先生還暦記念論文集、同刊行会、1999年
- 5) 前掲註4) 参照
- 6) 山崎信二「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」「文化財論叢II」奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎、1995年
- 7) 花谷治「寺の瓦作りと宮の瓦作り」「考古学研究」第40卷2号、考古学研究会、1993年
- 8) しかしながら、6643Abにクサリ繩を含まない粗い胎土の一群が存在することも事実である。これらの一群は、範例の進行具合から今回出土した高台・峰寺窯の胎土の6643Abよりも若干先行すると思われる。
- 9) 実際、西方官衙では丸・平瓦における粘土紐巻きつけ技法の割合が軒瓦のそれよりも高い（『藤原報告II』）。
- 10) 前掲註7) 参照

3 土器類

高所寺池の調査では、縄文時代～近代にかけての遺物が出土した。古墳時代、飛鳥・奈良時代、鎌倉時代土器の出土量が多く、六条条間路南側溝SD4752や東西大溝SD9633では多量の土器が出土した。

本稿では、遺跡を理解する上で重要な遺構からの出土土器を中心に報告する。藤原宮前後の遺構については、宮内・宮外での土器のあり方を知るために項目を分けた。なお、古墳時代土器の調査技術名や時期区分については、田辯昭三氏による陶邑編年、その他の土器の記載方法は『藤原報告Ⅱ』など、既刊の奈文研刊行物に従う。

A 条坊関係遺構出土土器 (Fig.36~40)

現・高所寺池は、藤原宮南面大垣SA2900をもって藤原宮内・宮外に分かれる。調査では南面大垣S△2900や六条大路SF2910を中心に、南面内濠SD502・外濠SD501、東二坊間路の東西側溝SD6031、SD6032A・B、六条大路の南北側溝SD2909、SD2915、六条条間路SF4750の南北側溝SD4752・4751という、条坊関係遺構を多く検出した。各遺構の遺物出土量は概して少なく、まとまった出土量をみることができるのは、東二坊間路西側溝SD6032Bと六条条間路南側溝SD4752のみである。

藤原宮南面大垣内濠SD502・外濠SD501出土土器 (Fig.36)

南面内濠SD502・外濠SD501では、ごく少量の土器が出土した。内濠出土土器には土師器杯A、杯G、高杯A、須恵器壺蓋がある。外濠では土師器杯II、皿A、須恵器杯B、壺などが出土した。

1は土師器杯Cの口縁部である。口縁部は肥厚する。内面はヨコナデのち一段放射暗文を施す。外面は口縁部にヨコナデのちミガキを施す。口縁部以下はナデる。口径は16.0cm。2は杯G。やや平坦な底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁部内面には面をもつ。見込み部分には植物の圧痕が残る。底部外表面をナデ、のち口縁部をヨコナデする。口径17.6cm、器高4.0cmを測る。3は

土師器杯H。底部は大半を欠く。底部内面はナデ、外面はヘラケグリする。口縁部はヨコナデする。口径は15.2cmを測る。4は皿A。口縁部から見込み部分までが遺存する。口縁端部は内側へ折る。口縁部内面には一段放射暗文を施す。口径は23.0cmである。5は高杯Aの脚部。裾部を欠失している。芯棒成形後、内面を工具で削り、外面を面取りする。

6は須恵器杯B。平坦な底部にやや外方へ開く口縁部がつく。高台の貼付位置は、立ち上がり部分よりも内側にある。口径18.4cm、高台径12.0cm、器高4.4cmを測る。7は須恵器壺蓋。丸みのある頂部に、受部よりも僅かに突出する口縁部がつく。つまみは欠失している。頂部内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケグリする。口径は9.0cmである。8は中型壺の口縁部。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部外面には面をもつ。口径は24.2cm。

南面内濠SD502・外濠SD501出土土器は、外面にミガキを施す土師器杯Cや、立ち上がり部分よりも内側に高台を貼り付ける須恵器杯Bがある一方、口縁端部を内側に折り曲げる土師器皿Aなど、新しい様相を示す土器も少量含んでいる。したがって、本遺構出土土器は飛鳥IV～V、すなわち7世紀末～8世紀初頭に主体があるといえる。

東二坊間路西側溝SD6032B出土土器 (Fig.37)

東二坊間路西側溝は新旧2条ある。新しい側溝SD6032Bでは比較的多くの土器が出土した。土師器には杯A・杯C・杯G・杯H・皿B・鉢・壺Bなどがある。須恵器は杯B蓋・鉢・壺・壺などが出た。

9、10は土師器杯A I。平坦な底部に、やや外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸く肥厚し、やや内側へ傾く。内面はヨコナデのち二段放射暗文を施す。外面の調整は、底部にヘラケグリを施す手法による。口径は9.4×17.6cm、10は18.0cm、10の器高は6.0cmを測る。11は杯C II、12は杯C I。12は底部を僅かに欠く。口縁部外面から内面全体をヨコナデする。11は一段放射暗文と螺

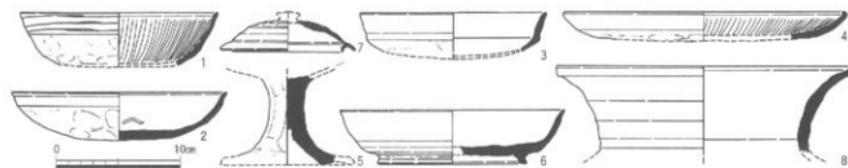


Fig. 36 南面大垣内濠SD502・外濠SD501出土土器 1:4



Fig. 37 東二坊坊間路西側溝SD6032B出土土器 1:4

旋暗文を施す。底部外面には、指頭圧痕が明晰に残る。12は摩滅が激しく、暗文の有無は不明。11は口径14.0cm、器高3.2cmで、12は口径16.4cm。13は杯G。完形に復元できる。口径は11.0cm、器高は2.8cmである。14は杯H。底部の大半を欠失する。器壁は厚みがある。外面は、底部と口縁部の境に鈍い稜がある。口径15.0cmを測る。15は皿B。底部の大半と高台を欠失する。底部外面には高台の貼付痕跡が残る。口縁端部は外傾する面をもつ。内面は、ヨコナデの二段放射暗文を施す。口径は26.0cm。16は鉢で、底部を欠失する。内面全体をナデ、外面は底部にヘラケズリを施し、のち口縁部を磨いて仕上げる。焼成は甘く、内面に暗文はみられない。口径は22.0cmである。17は壺B。丸みのある体部に、大きく外方へ開く口縁部がつく。口縁端部外面には面をもつ。把手の接合方法は貼付技法による。体部内面にハケメを施したのち、ナデを施す「大和型」の資料である。口径は32.4cm。18は鍋B。丸みのある底部に、大きく外反する口縁部がつく。端部は丸くおさめる。体部内面はヨコハケのちナデを施す。底部はユビオサエを施す。外面はタテハケのち底部をナデる。口縁部はヨコナデする。口径25.2cm、器高10.0cmを測る。

19は須恵器杯B蓋。ほぼ完形で出土した。やや丸みのある頂部に、先端のやや突出した宝珠つまみと小さなかえりのある口縁部がつく。ロクロ成形後、頂部内面をナデ、外面の三分の一程度をロクロケズリする。頂部内面には施で「大鳥評」と記す。これは河内国大鳥郡の大宝令以前の表記である。陶邑古窯址群の大半が大鳥郡に含まれることから、この蓋も陶邑産であり、土器の貢納制の一端を示す重要な資料である。口径16.4cm、器高3.3cmである。20は鉢。底部は欠失する。口縁端部は粘土を外方へ折り曲げ、上面に面をもたせる。底部は内面をナデ、外面をロクロケズリする。カキメを施したのち、ヘラ記号「！」を記す。口径は28.4cmである。21は台付長頸壺。高台と口頸部は欠失している。肩部はやや張る。体部下半はロクロケズリののち、二条の沈線を施す。肩部には沈線と刺突文を施す。22は壺C。体部下半を欠失する。最大径は体部上位に求められる。口縁端部上面は面をもつ。外面は格子目タタキののち、カキメを施す。内面はロクロナデを施すが、同心円当具の痕跡が残る。口径は54.4cmを測る。

これら東二坊坊間路西側溝SD6032B出土土器は、口縁端部を軽く内側へ折り込む土器杯A Iや皿B、やや平坦な頂部に小さなかえりをそなえた口縁部がつく須恵

器杯B蓋の存在に特徴がある。したがって、本遺構出土土器は、飛鳥IV～V（7世紀末～8世紀初頭）に比定できよう。

東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器 (Fig.38)

高所寺池の東辺に位置する東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器の大半は古墳時代の土器である。古代の土器はごく僅かであるが、土師器には高杯、壺など、須恵器には杯A、杯B蓋、壺などがある。

23は土師器高杯H。杯底部の一部および裾部を欠失する。杯部は浅く、底部もやや平坦である。底部内面をナデ、外面をヘラケズリし、口縁部をヨコナデする。柱状部は内面をヘラケズリして成形する。軟質で、柱状部外面の調整は不明。口径は15.0cmを測る。

24は須恵器杯A。底部と口縁部の一部が出土したのみである。底部外面はヘラ切りする。25は杯B蓋。完形で出土した。丸みのある頂部に、小さなかえりをもつ口縁部と、丸みのある宝珠つまみがつく。頂部外面の二分の一程度をロクロケズリする。口径10.6cm、器高2.8cmである。26は中型壺である。口縁部から体部上位にかけての破片が出土した。口縁部は面をもつ。体部内面に同心円当具をあてがい、外面は、ほぼ全面に平行タタキを施す。のち、体部外面にカキメを施し、口縁部をロクロナデで仕上げる。口径は19.4cmを測る。

これら東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器は、出土量は少ないものの、飛鳥IV～Vすなわち7世紀末～8世紀初頭に比定できよう。

六条条間路南側溝SD4752出土土器 (Fig.39・40)

高所寺池の北辺に位置する六条条間路南側溝SD4752では多量の土器が出土した。土師器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、ロクロ製土師器杯C、皿A、高杯C、高杯H、壺A、壺B、長胴壺などがある。須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、碗A、鉢F、壺、短頸壺蓋、壺などがある。

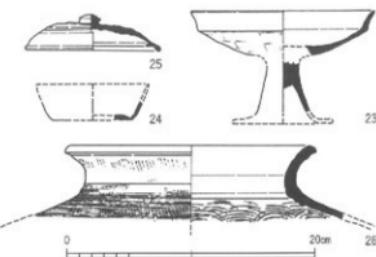


Fig. 38 東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器 1:4

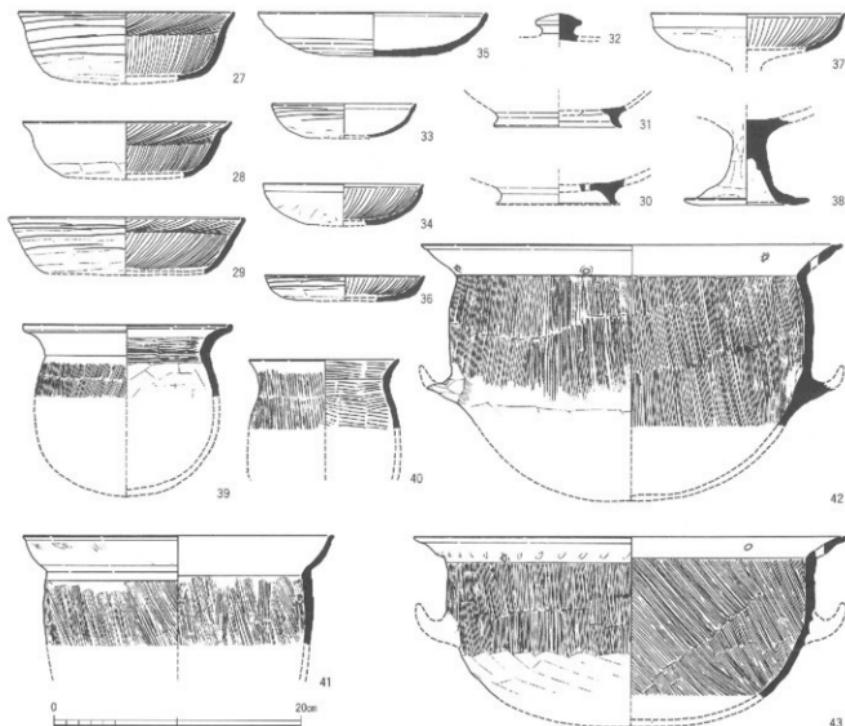


Fig. 39 六条条間路南側溝SD4752出土土器 1:4

27~29は土師器杯A。いずれも底部を失する。口縁部は27、28が丸くおさめるのに対し、29は内側へ折り込む。内面は底部をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、二段放射暗文を施す。27の外面は、口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリし、ミガキを口縁部のみに施すb1手法による。28は口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリするb0手法である。29はb1手法を基調とするものの、口縁端部直下のみをヨコナデし、以下にヘラケズリを施す点で特異であるといえる。口径は13.2~19.2cmを測る。30、31は杯B。いずれも底部のみの出土で、焼成後に円孔を穿つ。底部内外面はナデを施す。31の高台径は10.2cmである。32は杯B蓋。つまみのみの出土である。33、34は杯C II。いずれも底部を一部失する。33は口縁部をヨコナデし、外面にミガキを施す。内面には暗文は見られない。34は、底部内面をナデ、口縁部をヨコナデした後、

一段放射暗文を施す。口径は33が11.8cm、34が13.2cmである。35はロクロ製土師器杯C。ほぼ完形で出土した。底部外面をロクロケズリする。口径18.6cm、器高3.6cmを測る。36は壺A。底部を一部失する。内面は、底部をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、一段放射暗文を施す。外面調整はb1手法による。口径は13.0cmである。

37は高杯Cの杯部である。口縁部を強くヨコナデしたのち、一段放射暗文を施す。口径は16.0cm。38は高杯A。脚柱部のみが出土した。芯棒成形後、脚部内面を工具で削り、外面を面取りする。据部はヨコナデする。据部径は10.4cmである。39、40は壺A。39は体部中位以下を欠く。体部は内面にケズリ、外面にハケメを施したのち、口縁部内面をハケメ、外面をヨコナデで仕上げる。40は、やや膨脹な体部に直線的にやや外方へ開く口縁部がつく。内外面全体に粗いハケメを施す。口径は39が17.0cm、40

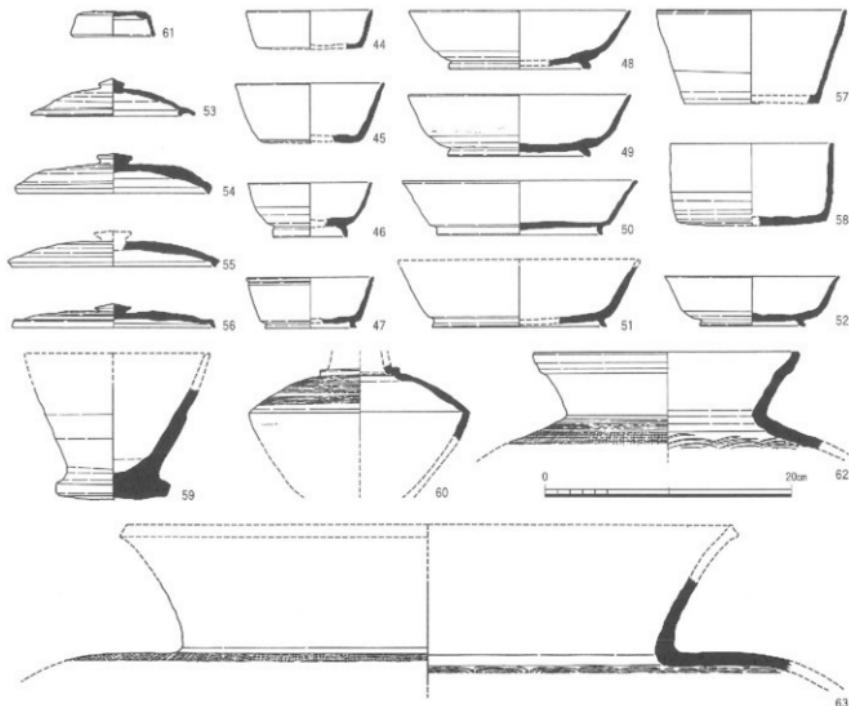


Fig. 40 六条条間路南側溝SD4752出土須恵器 1:4

が12.2cmである。41は長胴甕。緩やかに内湾する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデする。口縁部外面にはハケメの痕跡が残る。42は甕B、43は鍋B。いずれも底部と把手を欠く。内外面にハケメを施したのち、底部外面をヘラケズリする。口縁部はヨコナデののち、円孔を穿つ。各円孔の間隔より、その数は42は8箇所、43が7箇所程度と推測できる。口径は42が34.4cm、43は35.4cm。これらの甕は、体部内面の調整技法や口縁部の形態から39が河内型、40~43は近江型と判断できよう。

44、45は須恵器杯A。いずれも底部の一部を欠失する。口径は44が10.2cm、45が12.0cmで、45がやや深手である。46~52は杯B。口径の大小により三種に分かれ。杯B III (46、47) の高台の貼付位置は立ち上がり部分よりも少し内側にある。高台端部は46が丸くおさめるのに対し、

47は平坦である。47の口縁端部外面には一条の沈線を巡らせる。46が口径10.0cm、高台径6.0cm、器高4.4cm、47は口径10.4cm、高台径7.4cm、器高4.0cmである。杯B I・B II (48~52) の口縁部は、底部から大きく外方へ開く。50以外は器壁に厚みがあり、立ち上がり部分よりもやや内側につけた高台はやや外方へ開く。口径は17.9~19.0cm、高台径は11.4~14.2cm、器高は4.5~5.0cmを測る。53~56は杯B蓋。53のみ口縁部にかえりを有する。いずれも頂部外面はロクロケズリ、内面にはナデを施す。つまりの先端は、53が尖るのに対し、54、56は扁平である。法量は口径10.8~16.6cm、器高2.0~2.8cmである。57、58は椀A。いずれも底部の一部を欠失する。口縁部は平坦な底部から、ほぼ垂直に立ち上がる。底部をヘラ切りしたのち、口縁部中位以下をロクロケズリする。口径は57が15.5cm、58が13.4cmである。59は鉢F。口縁端部を欠

失する。底部はヘラ切りする。軟質で胎土が脆いため、使用痕を確認することはできない。60は長頸壺。体部中位から頸部の破片が出土した。肩部は強く張る。体部と頸部をそれぞれロクロ成形し、接合する。その際、体部と頸部の境に粘土紐を巡らせ、ロクロナデする。体部は肩部より上にカキメを施す。壺におけるこのような接続方法は東北地方でもみられるが、接合の様子は多少異なるので、東北産とは言い切れない。61は須恵器短頸壺蓋。扁平な頂部に、垂下する口縁部がつく。口縁端部外面には面をもつ。頂部内面はナデを施すが、外面は降灰のため、ヘラ切り後の調整は不明。口径6.4cm、器高2.0cmである。62は中型壺。口縁部から体部上位までの破片が出土した。体部外面は、平行タタキを施したのち、カキメを施す。内面には同心円当具痕が残る。口縁部は外側ともにロクロナデで仕上げる。口径は21.8cmである。63は大型壺。端部を除く、口縁部から体部上位までの破片が出土した。体部外面は格子目タタキを施す。口縁部はロクロナデで仕上げる。

以上が六条糸間路南側溝SD4752出土土器の概要である。土師器は杯Aに器高が高いものと浅いものがあること、杯Bの高台が安定したことで、立ち上がり部よりやや内側に位置すること、壺の口縁端部外面に面を持たないことに特徴がある。須恵器は、丸みのある頂部に扁平なつまみとかえりのない口縁部がつく杯B蓋が多いこと、立ち上がりより内側に位置しながらも、垂下せずやや外方に広がる高台を持つ杯Bが多いことに特徴がある。よって、本遺構出土土器の主体は飛鳥IV～V（7世紀末～8世紀初頭）にその年代が求められる。

B 藤原宮域内の遺構出土土器 (Fig.41～45)

藤原宮域内の遺構には、掘立柱建物や塀、溝、土坑などがある。遺構の密度は、南へ向かうにつれ低くなる。多量の土器が出土した遺構には、東西大溝SD9633や土坑SK9660などがある。

東西棟建物SB9600・南北塙SA9595・SA9636・東西塙SA9580出土土器 (Fig.41) 掘立柱建物や塀など、建物の柱穴から出土した土器の量はごく僅かである。土師器には杯C、杯G、杯H、高杯H、ロクロ製土師器杯B蓋と、須恵器には杯A、杯B蓋、杯G蓋がある。

64は須恵器杯A、65は杯B蓋。東西棟建物SB9600の抜取穴から出土した資料である。64は、ほぼ完形で出土した。平坦な底部にやや外方へ開く口縁部がつく。底部外面はヘラ切りのまま。口径11.1cm、器高5.0cm。65は平坦な頂部に、小さなかえりをそなえた口縁部と、先端の

丸いつまみがつく。口径14.8cm、器高2.6cmを測る。

66、67は南北塙SA9595出土土器である。66はロクロ製土師器杯B蓋。口縁部から頂部の一帯にかけての破片が出土した。内面にはかえりの剥離痕が残る。口径は11.4cmである。67は完形の須恵器杯G蓋。平坦な頂部に、かえりをもつ口縁部と先端の尖ったつまみがつく。かえりは受部よりも突出しない。頂部外面の三分の一をロクロケズリする。口径11.8cm、器高3.2cmを測る。

68～71は東西塙SA9580出土土器である。68は土師器杯C。底部を僅かに欠失する。口縁部は上方へ伸びる。底部内面から口縁部外面をヨコナデする。底部外面はユビオサエを施す。内面には放射状暗文を施す。口径は10.2cm。69は杯G。底部を僅かに欠く。口縁部はやや外方に広がる。口径は11.0cm。70は杯H。口縁部と底部の境には明瞭な後がある。口径は12.0cmを測る。71は高杯Gの脚部である。中央の柱状部に大きく外方へ開く裾部がつく。裾の端部は丸くおさめる。脚部内面をヘラケズリし、外面を面取りする裾部はヨコナデする。裾部径は11.2cm。

72は南北塙SA9636出土の土師器杯G。完形に復元できる。口縁部は外方へ開く。口径は15.1cmを測る。

以上が掘立柱建物および塀からの出土土器の概要である。掘立柱建物SB9600出土土器は、平坦な頂部で小さなかえりがつく須恵器杯B蓋や底部の平坦な杯Aから飛鳥IV（7世紀末）に比定できる。南北塙SA9595出土土器は、平坦で器高の低いロクロ製土師器杯B蓋と、かえりの位置が接地面近くにある須恵器杯G蓋から飛鳥IV、南北塙SA9636出土土器は、杯Gの法量から飛鳥IV、東西塙SA9580出土土器は、土師器杯の法量から飛鳥IV～V

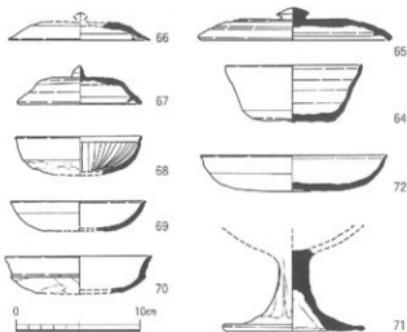


Fig. 41 掘立柱建物・塙出土土器 1:4

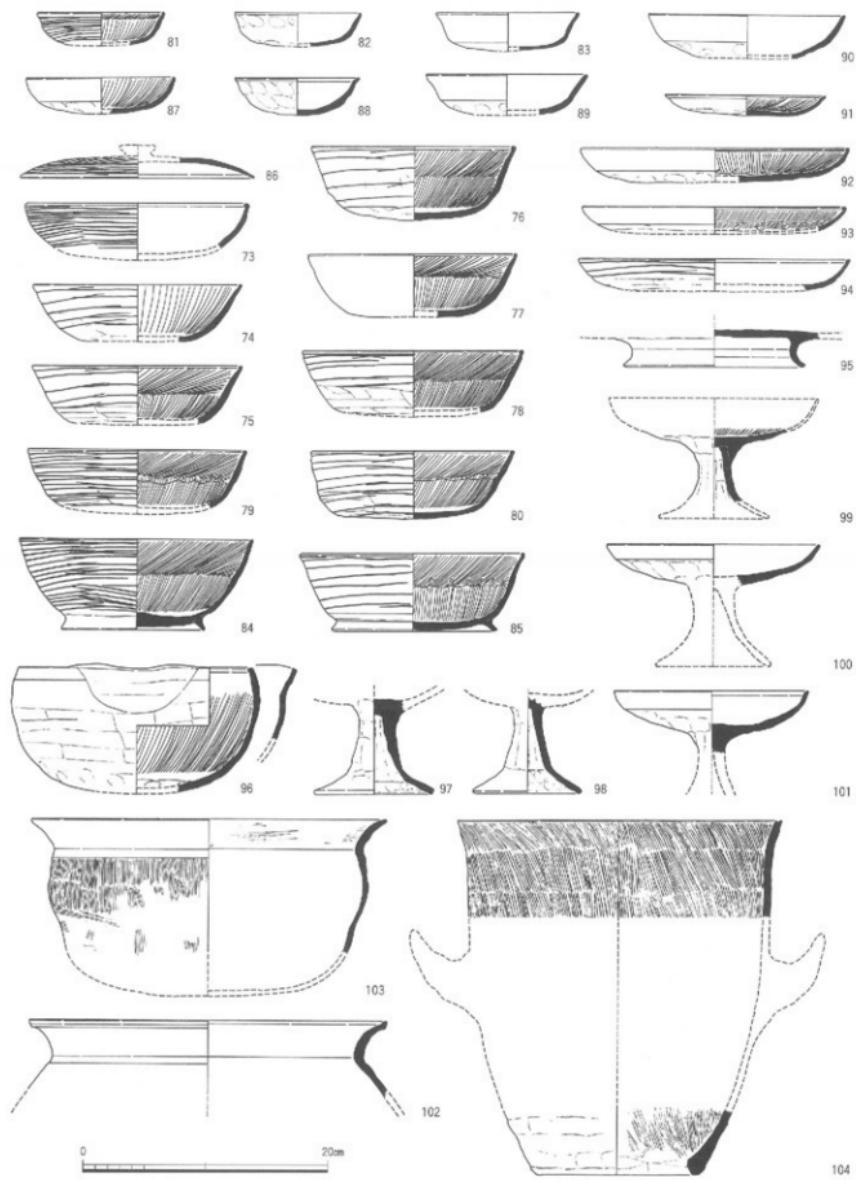


Fig. 42 東西大溝SD9633出土土師器 1:4

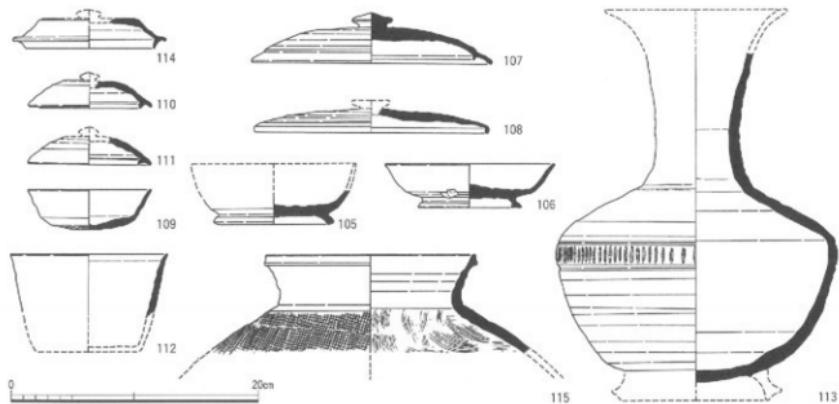


Fig. 43 東西大溝SD9633出土須恵器 1:1

(7世紀末~8世紀初頭)頃に比定できる。

東西大溝SD9633出土土器 (Fig.42・43) 高所寺池の北西に位置する東西大溝SD9633では、比較的多量の上器が出土した。土師器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、皿A、皿B、鉢、高杯、壺、鍋、瓶がある。須恵器は杯B、杯Gの蓋と身、椀A、台付長颈壺、甕などがある。

73~83は土師器杯A。口縁端部はやや肥厚しており、中には、やや内側へ折り込むものもある。内面の暗文は、一段放射暗文を施すもの(74)、二段放射暗文を施すもの(75~78、81)、二段放射暗文と連弧文を施すもの(79、80)の三者がある。外面の調整は73が口縁部をヨコナデするa1手法、74、75、78がb1手法、76、80はb3手法による。82、83は風化のために暗文の有無や調整は不明。84、85は杯B。厚みのある底部に、上方へ直線的に伸びる口縁部と外方へ広がる高台がつく。口縁端部は丸くおさめるが、85はやや内側に折り込む。底部内外面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、84は内面に二段放射暗文を、85は二段放射暗文と連弧文を施す。外面の調整はともにa1手法による。法量は、84が口径19.0cm、高台径11.6cm、器高7.4cm、85が口径16.1cm、高台径12.8cm、器高6.4cmを測る。86は杯B蓋。頂部の一部とつまみを欠失する。内外面をナデ、のち外面にミガキを施す。口径は19.0cm。87は杯CⅡ。やや平坦な底部に内穹しながら立ち上がる口縁部がつく。底部中央をわずかに欠失する。口縁部をヨコナデしたのち、口縁部内面に一段放射暗文を施す。口径は12.0cmである。88~90は杯G。内面はいずれも底部をナデたのち、口縁部をヨコナデする。外面は、口縁

部をヨコナデするもの(89、90)が多い。法量は、口径10.2~13.0cm、器高は2.4cm程度である。91~94は皿Aである。口縁端部は内面に段をもつもの(91)丸くおさめるもの(92、94)と、内側へ折り込むもの(93)がある。91は口縁部に一段放射暗文を施す。外面調整は、ヘラケズリしたのち、口縁部をヨコナデするb0手法。口径は13.0cm、器高2.0cmである。92~94はいずれも底部の一部ないし大部分を欠失する。92、93は底部内面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、口縁部内面に一段放射暗文、見込み部分には螺旋暗文を施す。外面の調整は、92がa0手法、93がb0手法である。いっぽう、94は底部内面をナデ、口縁部をヨコナデする。外面の調整はb1手法による。口径は21.4~22.0cmである。95は皿B。平坦な底部に高めの高台がつく。高台下位は大きく外反する。底部内外面はナデ、高台はヨコナデで仕上げる。高台径は14.4cmである。96は鉢。半球形を呈しており、口縁部の一部を片口とする。内面全体をナデ、外面全体をヘラケズリしたのち、口縁端部をヨコナデする。内面の見込み部分よりも上には一段放射暗文、見込み部分には螺旋暗文を施すが、いずれも粗雑である。片口部分を除いた口径は19.2cmを測る。97~101は高杯。完形に復元できるものはない。97、98は脚部。裾部外面は面をもつ。裾部内面には指頭圧痕が残る。裾部径は97が9.4cm、98が8.4cmを測る。100、101は杯部の破片。底部をナデ、口縁部をヨコナデする。杯部内面に暗文をもつのは、99のみである。口径は100が17.2cm、101が15.7cmである。102は甕A、103は鍋A。102は体部のほとんどを、103は底部を欠失

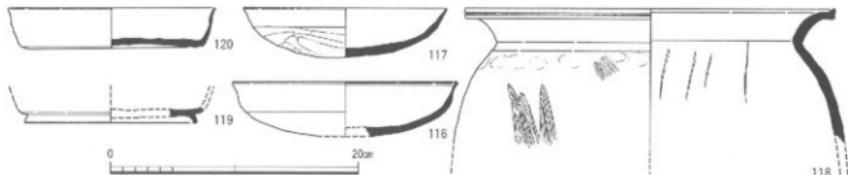


Fig. 44 南北溝SD9577出土土器 1:4

する。102は体部内外面をナデ、口縁部をヨコナデで仕上げる。103は胴の短い体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面にナデ、外面にハケメを施し、のち口縁部をヨコナデする。口縁部内面にはヨコハケの痕跡がうかがえる。両者とも、体部内面をナデすることから「大和型」と判断できる。口径は102が29.2cm、103が29.0cmである。104は瓶。底部と口縁部が出土した。口縁部内外面にハケメを施す。内面のハケメは底部付近まで施す。底部内外面はヘラケズリする。外面には粘土紐の接合痕がみられる。口径26.4cm、底部径13.2cmを測る。

105、106は須恵器杯B。105は口縁部を欠失する。高台は、立ち上がり部分よりも内側につく。底部外面をヘラ切りし、内面をナデする。105は高台径8.9cm、106は口径13.7cm、高台径8.4cm、器高3.65cmを測る。107、108は杯B蓋。107は完形に復元できる。やや丸みのある頂部に、小さなえりをそなえた口縁部がつく。つまみは中央部分がやや尖る。108は、平坦な頂部にかえりのない口縁部がつく。つまみは欠失する。頂部内面をナデ、外面のほぼ全面をロクロケズリする。法量は107が口径16.6cm、器高4.2cm、108が口径18.8cmを測る。109は杯G。やや丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。底部内面をナデする。底部外面はヘラ切りのまま。口径10.1cm、器高3.3cmを測る。110、111は杯G蓋で、つまみを欠失している。丸みのある頂部をもつ。110は、かえりが受部よりもわずかに突出する。111は受部とかえりの二点で接地する。頂部内面をナデ、外面をロクロケズリする。口径は8.2cmと10.0cmである。112は碗Aの口縁部である。口縁端部は強くヨコナデし、内傾する面をもたせる。口径は12.8cm。113は台付長頸壺。高台と口縁部を欠く。体部中位以下はロクロケズリする。肩部には刺突文とそれを挟む沈線を下一条ずつ施す。114は壺蓋。つまみは欠失している。平坦な頂部に、受部よりも大きく突出するかえりがつく。頂部内面はナデを施す。外面は降灰のため、調整は不明。口径は10.5cm。115は中型壺。口

縁端部外面は面をもつ。体部外面には格子目タキを施す。口縁部はロクロナデする。口径は17.0cmを測る。

以上が東西大溝SD9633出土土器の概要である。土師器は、杯A・杯Bの器高が深く、口縁端部を丸くおさめるものが多いこと、高杯は杯部がかなり浅いことのほか、やや平坦な頂部にかえりのない口縁部がつく杯B蓋、肩部にやや丸みのある台付長頸壺の存在に大きな特徴がある。ただ、頂部が丸くかえりが受部よりも突出しない須恵器杯G蓋など、古い様相を示す土器も一定量含んでいることから、これらの土器群は飛鳥IV～V、すなわち7世紀末～8世紀初頭頃に求められよう。

南北溝SD9577出土土器 (Fig.44) 南北溝SD9577は、高所寺池の北東部に位置する。遺物の出土量は少ない。土師器には杯C、杯H、壺Aなど、須恵器には杯B、皿Aなどがある。

116は土師器杯C。丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめ、端部内面は沈線状に凹む。b手法で調整し、底部外面に黒斑がある。口径は18.2cmを測る。117は杯H。丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。底部は内面をナデ、外面をヘラケズリする。口縁部はヨコナデする。口径16.6cm、器高4.0cmである。118はいわゆる「大和型」の壺A。丸みのある体部に外方へ大きく開く口縁部がつく。口縁端部外面には沈線のある面をもつ。体部内面はナデ、外面はハケメののちナデを施す。口縁部はヨコナデする。口径は30.2cmである。

119は須恵器杯B。底部～高台の小片が出土した。高台は華奢なつくりで、貼り付け位置は立ち上がり部よりも内側に貼り付ける。高台径は14.0cmを測る。120は皿A。ほぼ完形で出土した。やや上げ底気味の底部から垂直に立ち上がる口縁部がつく。底部は外面をヘラ切りし、内面をナデする。口径16.8cm、器高3.2cm。

これら南北溝SD9577出土土器は、丸みのある底部の外面をヘラケズリする大型の土師器杯Hや、口縁端部外面に凹面のある壺A、底部から垂直に立ち上がる口縁部

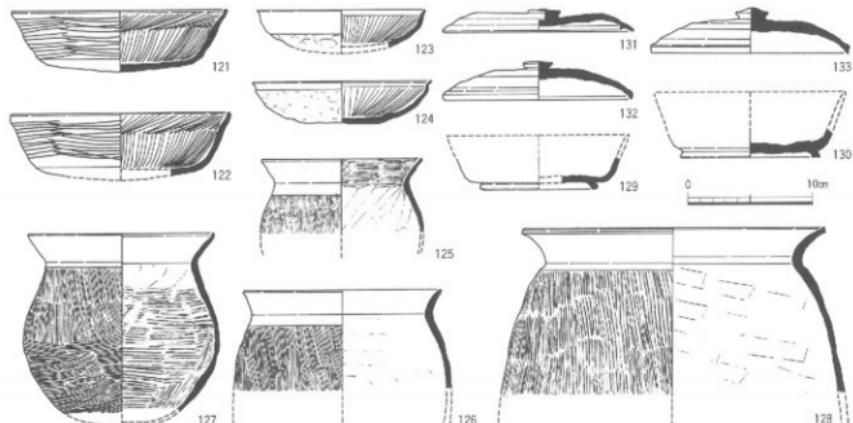


Fig. 45 土坑SK9660出土土器 1:4

をもつ須恵器皿Aに特徴がある。時期判定のできる資料に乏しいものの飛鳥V（藤原宮期）とすることができる。土坑SK9660出土土器（Fig.45） 高所寺池の北西部で検出した土坑SK9660からは、比較的まとまった量の土器が出土した。土師器には杯A、杯C、壺A、壺C、須恵器には杯B、杯B蓋、平瓶、壺がある。

121、122は土師器杯AIである。ともに、やや丸みのある底部に、直線的に外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は、121が内側へ軽く巻き込むのに対し、122は丸く納める。外面は底部をナデ、口縁部をヨコナデのちミガキを施す。口縁部内面はヨコナデののち、二段放射暗文を施す。121の法量は口径17.4cm、器高5.1cmで、122は口径17.6cmである。123、124は杯CIで、123は底部の一部を欠く。底部内面をナデ、口縁部内外面はヨコナデを施す。内面には一段放射暗文を施す。口径は13.6cmである。124は口縁端部が外反する。内面全体をヨコナデし、体部外面は不調整。口縁端部を強くヨコナデし内面に一段放射暗文を施す。口径14.4cm、器高3.5cmを測る。125～127は壺Aである。体部内面をヘラケズリする「河内型」（125）、ナデる「大和型」（126）、ハケメを施す「近江型」（127）の三者がある。125、126は体部下半を、127は底部を欠く。口径は13.0～16.0cmを測る。128は大和型の壺C。体部下半を欠失する。口縁端部外面には面をもつ。口径は24.4cm。

129、130は須恵器杯B。ともに造存状態が悪く、口縁部以下が残存するのみである。高台の貼付位置は、129

が底部の立ち上がり位置よりも内側に、130が立ち上がり部分直下にある。杯部は底部外面をヘラ切りする。高台径は129が8.6cm、130が11.2cm。131～133は杯B蓋。131以外はかえりをもたず、丸みのある頂部につまみがつく。つまみの形態は、131、133がやや高く、132は扁平なものである。頂部内面をナデ、外面をロクロケズリを施す。口径15.4～16.0cm、器高2.0～3.8cmを測る。

これらSK9660出土土器については、土師器杯AIの器高が浅くなり、丸みのある頂部にかえりのない口縁部がつく須恵器杯B蓋、高台貼付位置が底部の立ち上がり部分よりも内側にある杯Bの存在に特徴があるといえる。したがって、これらSK9660出土土器の主体は、飛鳥V（藤原宮期）にその年代を求めるべきである。

C 藤原宮外の古代遺構出土土器 (Fig.46～49)

宮外での古代遺構の検出数はごく僅かで、まとまった量の土器が出土したのは五角形井戸SE9330である。五角形井戸SE9330出土土器（Fig.46） 高所寺池の東南部に位置する五角形井戸SE9330出土土器には、土師器杯A、皿A、壺A、長胴壺、鍋B、須恵器杯B、台付長頸壺、平瓶、壺などがある。

134は土師器杯A。口縁部のみが出土した。口縁端部は内側へ軽く巻き込む。調整は内外面ヨコナデの後、内面には一段放射暗文を、外面にはミガキを施す。口径15.0cm。135は皿A。底部は欠失している。口縁部内外面をヨコナデ後、内面には一段放射暗文を施す、外面はa1手法で仕上げる。口径16.4cm。136～139は壺A。136

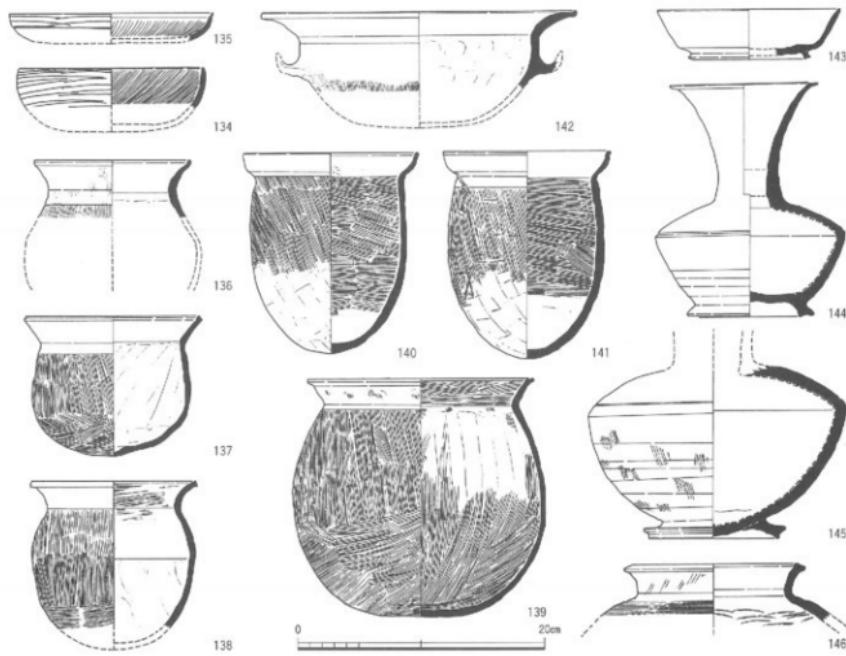


Fig. 46 五角形井戸SE9330出土土器 1:4

は胴部以下を欠失する。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面全体をナデ、外面全体にタテハケを施した後、口縁端部をヨコナデする。137は丸みのある体部に、直線的に外方へ伸びる口縁部が付く。口縁端部内面には凹面をもつ。体部は内面をヘラケズリ、外面をタテハケのちヨコハケを施す。河内型の資料である。138はやや胴の長い体部に、外反する口縁部が付く。口縁端部外面には面をもつ。外面は体部全体にタテハケを施し、底部にヨコハケを施して仕上げる。内面は上半にヨコナデを施し、後に口縁部をヨコハケする。体部内面をナデすることより大和型と判断できる。139は、球形の体部に、外方へ直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部内面には段をもつ。型取り成形後、外面は全体にタテハケを施した後、体部下半をヨコハケする。内面は体部全体にハケメを施した後、上半にヘラケズリを施す。口縁部内面にヨコハケ、外面にヨコナデを施す伊勢型の資料。甕Aの法量は口径12.6~18.4cm、器高11.6~19.6cm。140・141は長胴甕。141の体部には、竈目が植物遺

存体として付着している(PL.36)ことから、井戸の釣瓶として用いられたと推測される。内面調整は底部をナデ、体部より上にはヨコハケを施す。外面は上半にハケメを施した後、下半をヘラケズリする。体部内面に見られるヨコハケより近江型と判断できる。140の法量は口径14.2cm、器高16.4cmで、141は口径13.4cm、器高17.0cmを測る。142は鍋B。把手先端と体部下半を欠く。やや扁平な体部に、大きく外反する口縁部がつく。体部外面上半をナデ、下半にハケメを施す。内面は体部にオサエを施す。口縁部はヨコナデする。口径は27.6cm。

143は須恵器杯B。ほぼ完形に復元できる。口縁部は直線的に外方へ伸びる。高台は立ち上がりよりや内側に、外方へ踏ん張るように付く。口径14.8cm、高台径8.8cm、器高4.0cm。144、145は台付長頸甕。144は完形に復元できる。肩の張った体部に大きく外方へ開く口縁部が付く。体部下半はロクロケズリ、肩部に一条の沈線を施した後、ヘラ切りする。口径12.0cm、高台径8.0cm、器高19.0cm。145は口縁部を欠く。やや丸みのある体部

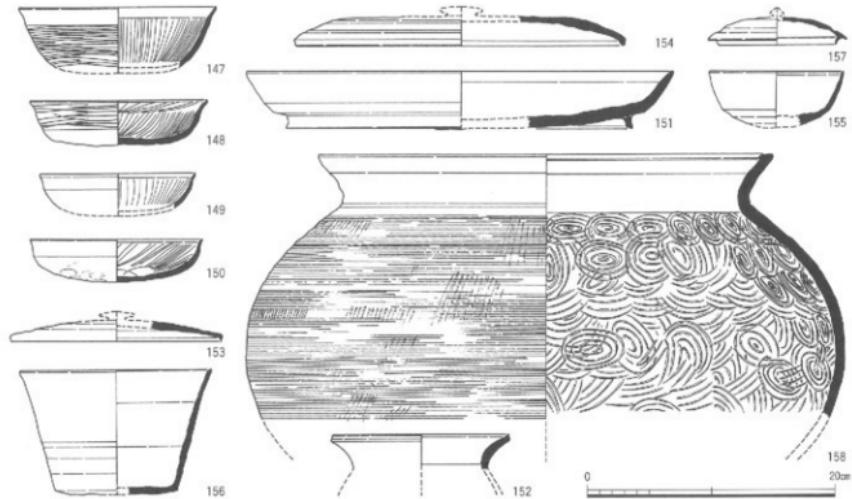


Fig. 47 東西砂溝SD9560・南北砂溝SD9561出土土器 1:4

に、大きくハの字に広がる高台が付く。高台端部外面は面を持つ。肩部のやや上方に一条の沈線、肩部以下にロクロケズリを施す。146は壺A。体部の大部分を欠失する。口縁端部は面を持つ。内面に同心円当具を添え、外面上に平行タタキを施したのち、体部外面にカキメを施す。口縁部をヨコナデして仕上げる。口径は15.2cm。

これら五角形井戸SE9330出土土器は、内弯する口縁部を持つ土師器杯Aや口縁端部を丸くおさめる皿A、安定した高台が立ち上がり部分よりも内側に付く須恵器杯B、肩部にやや丸みのある台付長頸壺の存在に大きな特徴がある。したがって、これらの土器群については、飛鳥IV～V、すなわち7世紀末～8世紀初頭にその年代が求められよう。

東西・南北砂溝SD9560・9561出土土器 (Fig.47)

高所寺池の東部に位置する東西・南北砂溝SD9560・SD9561出土土器には、土師器杯A、杯B、杯C、壺A、須恵器杯B蓋、杯G、皿B蓋、椀A、短頸壺蓋、中型壺がある。

147、148は土師器杯A。147は底部を欠失する。口縁端部は丸くおさめる。内面には一段放射暗文、外面上には密なミガキを施す。口縁端部はヨコナデする。口径は15.0cm。148はやや丸みのある底部にやや外方へ広がる口縁部がつく。口縁端部は軽く内側へ折る。底部外面には木の葉の圧痕が残る。口縁部内面には二段放射暗文、

外面にはミガキを施す。口径14.6cm、器高3.8cmを測る。149、150は杯C。149は口縁部のみの出土である。口縁部をヨコナデしたのち、内面に一段放射暗文を施す。口径は12.6cmである。150は完形に復元できる。底部外面は不調整で、内面全体と口縁部外面にはヨコナデを施す。内面には粗雑な一段放射暗文と螺旋暗文を施す。口径14.0cm、器高3.5cmを測る。151はロクロ製土師器皿B。丸みのある底部に外方へ広がる口縁部がつく。底部外面をロクロケズリした後、高台を貼り付ける。152は壺A。口縁部のみの出土である。口縁端部外面には面をもつ。口径は14.2cmを測る。

153は須恵器杯B蓋。つまみを欠失する。口径は17.2cm。154は皿B蓋で、口径は26.6cmである。155は杯G。底部中央を欠く。底部は丸みがある。ロクロ成形後、底部外面をロクロケズリする。口径は11.0cmを測る。156は椀A。底部中央を僅かに欠く。体部外面下半から底部外面にはロクロケズリを施す。口径は19.6cmを測る。157は短頸壺蓋。つまみを欠く。丸みのある頂部に受部より突出するかえりをもつ。口径は9.6cm。158は中型壺。体部下半を欠失する。口縁端部上面には内折する面をもつ。体部外面は平行タタキのちカキメを施す。内面には同心円当具痕が残る。口径は36.6cm。

東西・南北の砂溝SD9560・SD9561出土土器には、器高が高く、口縁端部を丸くおさめる土師器杯が古い様相

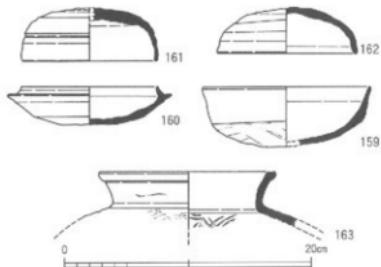


Fig. 48 斜行溝SD9722・9724出土土器 1:4

を示す一方で、器高が低く、口縁端部を内側へ軽く折った土師器杯Aや、口縁端部外面に面をもつ壺A、かえりのない口縁部をもつ須恵器杯B蓋のように新しい様相をもつ資料も一定量出土している。これらの土器は、形態的特徴から飛鳥IV～V（7世紀末～8世紀初頭）に比定できよう。

斜行溝SD9722・SD9724出土土器（Fig.48） 高所寺池の西南部で検出した、並行する二条の斜行溝SD9722・SD9724では、少量ながら時期的にはまとまった土器が出土した。土師器には杯H、須恵器には杯H、横瓶、壺などがある。出土遺物の大半は須恵器である。

159は土師器杯H。ほぼ完形で出土した。丸みのある底部に直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口径13.7cm。

160は須恵器杯H。やや平坦な底部に、受部よりも突出する口縁部がつく。底部外面をヘラ切りする。口径は11.0cm、器高3.2cmを測る。161、162は杯H蓋。161はやや丸みのある頂部に、垂下する口縁部がつく。肩部には一条の沈線が巡る。頂部外面の三分の一程度にロクロケズリを施す。明灰色で雲母を多量に含む胎土であり、東海地方以東に產地を求めるよう。162は丸みのある頂部にやや内弯する口縁部がつく。頂部外面は三分の一程度をロクロケズリする。161は口径11.2cm、器高3.6cm、162は口径10.8cmを測る。163は壺A。口縁部から体部上位にかけての破片が出土した。口縁端部外面には面をもつ。体部は内面に同心円当具を添え、外面を格子目の叩

き板で叩く。のち、口縁部をロクロナデする。口径は14.4cmを測る。

これら斜行溝SD9722・SD9724出土土器は、器高が高く、丁寧にヘラケズリを施す土師器杯H、頂部の三分の一程度をロクロケズリし、口径11cm程度の須恵器杯H蓋の存在などから、これらの土器は飛鳥I（7世紀前半）に比定できる。

大土坑SK9731出土土器（Fig.49） 高所寺池の西部で検出した大土坑SK9731からは、多量の土師器が出土した。出土土器には土師器杯B蓋、杯C、杯H、壺Aがある。須恵器は僅少ではほとんどが小片である。

164は土師器杯B蓋。口縁部を欠失する。平坦な頂部に平坦なつまみがつく。頂部内面をナデ、のち内面に放射暗文と螺旋暗文、外面にミガキを施す。つまみは貼付後、ヨコナデする。165は杯C II。底部の三分の一程度を欠失する。口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁端部内面には面をもつ。底部外面は不調整、口縁部はヨコナデし、口縁部内面には一段放射暗文と連弧暗文を施す。口径は15.8cmである。166、167は杯H。浅手の資料で、やや平坦な底部に直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。166は口径14.0cm、167は口径10.8cm、器高3.6cmである。168は壺A。168は完形での出土である。球形の体部に、外方へ聞く口縁部がつく。内外面全体にハケメを施したのち、口縁部外面にヨコナデを施す。体部内面にナデを施すことから「大和型」の資料であると判断できる。169は体部中位以下を欠失する。体部内面をヘラケズリ、外面にハケメを施す「河内型」の資料である。口縁部はヨコナデする。168は口径12.3cm、器高12.6cm、169は口径19.2cm。

これら大土坑SK9731出土土器は、165のような器高の高い杯C IIを含むものの、器高の低い杯Hや口縁端部外面に面をもたない壺Aなどによって構成されているため、飛鳥IVすなわち7世紀末にその年代が求められる。

D 古墳時代遺構出土土器（Fig.50～54）

古墳時代の遺構は、主に高所寺池の東南部で検出した。特に、古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871では、遺構の

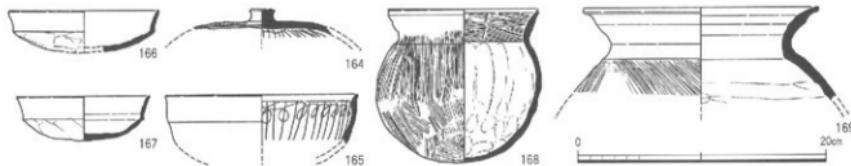


Fig. 49 大土坑SK9731出土土器 1:4

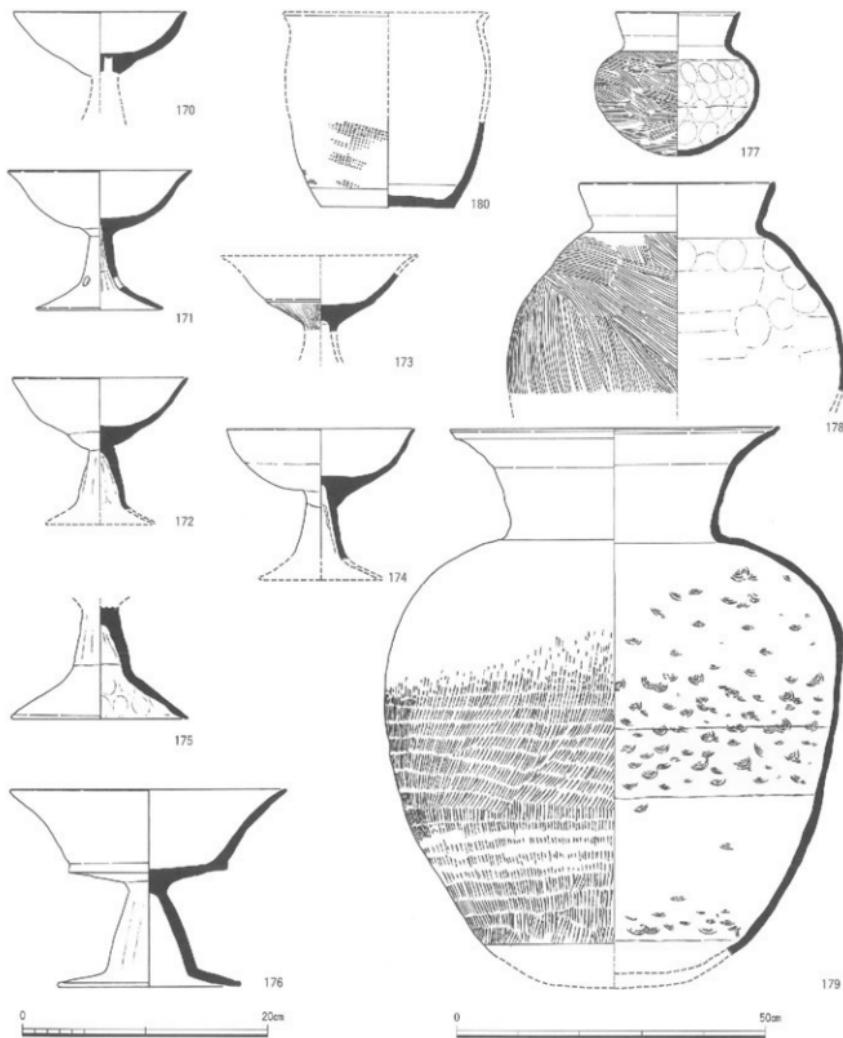


Fig. 50 素掘井戸SE9570出土土器 1:4 (179のみ 1:8)

遺存状態の悪さにもかかわらず、比較的まとまった量の土器が出土した。高所寺池の北西部では古墳時代遺構は検出されなかった。

素掘井戸SE9570出土土器 (Fig.50) 素掘井戸SE9570

は、高所寺池の東部に位置する。土師器高杯、小型丸底壺、甕、須恵器大甕、韓式系土器平底鉢が出土した。

170~176は土師器高杯。そのうち170~174の杯部は椀形を呈する。口縁端部は、緩やかに外反するもの (171)

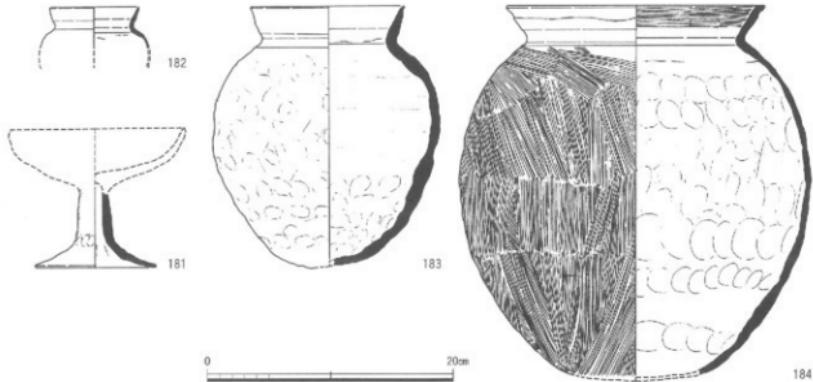


Fig. 51 溝SD9350出土土器 1:4

と直線的に伸びるもの(170、172、174)がある。いずれも杯部底部内外面にはナデを施すが、173の底部外面のみナデの後にハケメを施す。口縁部はヨコナデで仕上げる。脚部は概して遺存状態が悪く、端部まで観察できるのは171のみである。絞り込み成形後、柱状部をナデするもの(171、174)と、ケズリを施すもの(172)がある。171の裾部はヨコナデする。口径は14.2~15.3cmで、171の器高は11.3cm、裾部径は10.4cmを測る。175、176は大型高杯。175は脚部のみ、176は完全で出土した。杯部は平坦な底部に、直線的に伸びる口縁部がつく。底部内外面にはナデ、口縁部にはヨコナデを施す。脚部はいずれも絞り込み成形をおこなう。のち、175は裾部外面をヨコナデし、裾部内面には指頭圧痕が残る。176は脚部内面全体にケズリを施し、裾部外面をナデで仕上げる。

法量は、175の裾部径が14.5cmで、176は口径22.8cm、裾部径15.1cm、器高16.2cmを測る。なお、調整の簡略化と立ち上がり気味な裾部をもつ点などから、175が176よりも新しい様相を示しているといえる。177は小型丸底壺。丸みのある体部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく形態である。口縁端部内面には面をもたせる。体部は、内面にユビオサエ、外面上にハケメを施す。また、体部内面では粘土接合痕が確認できる。口縁部内外面はヨコナデによって仕上げる。口径10.2cm、器高11.9cmを測る。178は壺。体部下位を欠失している。肩は張らず、体部最大径は中位に求められる。口縁部は直線的に伸びる。体部は内面にユビオサエのちケズリを、外面上にはハケメを施す。のち口縁部内外面はヨコナデして仕上げるが、その際、体部と口縁部の境を強くヨコナデしてい

る。口径は16.0cm。179は須恵器大壺。肩の張った、やや胴長な体部に、緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁端部外面には面をもたせる。体部は、内面に同心円当具をあてがって叩く。のち、内面は丁寧にスリケシ、外面上も半スリケシをおこなう。口縁部は内外面ともにロクロナデを施す。この壺は一括資料でありながら、底部片が全く出土しなかった。故意に打ち欠いてから廃棄したものと思われる。また、体部中位以下には灰色と淡灰色の、二種の粘土を交互に使用している点で特異である。180は韓式系土器の平底鉢である。底部~体部中位にかけての破片が出土した。体部はやや内弯気味に上方へと伸びる。体部内面をナデ、内面は全面をナデするが、底部からの立ち上がり部分は強くヨコナデする。体部外面には、格子目タタキが残る。底部外面には、一辺2.5cm四方の回転台ゲタ痕が僅かに残る。底部径は10.8cm。

素掘井戸SE9570出土土器は、176のような、布留式直後に位置づけられる大型高杯を含みながら、大半は椀形の杯部をもった高杯や複合口縁とハケメの崩れた上部器壺などで構成されている。これらの特徴より、本遺構の主体となる土器群は、5世紀後半頃にその年代が求められるが、上ノ井手遺跡SE030や山田道第二次調査SE2570出土土器よりは、やや新しい様相を示しているといえよう。

溝SD9350出土土器(Fig.51) 溝SD9350は、素掘井戸SE9570の南方約100mに位置する。出土土器には、土師器高杯や小型丸底壺、壺がある。須恵器には杯皿蓋や器台、壺があるが、出土量はごく僅かで、細片のみである。このほか、韓式系土器の細片も出土した。

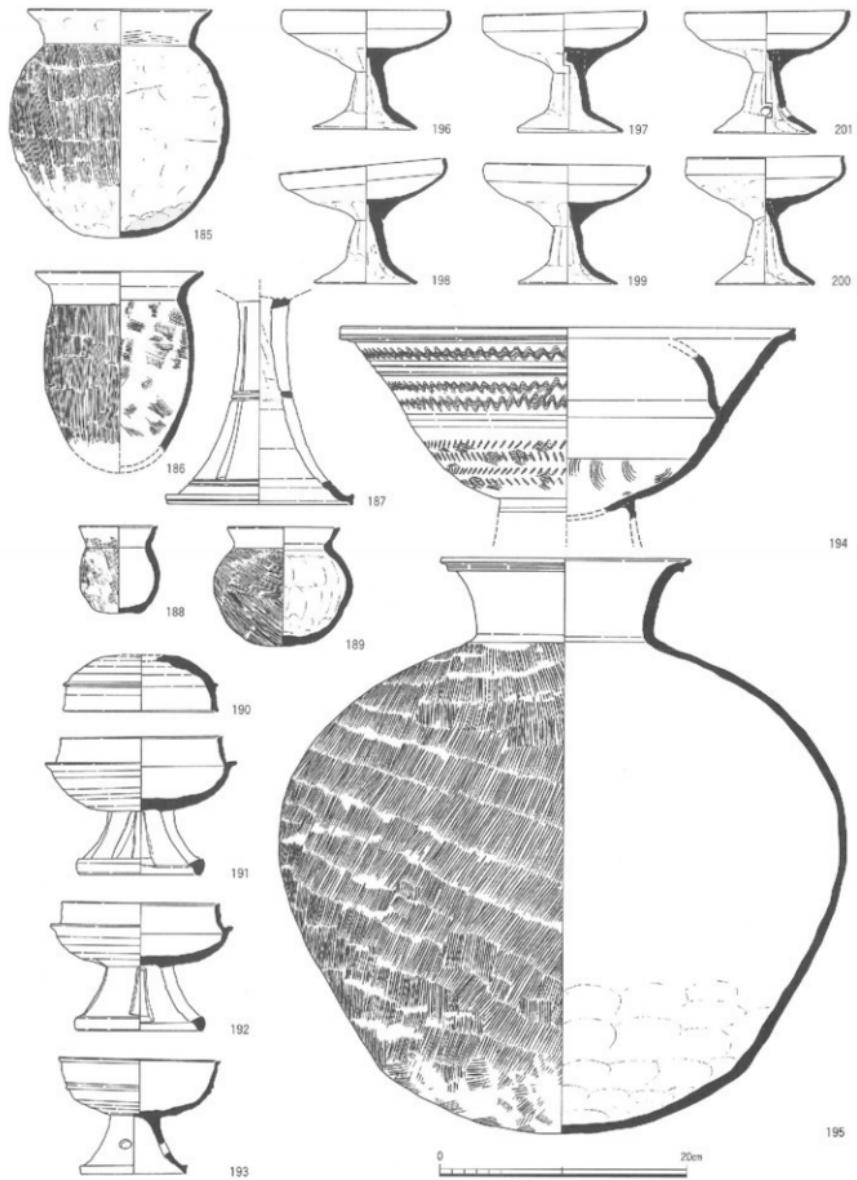


Fig. 52 古墳周漢SD9850·9870·9871出土土器 1:4

181は土師器高杯。脚部は直線的に伸びる柱状部に、ハの字に開く裾部がつく。絞り込み成形後、柱状部の外面をナデ、のち裾部内外面をヨコナデする。裾部内面上半にはケズリの痕跡が認められる。裾部径は9.8cmである。182は小型丸底壺。口縁部から体部上位までの破片が出土した。摩滅が激しく調整の詳細は不明。口径は7.2cmである。183、184は甕。183はほぼ完形、184は二分の一ほどが残存する。183は胴長な体部にやや外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面下半をユビオサエ、上半をヨコナデする。外面はユビオサエの後、ナデを施す。口縁部内外面はヨコナデして仕上げる。口径は12.4cmを測る。184は丸みのある体部に、外方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部には平坦面がある。体部は内面にユビオサエ、外面にハケメを施す。口縁部内面にヨコハケ、外面にはヨコナデを施す。口径は21.0cmを測る。

溝SD9350出土の上師器は、崩れた複合口縁をもち、またハケメも崩れていることから、布留式直後なわち5世紀後半代にその年代を求められよう。高杯は井戸SE9570出土資料と類似しており、ほぼ同時期の所産であると考えられる。

古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871出土土器 (Fig.52)
131次調査で検出した三つの古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871では、遺構の遺存状態の悪さにもかかわらず、比較的多くの土器が出土した。

SD9850出土土器には、上師器甕 (185、186) と須恵器高杯 (187) がある。185は丸みのある体部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部はやや外方へ折り曲げる。体部内面はナデとユビオサエ、外面はハケメを施す。底部外面はやや摩滅している。体部内面には粘土紐の接合痕が残る。また、底部内面には酸化鉄（ベンガラ）の小塊が付着している。葬送儀礼に用いたベンガラの貯蔵具であると思われる。法量は口径15.0cm、器高18.8cmである。186は底部を欠失している。胴長な体部にやや外方へ開く口縁部がつく形態。体部内面にヨコハケ、外面にタテハケを施したのち、口縁部をヨコナデして仕上げる。口径は13.6cmを測る。187は須恵器高杯。肩部のみの出土である。中位と下位、および抱部の端部外面に沈線を施し、のちに中位の二条の沈線を挟むように三方向から二段、合計六ヶ所に長方形スカシを設ける。内面には粘土の絞り込み痕が残る。裾部径は15.0cmを測る。

SD9850の西方に位置するSD9870の出土土器には、土師器小型甕、須恵器杯豆蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、

台付壺がある (188~195)。188、189は小型甕で、ともに完形で出土した。188はやや丸みのある体部で、外面は一次焼成時に黒斑が付着している。口縁部は上方へ伸びる形態で、窓部内面には面をもたせる。189は球形に近い形を呈する体部に、やや外方へ伸びる口縁部がつく。188、189ともに内面にナデ、外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデして仕上げる。法量は188が口径6.7cm、器高7.2cm、189は口径8.8cm、器高9.3cmを測る。190は須恵器杯豆蓋。丸みのある頂部にまっすぐ降りる口縁部がつく。口縁端部内面には鈍い段が、肩部には鈍い棱がみとめられる。頂部の内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケズリする。ロクロの回転方向は時計回り。口径は12.0cm。191~193は須恵器高杯である。そのうちの191、192は有蓋高杯。191は口縁部の三分の一を欠失している。192は完形で出土した。191、192ともに丸みのある杯部に、直線的に伸びる口縁部がつく。口縁端部は段をもつ。受部は短く、外方へ直線的に開く。脚部は端部外面に丸みのある面をもつ。四方向から工具で切り込みを入れて、方形スカシを設ける。193は無蓋高杯。杯部は、丸みのある底部に、緩やかに外方へ開く口縁部がつく。底部と口縁部の境には鈍い棱がある。底部の内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケズリする。脚部の形態は、裾部の端部外面に面をもたせるもので、三方向から円形スカシを穿つ。陶邑古窯址群梅地区で生産されたものである。これらの高杯の法量は口径12.9~13.2cm、裾部径8.6~10.0cm、器高9.6~11.4cmである。194は装飾付須恵器の台付壺。台部から壺部中位にかけての破片が出土した。台部はやや器高が低く、底部から緩やかに伸びる口縁部がつく。口縁端部外面には面をもたせる。壺部は台部中位に取り付ける。緩やかに内傾しながら上方へ伸びていることから、器台受部についていた器種としては壺などが想定されよう。器台部分は受部外面を当具で叩いた後、全体をロクロナデする。内面には当具痕が残る。文様は口縁部から波状文、二条の稜線、二段の波状文、二条の稜線、羽状文の順に観察されるが、施文の順番は（後縁→波状文ないし羽状文）である。二段の波状文は、上段から下段までを連続して施文する。口径は37.0cmを測る。なお、SD9850付近の遺物包含層からは装飾付須恵器の一部と思われる、須恵質の鳥形土製品が出土している。195は中型甕である。丸みのある体部は、最大径を中位に求められる。口縁部は緩やかに外方へ開く。口縁端部外面には面があり、その直下には下方へ伸びる棱が巡る。体部は内面に同心円当具をあてがい、外

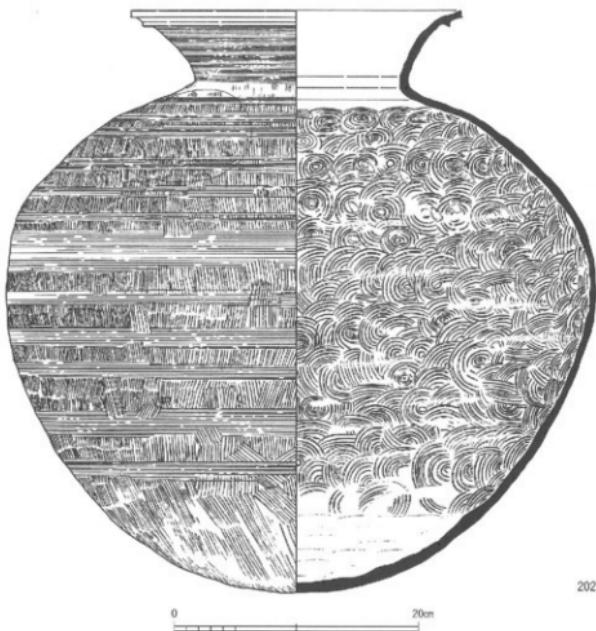


Fig. 53 南北溝SD9334出土土器 1:4

202

面に平行タタキを施す。のち、内面は丁寧にスリ消しているが、底部付近には当具の痕跡が残る。口頭部は内外面とともにロクロナデで仕上げる。口径20.0cm、器高47.0cmを測る。

SD9870の北に位置するSD9871の出土土器は、土師器高杯のみである(196~201)。杯部はいずれも楕形で、緩やかに立ち上がる底部に、上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部はやや内側へ傾く。脚部は、下方に向かって緩やかに開く柱状部に、ハの字に広がる裾部がつく。柱状部は外面を工具で削る。内面には絞り込み痕が残る。裾部は内面をオサエ、外面をヨコナデする。裾部の端部外面には、面取りするもの(197、200、201)と、しないもの(196、198、199)がある。また、201は脚部に一方向から円形スカシを穿つ。このような形態の土師器高杯は、葛城地域でもみられる。法量は、口径12.8~13.3cm、裾部径8.0~8.4cm、器高9.8~12.0cm。

これら三基の古墳に伴う周濠から出土した土器の大半は、楕形を呈する杯部に、柱状部から緩やかに開く裾部をそなえた土師器高杯、複合口縁をもたない壺、頂部な

いし底部の二分の一程度をロクロケズリする須恵器杯Hと高杯、頸部外面の文様をもたない須恵器中型壺に特徴がある。したがってこれらの土器群の主体は陶邑編年TK23~47型式、すなわち5世紀末にその年代が求められる。ただし、SD9850とSD9870出土の土師器壺を比較すると、前者は口縁端部に面をもたないため、SD9870よりもやや新しい様相を呈しているといえよう。また、SD9850出土の長脚二段の須恵器高杯脚部とSD9870出土の台付壺は、それぞれ陶邑編年TK43型式に比定できるものであり、周濠埋没時に混入したものと考える。

南北溝SD9334出土土器 (Fig.53) 高所寺池の南部で検出した南北溝SD9334からは、少量の土師器細片と須恵器中型壺が出土した(202)。この須恵器中型壺は、ほぼ完形で、体部外面中位まで薄く降灰している。体部上位には、円形の非降灰部分が確認できる。これは、窯詰めの際、体部上位に乗せた杯類の口縁部の痕跡である。体部は当具で内外面を上位から下位に向かって叩く。底部内面は、無文の当具でおさえたあと、ナデおよび半スリケシをおこなう。また、体部内面上位には、小さな梢円

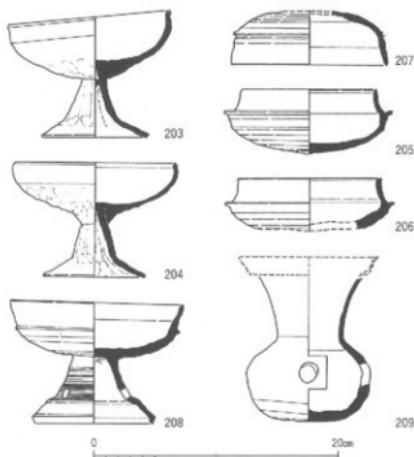


Fig. 54 南北溝SD9581出土土器 1:4

形の痕みが確認できる。これは、体部外面はタタキの後、部分的にカキメを施す際、体部内面上位に添えた指の痕跡と考えられる。口縁部は内面にロクロナデ、外面にカキメを施す。口縁端部外面には、下方に少し伸びる稜と面がある。口径27.0cm、器高47.5cmを測る。この甕の特徴は、口縁部外面と体部外面の一部にカキメを施すこと、

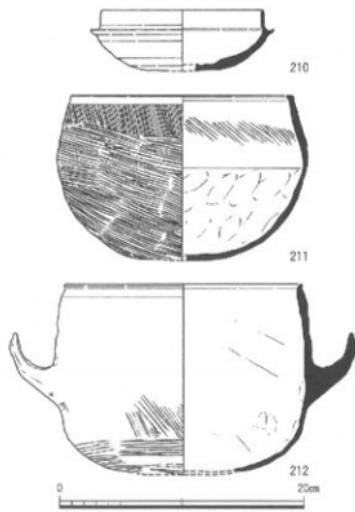


Fig. 55 その他の造構出土土器 1:4

体部内面に当具痕の半スリケシがみとめられることにある。したがって、本資料は陶邑編年TK47、すなわち6世紀初頭に比定できよう。

南北溝SD9581出土土器 (Fig.54) 南北溝SD9581は、高所寺池の北辺に位置する。遺構面を検出したのみであるが、比較的まとまった量の土器が出土した。土器には高杯が、須恵器には杯Hと甕がある。

土器高杯 (203、204) の脚部は、いずれも絞り込み成形後、裾部をヨコナデし、端部を面取りする。杯部は椀形を呈する。口縁端部は、203が僅かに外反するのに対し、204は内弯する。調整は両者とも底部内外面をナデ、口縁部にヨコナデを施す。203は、厚みのある杯部底部に脚部を差し込み、粘土を補充して接合する。204は、杯部と脚部の境に粘土紐を巻き付け、ナデを施して接合する。法量は203が口径13.2cm、裾部径8.4cm、器高10.5cm、204は口径13.0cm、裾部径8.2cm、器高9.5cmである。205、206は須恵器杯H。205は丸みのある底部をもつ。206は底部の二分の一を欠失する。ともに口縁端部には形骸化した段が認められる。底部の四分の三程度にロクロケズリを施す。法量は205が口径11.0cm、器高5.35cm、206は口径11.6cmを測る。207は須恵器杯H蓋。肩部にやや鈍い稜をもつ。口縁端部は段をもたない。頂部の三分の二程度にロクロケズリを施す。口径は12.8cmを測る。208は無蓋高杯。杯部は底部外面をロクロケズリする。底部と口縁部の境には鈍い稜がある。脚部はカキメを施したのち、円形孔を穿つ。裾部は端部に面をもつ。法量は口径14.0cm、裾部径9.6cm、器高10.2cmを測る。甕(209)の体部は、やや扁平な底部をもつ。口頭基部は太く口縁部に向かって大きく外反する。口縁部は欠失している。波状文などの文様はみとめられない。底部にロクロケズリを施し、体部中位には円孔を穿つ。

このように、南北溝SD9581出土土器には口縁端部の段が消失した須恵器杯H蓋や、文様を施さない、口頭基部の太い須恵器甕に最大の特徴がある。したがって、その年代観は陶邑編年MT15すなわち6世紀前半に求められる。

E その他の遺構出土土器 (Fig.55)

斜行溝SD9582出土土器 (210) 斜行溝SD9582は、断割によって確認した遺構で、南北溝SD9581に隣接する。本遺構からは、須恵器杯H (210) が1点出土したのみである。本資料は、丸みのある底部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部には段をもたない。口径13.2cmを測る。形態的特徴や法量から、陶邑編年MT15

(6世紀前半代)に比定できる。

大土坑SK9634出土土器 (211) 高所寺池の排水路に相当する部分で検出した大土坑SK9634では、鉢A (211)が1点出土した。約三分の一が遺存する。内面をハケメのちユビオサエ、外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデする。口径は18.2cm。藤原宮西方官衙地区で検出した南北道路SF1082の西側溝SD1080出土資料に類例がある(『藤原報告Ⅱ』)が、今回出土した資料の方が器高が高く、やや大型である。飛鳥IVに比定できよう。

土坑SK9635出土土器 (212) 高所寺池の北西隅に位置する土坑SK9635出土土器には、甕X (212)がある。寸胴な体部で、中位に大きく開く把手がつく。口縁部と体部の境は不明瞭である。口縁端部は軽く外方へ開く。体部内面はナデを施す。体部外面は全体をナデたのち、底部付近に粗いハケメを施す。口径は19.4cm。把手の形態から、7世紀後半代に比定できよう。

F 中世造構出土土器 (Fig.56)

耕作溝を除く中世造構の多くは、高所寺池の南半分で検出した。特に、113・131次調査では多くの造構を検出し、良好な資料を得ることができた。一方、高所寺池の北辺や北西部では中世の造構は検出されず、包含層からの土器出土量もごく僅かである。

井戸SE9328出土土器 (213~227) 高所寺池の南部に位置する石組井戸SE9328からは、上師器小皿、皿、杯、瓦器碗が出土した。土師器皿類の出土量が多い。

213~217は土師器小皿、218~223は皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする簡素な作りである。223は焼成後、底部の二カ所に円孔を穿つ。法量は、小皿が口径8.6~9.1cm、器高1.2~1.6cm、皿は口径11.4~11.8cm、器高2.0~2.4cmを測る。224は杯。全体の二分の一程度が遺存する。平坦な底部から、大きく外方へ伸びる口縁部がつく。底部内面から口縁端部直下をヨコナデする。口径は10.8cm、器高は3.4cmを測る。225~227は瓦器碗。断面形態が三角形を呈する、華奢な高台をもつ。器高は225が高く、227がもっと低い。227は口縁端部内面の段が鈍い。型押し成形後、内面をナデ、口縁端部をヨコナデする。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残っており、225では指の関節の痕跡が確認できる。内面に施す圓線ミガキの密度は225が高く、227はきわめて低い。また、225のみ口縁端部にまばらにミガキを施しており、ミガキのない226、227よりも古い様相を呈している。口径は10.6~10.8cm、器高は3.5cm前後を測る。

石組井戸SE9345出土土器 (228~231) 石組井戸SE9345

は、高所寺池の東南部に位置する。土師器小皿、皿、瓦器碗などが出土した。

228~230は土師器小皿、皿。口縁部はやや外方へ開く。口縁部と底部の境には鈍い稜がある。型押し成形後、口縁部外面から底部内面までをヨコナデする。これらの法量は、小皿が口径8.4cm、器高1.5cm前後、皿は口径11.4cm、器高2.4cmを測る。231は瓦器碗。断面三角形の華奢な高台がつく。口縁端部内面の段は明瞭である。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする。口縁部外面にミガキ、内面全体に圓線ミガキを施す。ミガキの密度は低く、粗雑である。口径は10.8cmを測る。

井戸SE9883出土土器 (232~237) 井戸SE9883は、高所寺池の導水路の北に隣接する。出土土器には上師器小皿、皿、瓦器碗がある。瓦器碗の出土量が土師器よりもやや多い。

232~234は土師器小皿、皿。いずれも底部の大部分を欠失している。口縁部はいずれも外方へ開く。皿は底部と口縁部の境に鈍い稜がみとめられる。口径は232が9.6cm、233が11.4cm、234が14.0cmである。235~237は瓦器碗。断面三角形の華奢な高台をもつ。口縁部外面のミガキもみられず、端部内面の段も鈍い。型押し成形後、口縁部外面から底部内面までをヨコナデし、内面に粗雑で密度の低い圓線ミガキを施す。口径は11.0~11.4cm、器高は3.2~3.6cmである。

石組井戸SE9884出土土器 (238~244) 石組井戸SE9884は、井戸SE9883の約5m東に位置する。土師器皿、土釜、瓦器碗などが出土した。

238、239は土師器皿。口縁部は外方へ開き、端部付近では上方へ直線的に伸びる。型押し成形後、底部外面を軽く削る。口縁部と底部内面はヨコナデする。口径は238が12.0cm、239は12.4cm。240は土釜。鍔部以下を欠失する。鍔部は短く伸びる。口縁端部上面には面をもつ。体部外面をナデたのち、鍔部をヨコナデしながら貼り付ける。口縁部外面には工具の当たりが残る。口径は26.2cm。241~244は瓦器碗。断面形態が三角形を呈する華奢な高台がつく。口縁端部の段もきわめて鈍く、242や244にいたっては、段を消失している。型押し成形後、口縁部外面から内面全体をヨコナデする。口縁部外面は、まばらなミガキのあるもの(241、242)とないもの(243、244)の二者があり、後者には小型の製品(244)もある。内面の圓線ミガキも粗雑で、243はミガキの密度がもっとも低く、他の資料よりもやや新しい様相を示している。口径は18.0~13.2cm、器高は2.8~3.7cmを測る。

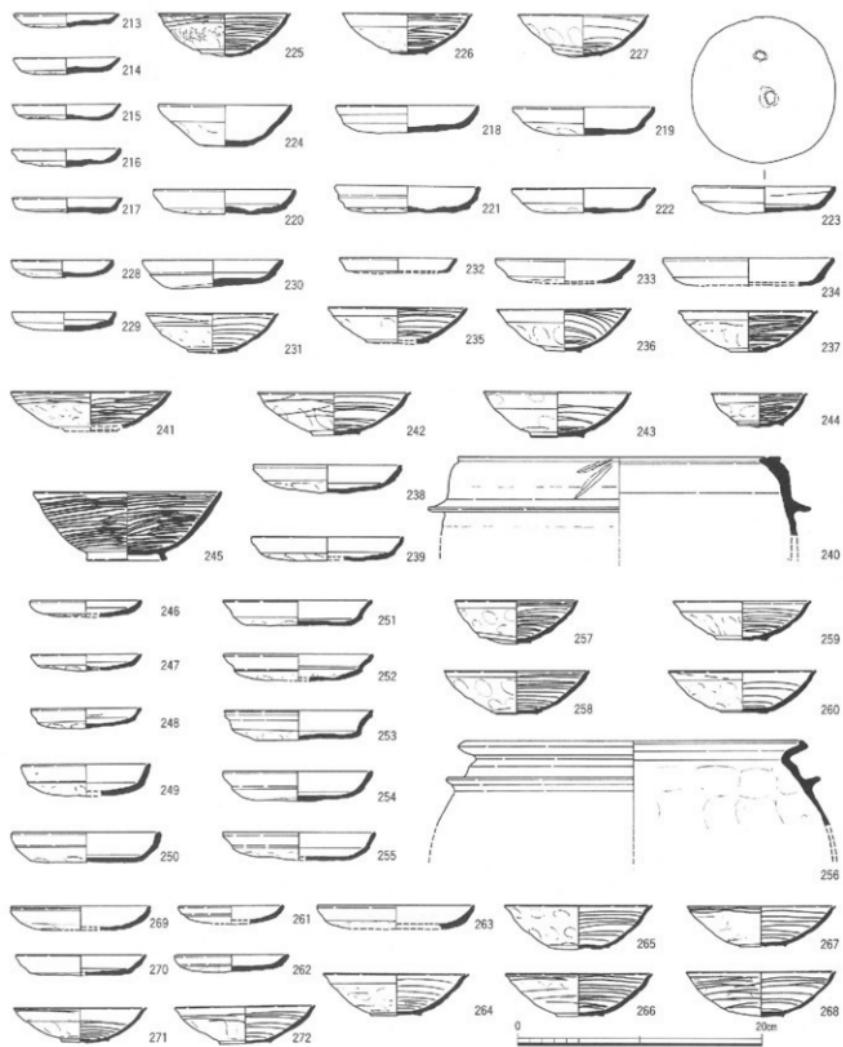


Fig. 56 中世の土器 1:4

井戸SE9885出土土器（245） 石組井戸SE9884の東北に位置する井戸SE9885では、土師器片や瓦器片、黒色土器碗が少量出土した。黒色土器碗（245）は、平坦な底部に、大きく外方へ開く口縁部と、垂下する高台がつ

く。口縁端部は丸くおさめる。碗は内外面をナデたのち、密なミガキを施す。高台は碗底部に貼付後、ヨコナデする。口径15.4cm、高台径6.2cm、器高5.6cmを測る。

東西溝SD9563出土土器（246～260） 東西溝SD9563は、

南面内濠SD502の北に位置する。出土した土器小皿、皿、土釜、瓦器椀の遺存状態は良好である。

246～255は小皿、皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする。小皿は口径9.0cm、器高は1.2～1.6cm、皿は口径12.0～12.4cm、器高2.0～2.4cmを測る。256は土釜。体部中位以下を欠失する。口縁部は大きく外反し、端部は内側へ折り曲げる。鈎部は短い。体部外面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、鈎部を貼り付ける。口径は27.8cm。257～260は瓦器椀。いずれも内面の園線ミガキは粗雑で、外面にはミガキを施さない。258、260の口縁部外面には粘土紐の接合痕が残る。口径は10.1～12.2cm、器高は3.2～3.6cmを測る。

土坑SK9326出土土器（261～268） 高所寺池の南端に位置する土坑SK9326では、多くの瓦器椀が出土した。土器の出土量は少ない。

261～263は土器小皿、皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする簡素な作りである。小皿は口径8.4～9.2cm、器高1.3cm前後、皿は口径12.8cmである。264～268は瓦器椀。丸みのある底部に、断面三角形の華奢な高台がつく。口縁部は大きく外方へ開き、端部内面には明瞭な段をもつ。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデし、内面には粗雑で密度の低い園線ミガキを施す。264、265の口縁部外面にはミガキを施さない。267は口縁端部附近に、266、268は外面全体にまばらなミガキを施す。口径は12.0cm前後、器高は3.5cm前後を測る。

土坑SK9327出土土器（269～272） 土坑SK9326の西側に隣接する土坑SK9327でも、SK9326とはほぼ同量・同内容の土器が出土した。

269、270は土器皿。底部を僅かに欠失する。口縁部は269が内湾気味に立ち上がるのに対し、270は外方へ直線的に開く。また、269の口縁端部外面には強いナデによってできた凹面がある。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする。底部外面は、269は軽く削るのに対し、270は不調整である。口径は269が11.4cm、270が10.7cmである。271、272は瓦器椀。SK9326と同様、丸みのある底部に、断面三角形の華奢な高台をもつ。口縁端部内面には明瞭な段をもつ。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデし、内面に粗雑で密度の低い園線ミガキを施す。口縁部外面にも同様のミガキを施す。口径は11.0cm前後、器高は3.0cm前後である。

以上が高所寺池の調査で検出した中世遺構出土土器の概要である。土器小皿、皿はいずれも型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする方法で作られて

おり、法量も小皿は口径8.4cm～9.2cm、器高1.2～1.6cm、皿は口径11.4cm～13.2cm、器高2.0～2.4cmにおさまる。瓦器の法量は、口径8.0cm～13.2cm、器高2.8～3.7cmを測り、口縁部外面や内面にみられるミガキも粗雑で密度が低い。なかには口縁部外面のミガキのないものすら存在している。これらの上器や瓦器椀は13世紀後半に比定できる。一方、井戸SE9885出土の黒色土器椀は、内外面を密に磨き、安定した高台をそなえる。よって、その年代は12世紀後半に求められる。

G 特殊土製品 (Fig.57～60)

本調査で出土した特殊土製品には韓式系土器、陶質土器、漆付着土器、ミニチュア土器、土鉢、土製円錠、製塩土器、平盤転用の甕瓶、陶棺などがある。なかでも韓式系土器、陶質土器の出土量が特に多い。それぞれの遺物の年代は、古墳時代から中世にわたっている。

陶質土器 (Fig.57・58) 陶質土器は、約50点出土した。高所寺池の東南部での出土量が特に多かったが、小片が多く、全形を復元できるものはない。器種が分かるものは壺、甕などがあり、293はほぼ全形を知ることができる資料である。なお、276～282および283・285～290は同一個体と思われる。

291～293は壺。291は体部下半を欠く。丸みのある体部に上方へ伸びる口頭部がつく。体部中位には一条の突線が巡る。外面には4条の波状文が巡る。口径は11.4cmである。292は体部上位の破片である。外面全体にカキメを施したのち、二条の沈線を施す。波状文は最後に施す。内面はナデ、およびユビオサエを施す。293は底部を欠失する。丸みのある体部にやや外方へ開く口縁部がつく。体部は内面にナデおよびユビオサエ、外面にはナデを施す。口縁部は二条の沈線と一条の凸線を施す。波状文は最後に施す。口径は9.0cmを測る。294は甕。口縁部のみの資料である。口縁端部は大きく外反し、端部外面には面をもつ。内面は全体にナデを施す。外面はナデを施したのち、ヨコナデによって体部と接合する。口縁端部は内外面をヨコナデする。口径は35.8cmを測る。

韓式系土器 (Fig.58・59) 韓式系土器片の出土点数は約40点である。出土地点は、陶質土器のそれとほぼ同様の傾向を示す。やはり小片が多い。器形が明らかなものとしては、コップ形土器、平底鉢、甕などがある。

295はコップ形土器。口縁部のみの出土である。口径は10.0cmである。296は平底鉢である。口縁端部と体部下半を欠失する。内面と口縁部外面はヨコナデする。297、298は甕。297は口縁部から体部上位にかけての資

料である。丸みのある肩部から外方へ開く口縁部がつく。口縁端部上面には平坦面がある。内面をナデ、外面を工具で叩いたのち、口縁部内外面をヨコナデする。口径は14.4cmである。298は底部の破片である。外面では、タタキの単位が明瞭である。内面にはオサエを施す。

その他の特殊遺物 (Fig.60) ミニチュア土器は4点出土した。310以外は土師器である。309は高杯脚部。裾部端部を欠失する。手捏ね成形後、柱状部内外面にナデを施す。310は須恵器壺L。口縁端部を欠失する。手捏ね成形後、体部内面を棒状工具で成形する。底部径は1.8cm。311は変。完形に復元できる。全体を手捏ね成形し

たのち、口縁部をヨコナデする。口径4.0cm、器高3.6cmを測る。312は中世の土釜。底部を欠失する。半球形の体部に短く伸びる鰐部がつく。鰐部端部は丸くおさめる。口縁端部は内傾する面をもつ。外面には粘土紐の接合痕が残る。体部内外面をナデたのち、鰐部を貼り付ける。口径は4.6cmである。

313～316は土製円盤。出土点数は4点で、専用品と転用品がある。313は須恵器壺の転用品。重量は4.86g。314～316は土師器の専用品。315以外はほぼ完形で出土した。314には線刻がある。重量は314が23.14g、315が7.96g、316が50.5gである。

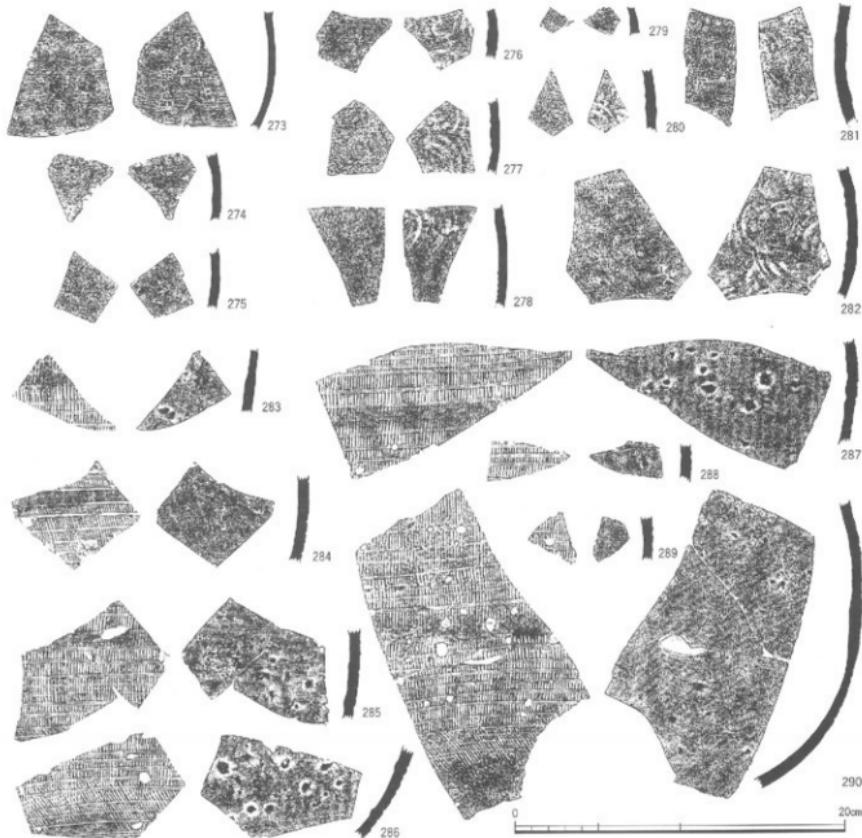


Fig. 57 陶質土器 1:3

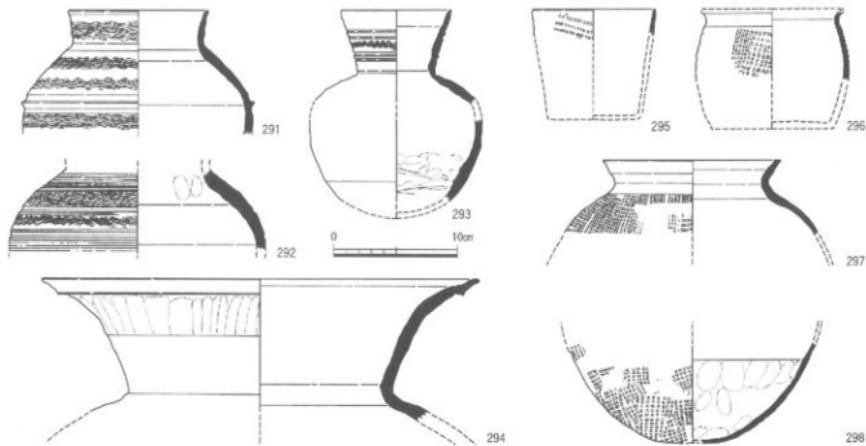


Fig. 58 陶質土器・韓式系土器 1:4

製塙土器は、個体数にして15点程度が出土した。古墳時代の製塙土器には小型丸底のものがある。古墳周濠SD9871の溝底からも出土したが、細片ばかりで図化できない。317は奈良・平安時代の製塙土器で口縁部のみの出土である。口径は復元できない。外面には粘土紐の接合痕が残る。内外面にはナデを施す。

土鍤は2点出土した。大小二種あり、棒に粘土を巻き付けて成形する。318の外面には粘土の接合痕が残る。長軸の長さは4.0cm、重量は3.40gである。319は中位が張る形態である。長軸の長さは6.3cm、重量は120.95g。

漆付着土器は約120点出土した(320~338)。調査区全体から出土したが、高所寺池の北西部での出土数が特に

多い。しかし、遺構に伴うものはごく僅かである。出土量は運搬具よりもパレットの方がが多い。パレットには土師器杯B、杯CⅡ、杯G、杯H、壺A、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、杯H、皿A、椀A、壺などがある。運搬具には須恵器壺、壺があり、壺の方が多く出土した。

320は土師器杯CⅡ。ほぼ完形に復元できる。底部外面をユビオサエし、底部内面から口縁部をヨコナデする。漆膜は内面全体に付着している。口径は15.0cmを測る。321は杯B。口縁部と底部の大半を欠く。漆膜は内面に薄く付着している。高台形は11.6cmを測る。322は杯G。底部の一部を欠く。漆はほとんどがはがれ落ちている。口径は11.0cmである。323は杯H。底部の大半を欠失する。漆膜は内面全体から口縁部外面に付着する。口径は14.4cm。324は壺A。把手の先端と口縁部を欠失する。体部の斜め半分を打ち欠き、体部を傾けてパレットとして使用したものと思われる。内面には漆を掻き取った痕跡が残る。漆膜は薄い。外面には漆が付着した痕跡は認められない。高台径は11.7cmである。325は須恵器杯A。底部を一部欠失する。やや丸みのある底部にやや外方へ伸びる口縁部がつく。漆膜は口縁部内外面に付着している。口径は15.0cmである。326は杯B蓋で、つまみを欠く。やや扁平な頂部に小さなかえりをそなえた口縁部がつく。漆膜はかえりにのみ遺存する。口径は12.0cmを測る。327、328は杯G。327は軟質で底部を一部欠失する。口縁部外面から内面全体に薄い漆膜が付着する。328は底部内面中央にやや厚みのある漆膜が遺存する。327は

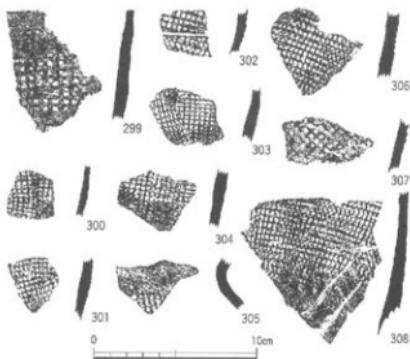


Fig. 59 韓式系土器 1:3

口径11.0cm、328は口径10.4cm、器高3.9cmを測る。329は杯H。やや上げ底気味の底部に、受部よりも突出する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。付着している漆膜は薄く、内面の各部位で部分的に確認できる。元々は内面全体に薄く付着していたとみられる。330は椀A。

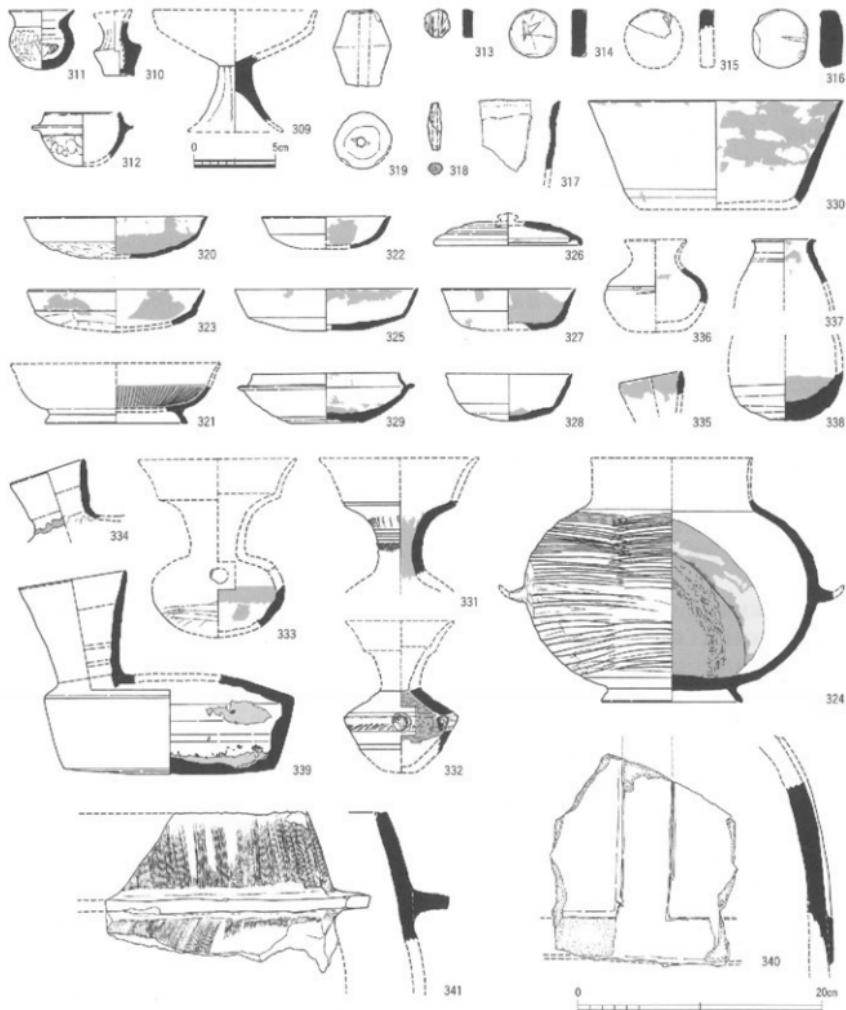


Fig. 60 特殊遺物 1:4 (309~312のみ1:3)

ている。332は体部上位のみが遺存する。漆膜は内面全体に付着している。肩部に設けた円孔には、栓として用いられた木の枝の痕跡が残る。333は体部下位の破片。漆は薄く付着しており、搔き取りの痕跡が確認できる。334、335は平瓶。いずれも口縁部のみの出土である。336～338は壺。完形に復元できるものはない。336は体部外面の一条の沈模をもつ。漆膜は小さく、体部内外面に少量付着している。337は体部下半を欠失する。口縁端部上面には面をもつ。漆膜は口縁部内面にうっすらと付着する。口径は5.2cm。338は底部のみの出土である。器壁は厚みがあり、外側にはロクロケズリを施している。漆膜は内面のロクロ目に沿って付着している。

339は平瓶で、底部の一部を欠失する。高所寺池の南辺に位置する東西溝SD9323より出土した。内面には白色物質と昆虫の蛹が付着している。蛹は蝶に由来するもので、白色物質はギブサイトである。尿瓶として利用されたものであると考えられる。口径8.9cm、器高16.8cm。

陶棺は2点出土した。340は蓋。頂部と口縁部を欠く。内面はナデ、外側はナデのち、突帯を貼り付ける。

341は須恵賀陶棺の口縁部から受部にかけての破片である。これに伴う蓋は出土しなかった。本資料は隅部分である。直角に曲がっており、遺存状態も悪いため、長軸・短軸の別は不明である。口縁部はやや内側へ傾く。口縁端部上面には平坦面がある。受部はまっすぐ外方へ伸びる。成形後、鉢部を貼り付ける。その後、内面にナデ、外側にはハケメを施す。口縁端部上面は粗くヘラケズリする。

飛鳥・藤原地域における須恵賀陶棺の出土例には石神遺跡17・18次調査出土資料などがある(『紀要2005』)。石神遺跡出土の陶棺は口縁部が受部より僅かに突出するもので、口縁端部は丸くおさめる。また、短軸・長軸を分ける隅部分はカーブを描いており、角張るものはない。このような形態の須恵賀陶棺が一般に知られているものである(中町教育委員会2003『東山古墳群I』)。これに対して本資料は口縁部が受部より大きく突出する点でかなり特異な例であるといえよう。

H 繩文土器・弥生土器

調査区全域から、10片ほどの縩文土器と少量の弥生土器が出土した。磨滅が著しく、図示しなかったが、縩文土器は前期後業の北白川下層Ⅲ式一大歳山式、後期前業の北白川上層式、晚期後業の滋賀里Ⅳ式があり、弥生土器はⅣ～V様式が主体である。いずれも小片であり、定住的な集落があったものではなく、周辺からの流れ込み

であろう。

I 塚 輪 (Fig.61)

本調査での出土埴輪は130点以上ある。調査区のほぼ全域から出土したが、完形に復元できるものはない。出土地点は高所寺池の南部にはば集中する。特に古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871の埋土やその直上層から出土したものが多い。円筒埴輪、朝顔形埴輪が多い。他に家形埴輪や盾形埴輪などの形象埴輪の破片も少量含むが、小片が多く同化できない。

342～348は円筒埴輪。うち、342、346は須恵賀に焼き上げている。出土地点は343、344、345が古墳周濠SD9850の埋土、347はSD9850直上層、342、346は古墳周濠SD9870直上層、348は高所寺池の北辺部の遺物包含層である。342～345は口縁部を含む破片。342は口縁端部を平坦に仕上げる。内面全体にタテハケ、外側全体にタテハケのちヨコハケを粗雑に施す。343～345は口縁端部から二段目までが遺存する資料で、口縁部外側には波状のヘラ記号がある。「N」字状のもの(343)と、曲線を描くもの(344、345)がある。343は口縁端部上面を丸くおさめ、端部内面もヨコナデによって丸くおさめる。内面は、二段目にタテハケを、一段目にヨコハケを施す。外側は二段目にタテハケを、一段目にナデを施す。のち、口縁部をヨコナデし、突帯とヘラ記号を施す。344の口縁部形態は、口縁端部内面を丸くおさめ、外側には外傾する面をもつもの。調整は内面全体にナナメハケ、外側にヨコハケを施す。外側のハケメはかすかである。口縁部内面から口縁端部外側はヨコナデし、内面のハケメをナデ消す。345は口縁端部上面に凹面がある資料。内面は口縁端部付近までかすかなヨコハケを施したのち、口縁端部内面～上面をヨコナデする。外側はタテハケのち粗雑なヨコハケを施す。のち、突帯・円形透孔およびヘラ記号を施す。これらの口径は21.8～23.0cmである。346～348は基底部を含む破片。346は内面にナデ、外側にはタテハケのちB種ヨコハケを施す。のち、突帯や円形透孔を施す。概して調整は粗い。347は基底部から一段目の突帯までが遺存し、残存部分は全周する。内面は下半にハケメのちナデ、上半にタテハケのちヨコハケを施す。外側は基底部付近までタテハケを施し、のち突帯を貼り付ける。基底部は不調整。348はやや大型の資料。動物の骨とともに集中的に出土しており、本資料内面にも骨片が付着しているが図示できない。内面は大部分をナデるが、基底部付近にはハケメが残る。外側は基底部付近に至るまで、ほぼ全面にタテハケを施し、のち突帯を貼

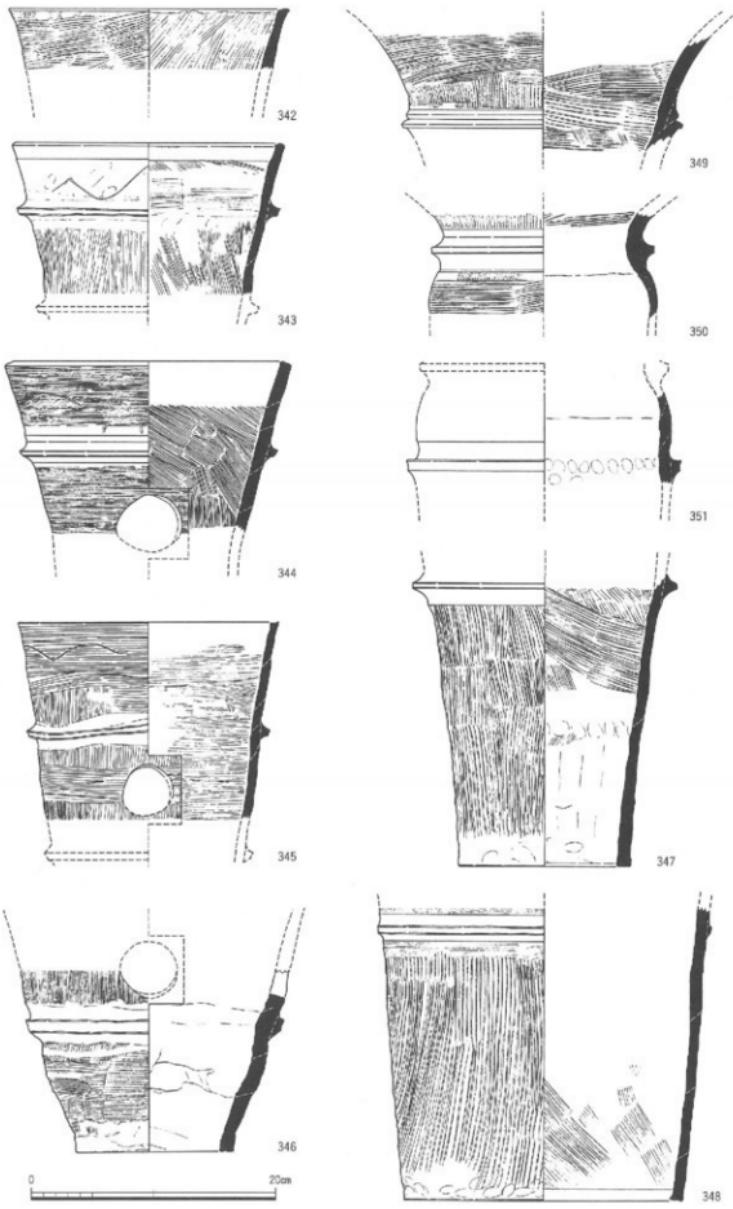


Fig. 61 円筒埴輪 1:4

り付ける。突帯の上下にはヨコハケメを施す。基底部は不調整で、指頭圧痕が確認できる。これらの基底部は14.0～22.8cmを測る。349～351は朝顔形埴輪。349は内面にヨコハケ、外面にはタテハケのちヨコハケを施す。350の内面は、口縁にのみヨコハケを施す。外面は、タテハケのちヨコハケを施し、突帯を貼り付ける。351は軌質で、調整の詳細は不明である。

以上が本調査区で出土した埴輪の概要である。出土した埴輪は、いずれも無黒斑である。348がやや大型ではあるものの、大半は基底部径が15cm前後と小型である。基底部調整は施さないが、突帯の断面形態はいびつな台形を呈する。これらの埴輪は川西編年Ⅷ期、すなわち6世紀代に比定できる（川西宏幸1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第2号）。なお、調査区周辺で埴輪が多く出土している遺跡には藤原宮朝堂院東第二堂や日高山1号墳がある。

J 小 緒

高所寺池の調査では、縄文時代～近代にかけての土器が出土した。なかでも出土量が多いのは、5世紀中頃～6世紀前半代、7世紀後半～8世紀初頭、12世紀後半～13世紀後半の資料である。これら以外の時期に比定できる資料は、遺物包含層からの出土量を含めても、ごく少量である。

古墳時代 高所寺池内で出土する古墳時代土器で、古い様相を示すものは、5世紀中頃以降の資料である。前期に比定できる土器はほぼ皆無である。5世紀中頃は、高所寺池の東南部で、韓式系上器や陶質土器を多く含む井戸SE9570や溝SD9350が営まれた。これらの土器を利用したのは渡来系の人々である。5世紀末になると、高所寺池の西南部では密窯焼成の埴輪や、陶邑編年TK23～47に相当する須恵器や土師器をもつ古墳が造営された。これは先行する素掘井戸SE9570や溝SD9350を造営したのとは別の集団のものである。これら古墳周濠の埋土から出土した土器は、いずれもほぼ同時期の所産である。遺構の遺存状態が比較的良好であったSD9850にはTK43に比定できる須恵器高杯を含むことから、周濠の埋没時期をある程度は窺うことができよう。また、周濠や遺物包含層から出土した埴輪は、南方の日高山1号墳や、北方に位置する藤原宮内を流れる路筋からの出土資料とは質を異にしている。これら古墳周濠よりもやや遅れて造られたのが高所寺池の北部に位置する南北溝SD9581・SD9582である。ここから出土した土器が、高所寺池内における古墳時代の土器で最も新しいものである。

藤原宮造営直前～藤原宮廃絶期 当該期には、藤原宮造営に伴い南面大垣SA2900とそれに伴う内濠SD502、外濠SD501、六条条間路南側溝SD4752が設けられた。南面大垣SA2900で仕切られた宮域内では、掘立柱塀や建物が構築され、東西大溝SD9633なども設けられた。掘立柱建物は何度も建て替えられ、一部は埋没した東西大溝SD9633に重複して建てられた。これらの遺構からは比較的多くの土器が出土した。出土土器は、煮炊具の出土量がかなり少なく、杯、皿類が大半を占める。碗などの筆記用具や墨書き土器は小破片が僅かに出土したのみである。一方、宮域の外では、高所寺池の東南部に掘立柱建物SB9333や五角形井戸SE9330が営まれた程度であった。遺物包含層を含め、宮域外での藤原宮期の土器出土量はかなり少ない。このように、土器の出土量から見るかぎり、宮内においてはある程度の土地利用が窺えるが、宮外の左京六条二坊西北坪ではその様な傾向は見られない。

藤原宮廃絶後～中世 藤原宮廃絶後は、8～10世紀に比定できる土器はほとんど出土しなかった。奈良時代以後、多くの井戸や東西溝、土坑が営まれる鎌倉時代まで、当該地での活発な土地利用はなかったと考えられる。中世遺構出土土器は、井戸SE9885出土の黒色土器碗が最も古く、12世紀後半に比定できる。その他の井戸や東西溝SD9563出土土器は13世紀後半に比定されるものである。これら井戸や東西溝から出土した瓦器碗は、いずれも、断面三角形の華奢な高台をもち、内面の圓線ミガキの粗さも、ほぼ同様である。しかし、口縁端部内面にみられる段を観察すると、SE9884出土資料については、他遺構からの出土資料に比べ、鈍いことがわかる。したがって、SE9884出土土器は、他の井戸や東西溝出土資料よりも、年代的には若干新しい様相を示しているといえよう。また、14世紀以降の土器の出土量はほとんどないことから、この時期にも当地における土地利用の一つのピークがあるといえる。

4 金属製品・石製品・木製品

調査区内から金屬製品・石製品・木製品が少しあり出土した。それらは弥生時代から中世にいたる時期のものであるが、古代の遺物は皆無に等しい。

ここでは飛鳥藤原地域でこれまで未発見あるいは未報告であった特殊な遺物に焦点を当て、古墳時代の銅鏡片・水晶製三輪玉、そして中世の石鍋を中心に報告する。

A 銅 鏡

中国製の「長宜子孫」銘内行花紋鏡である(Fig.62-1, PL.43)。第118次調査北区の東西溝SD9633から出土した。

鏡面の約1/8破片で紐を欠失するが、深緑色の光沢をもち、磨滅も少なく遺存状態は良好である。復元面径14.5cm。縁厚3.5mm、面厚2.4mm、内区の最も薄い部分の厚さは1.7mmを測る。鏡面は縁端に向かって3mmほどの反りをもつ。破損面の研磨は認められない。鏡背には微量であるが赤色顔料の付着が認められる。現存重量45g。

紋様構成は、中央から鏡縁に向かって順に、円錐、蝙蝠座、圓帯、連弧紋、四帶、素紋平縁となる。外区紋様帶ではなく、幅13mmの平縁の内側に幅7mmの無紋の四帶が巡る。鋲上がりはよく、紋様は鮮明である。

鉢座弁間に「長宜」の銘文が鉢を中心右回りに配置される。また連弧紋の間には逆字の「明」があり、その右側の連弧紋間に鉢文の一部とみられる縦の2画が残存。「長宜」の字画は、左側の一画が外反する特徴がある。

「長宜子孫」銘鏡において、本例のような連弧紋間に「明」の字がある例は少ない。類例は国内ではなく、中国出土例に、羅振玉収集資料の「長宜子孫」銘鏡¹⁾と河北省易県武陽台村出土の「長宜子孫」銘鏡²⁾、河南省新郷付近出土の「長宜子孫」銘鏡³⁾があり、「長宜子孫」に統く銘文は、「明如日月 位至三公」、「明如日月 以父母兮」、「明如日月 利父母兮」である。これらを参考するならば、連弧紋間の銘文は、上の句を「明如日月」と推測できるが、下の句は特定できない。

「長宜子孫」銘の蝙蝠座紐内行花紋鏡の日本での出土例はこれまでに18例以上が知られ⁴⁾、出土地は、宮崎県から静岡県に及ぶが、分布の中心は北部九州にあり、近畿以東の出土例は少ない。

この鏡は樋口隆康氏の分類によれば、内行花紋鏡Bcイ式に相当し⁵⁾、年代は、岡村秀典氏のいう「漢鏡6期」、すなわち後漢中期にあたる2世紀前半から中頃に位置付けられる⁶⁾。

この鏡式の銅鏡は、国内では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての墳墓に副葬されるのが通有である。本鏡片は、7世紀代の上器を包含する東西溝SD9633からの出土品であり、その出土状況からみて、現位置からの移動が想定される。鏡背に付着する赤色顔料は水銀朱であることが蛍光X線分析によって判明しており、本来は古墳の副葬品であった可能性が高い。調査区内で発見されたSD9850やSD9870、SD9871など、藤原京造営時に削平された古墳の副葬品であった可能性があろう。いずれにせよ奈良県下における「長宜子孫」銘の蝙蝠座紐内行花紋鏡の初出例としての意義は大きい。

B 水晶製三輪玉

半透明の水晶製三輪玉が1点ある(Fig.62-2, PL.43)。第118次調査北区の中世の耕作溝から出土した。

中央半球部の侧面と底部を一部欠失するものの、全体の形状をよく残している。長さ4.2cm、最大幅2.1cm、中央半球部の最大高2.45cm。左右半球部の高さは2.1cm、重量36gを計る。左右半球部の幅は1.65cmと1.95cmと異なる。三山形をしており、左右半球部は中央部より小さく、中心軸をずらして中央部にとりつく。全体的に丁寧な研磨で整形されるが、底面は平滑に磨いているものの、研磨が粗いため、成形時の搾打痕がわずかに残る。

水晶製三輪玉は古墳時代中期後半から後期の遺物で、振り環頭大刀の把頭部にとりつく勾金の装飾品である。古墳からの出土が通例であるが、本例は出土遺構と遺物の年代がかけ離れており、後世の遺構への混入品の一部みられ、上の銅鏡とともに削平古墳に副葬された遺物と考えて間違いないだろう。

C 石 锅

第113次調査東区の中世の石組井戸SE9345の上層から出土した滑石製石鍋である(Fig.62-3, PL.43)。井戸の堆積土中の最上層から、口縁部を上にして、斜位の状態で出土した。共伴遺物はなく、井戸の埋没途上の崖みに単独で投棄されたものである。

横方向に傾斜する結晶面にそって体部中ほどで破損するものの、遺存状態は良く完形に復原できる。

石鍋の形状は、ほぼ平坦な底部から浅い体部が内擭ぎみに立ち上がり、口縁直下に断面台形の鶴が全周する。

口縁部は短く、端部は丸みをもつ。鶴と口縁部外周に5ヶ所の括れを入れて、上面から見た形を五弁の花形に作る。このような装飾効果をもつ石鍋の出土例はなく、花形に再加工された可能性がある。全体に丁寧な研磨によって平滑に仕上げられ灰色の光沢をもつが、体部下端

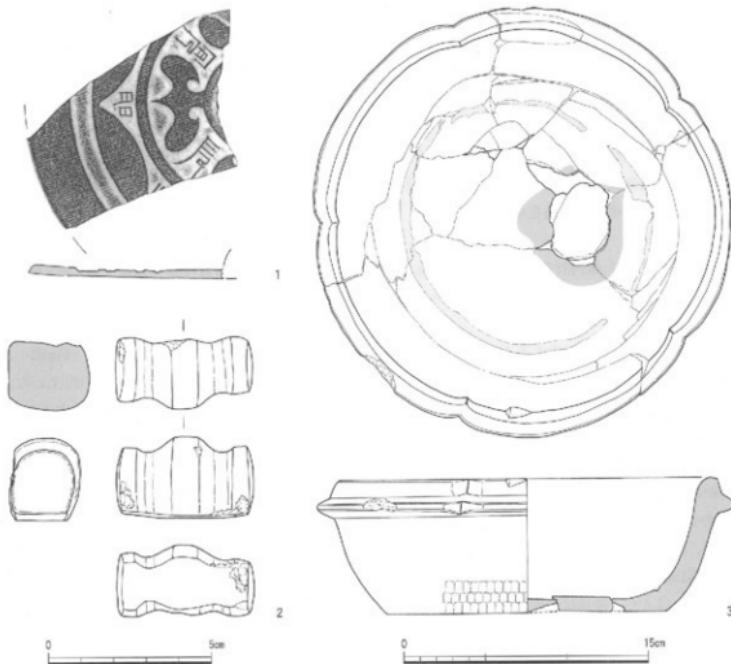


Fig. 62 金属器・石製品 2:3 (3のみ 1:3)

には盤状工具による幅5mmの削りが段状に残る。また内面には使用時による横方向の擦痕が全面に認められる。見込み部から体部への立ち上がり部分に沿って幅3~6mm、深さ1mm程の窪みが巡り、使用による痕跡と考えられる。口縁端部から底部外面にかけて煤が付着し、煮炊に使用されたことを示す。口径23cm、鍔の径25.5cm、体部厚1.3~1.4cm、底径17cm、高さ8.2cm、重量2470g。底部は厚さ0.8~0.9cmと体部に比べて薄く、このためか底部中央が破損し、それを補修した痕跡がある。長軸5.1cm、短軸3.7cmの不整椭円形の穴を塞ぐように同質の板石片で埋め込んでいる。板石の周囲を研磨して形状を整えており、穴の周囲には接着剤に用いたタール状物質が残存する。タール状物質の成分分析をおこなったが、煮炊による化学変化を被っているため、材質を特定できなかった。化学分析による石材の産地同定は未実施であるが、石質や形状からみて、長崎県西彼杵半島産の可能性が高い。

石鍋は口縁部の四方に方形の把手がつくものから、断面台形状の鍔が体部中位にめぐるものへ形態変化し、その後、鍔が断面三角形状に変化しながら口縁端部と一体化することが知られている¹⁷。本例は木戸雅寿氏の分類に従うとⅢ-a-2類に相当し、13世紀代に比定されるが、この年代は作出した瓦器碗の年代観とも符合する。

石鍋は10世紀から16世紀頃にわたり、主に長崎県西彼杵半島一帯で生産され、九州を分布の中心として沖縄県から山形県にいたる広範囲に分布する。特に、草戸千軒遺跡をはじめとする瀬戸内海沿岸地域や京都、鎌倉から集中的に出土し、石鍋の一連の型式変化が全国の消費遺跡を通じて把握されている¹⁸。一方、山口県宇部市所在の下蒲川南遺跡も石鍋製作所跡として知られ¹⁹。局地的な石鍋の生産も論じられている²⁰。また京都大学構内遺跡出土の石鍋を分析した宇野隆夫氏はその生産地を京都府大江山に、河内一浩氏は和歌山県下出土の石鍋を紀伊山系の竜門山、鳩羽山山系に推定しており²¹、今後の発

掘によって新たな石鍋製作所跡が発見される可能性がある。

奈良県下では石鍋の出土報告例が少なく、石鍋の流通実態は不明な点が多いが、本調査地周辺でも以下の出土例を確認できる。①橿原市四分町（飛鳥藤原第10次調査〔藤原概報4〕）、②橿原市石川町（昭和63年下水道立会調査）、③橿原市高殿町（飛鳥藤原第41次調査〔藤原概報15〕）、④橿原市木之本町（飛鳥藤原第75次調査〔藤原概報25〕）。また、飛鳥藤原地域周辺でも、明日香村川原所在の川原大辻遺跡、桜井市纏向遺跡でも出土しており¹⁰、石鍋が当地域一帯に広範に流通した状況を窺うことができる。

石鍋の流通背景としては、木戸雅寿氏により、海運を利用した権門社寺や貴族の流通介入が想定されている¹¹。当地域周辺に分布する高殿荘、喜殿荘、飛驒莊などの東大寺や興福寺、皇室等を本所とする莊園との関わりが推測され、木戸が指摘するように莊園やその領主・領家たる本所との関わりの中で石鍋が搬入された可能性がある。しかしながら奈良県下における石鍋の流通実態や流通背景の解明にはさらなる資料の増加有待たねばならない。

D その他

石製品、鋳型片、炉壁、輪羽口片、焼土塊、椀形鉄滓、獸骨、獸齒、焼土、木屑、炭、桃種子などが出土した。



Fig. 63 出土木製品

石製品にはサヌカイト製の石鎌と石匙、柱状片刃石斧、流紋岩製砥石、石英製白碁石、滑石製円板片があり、サヌカイトやチャートの剥片もある。木製品は14点あり、第113次調査西区の石組井戸SE9328から漆器椀3点、独楽未製品、鳥形木製品、柄杓、不明部材がまとまって出土した（Fig.63）。漆器椀はいずれも内外面とも黒漆塗りで、そのうちの2点には赤色漆で草木や丸状の紋様が描かれている。また、石鍋が出土した石組井戸SE9345の下層から櫛が、それ以外の中世の遺構から櫛、杓子、合子蓋、曲物、部材、漆付着の曲物底板などが散発的に出土している。

註

- 1) 羽振玉『古鏡図録』巻下
- 2) 河北省文物研究所『歴代銅鏡紋飾』1996年
- 3) 梁上春著・田中琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』同朋舎、1989年
- 4) 墓藏文化財研究会『倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題』1994年
- 5) 楠口隆康『古鏡』新潮社、1979年
- 6) 岡村秀典『後漢鏡の編年』『国立歴史民俗博物館研究報告第55集』1993年
- 7) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎的研究』Ⅸ、日本中世土器研究会、1993年。同『石鍋』「概説中世の土器・陶磁器」真陽社、1995年
- 8) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」前掲註7)
- 9) 宇都市土地開発公社・山口県教育委員会『下蒲川南遺跡』1987年
- 10) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」前掲註7)
その他、局地的な生産の事例に福岡県大牟田市四箇の湯谷遺跡や同県糟屋郡篠栗町周辺がある。
- 森田勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術』148号、1983年
吉村靖徳・黒瀬茂文「福岡県篠栗南蔵院の滑石製石鍋製作跡」『古文化研究』50（中）、2003年
- 11) 宇野隆夫「京都大学構内遺跡調査研究年報」京都大学農学部校内遺跡調査会、1977年
河内一浩「和歌山県下における石鍋について」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ、日本中世土器研究会、1991年
- 12) 相原嘉之「(1) 1996-1次 川原大辻遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報－平成8年度－』、1998年
石野博信・閑川尚功『纏向』奈良県立橿原考古学研究所、1976年
- 13) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」、同『石鍋』前掲註7)

第V章 考察

1 藤原宮南面外濠について

藤原宮を囲む施設には、四面に3ヶ所ずつ開く宮門とそれに取り付く掘立柱塀の大垣があり、その内側には内濠、外側には外濠がある。さらにその外側には藤原宮を囲む条坊道路があるが、外濠との間に外周帯が設定されており、場所によっては28mもの幅をもつことが大きな特徴となっている。大垣を基準にした内濠と外濠の位置をみると、内濠に関しては、宮城のすべての地点で大垣と30大尺の距離をおいて6大尺の幅で設定されている。一方、外濠に関しては、東面では50大尺の距離をおいて15大尺の幅で、西面では45大尺の距離をおいて30大尺の幅で、北面では60大尺の距離をおいて15大尺の幅でそれぞれ設定されていたと考えられている。

さて、今回の藤原宮南辺東部にあたる高所寺池の発掘調査では、池の東岸および西岸で藤原宮を囲む内濠、大垣、外濠の遺構を検出することができた。その調査概要報告は次のように指摘する¹⁾。①内濠、南面大垣、外濠は、いずれも非常に整合性の高い直線の式を導くことができる。②いずれの遺構も、全て東で北に振れる造営方位を示す。③その振れは、大垣が $0^{\circ} 45' 55''$ 、内濠が $0^{\circ} 45' 50''$ と、両者ほぼ平行するのに対し、外濠は $1^{\circ} 24' 22''$ とやや大きく、それらと平行しない。また、以上の指摘に基づいて、「(外濠の)振れの違いが南面の施設全体に及んでいたことが確定した。大垣と外濠との距離が西になるほど広がるのは、各々の方位が異なることに原因していたのである。」とした。

一方、これに対して井上²⁾は、第34次～第29～

Tab. 4 各遺跡計測点の座標

	34次	66-9次	58-9次	29-6次	19-2次	69-4次	1次	124次	118次
内 濠	X -166.6666	-166.6673	—	-166.6645	-166.6643	-166.6643	-166.6618	-166.6564	-166.6551
	Y -18.1258	-18.1173	—	-18.0004	-17.9562	-17.9539	-17.6821	-17.3573	-17.2705
南 肩	X -166.6681	-166.6682	-166.6677	-166.6669	-166.6662	-166.6660	-166.6632	-166.6586	-166.6574
	Y -18.1257	-18.1173	-18.0439	-18.0004	-17.9563	-17.9541	-17.6821	-17.3575	-17.2705
大 垣	X -166.6798	-166.6790	-166.6784	-166.6779	—	—	-166.6739	-166.6694	-166.6679
	Y -18.1413	-18.1175	-18.0464	-17.9976	—	—	-17.6786	-17.3564	-17.2709
外 濠	X -166.7026	-166.6993	-166.6995	-166.6997	—	—	-166.6920	-166.6840	-166.6826
	Y -18.1347	-18.1183	-18.0487	-17.9998	—	—	-17.6827	-17.3597	-17.2707
北 肩	X -166.7088	—	-166.7073	-166.7052	—	—	-166.6968	-166.6887	-166.6870
	Y -18.1352	—	-18.0502	-18.0006	—	—	-17.6827	-17.3592	-17.2708

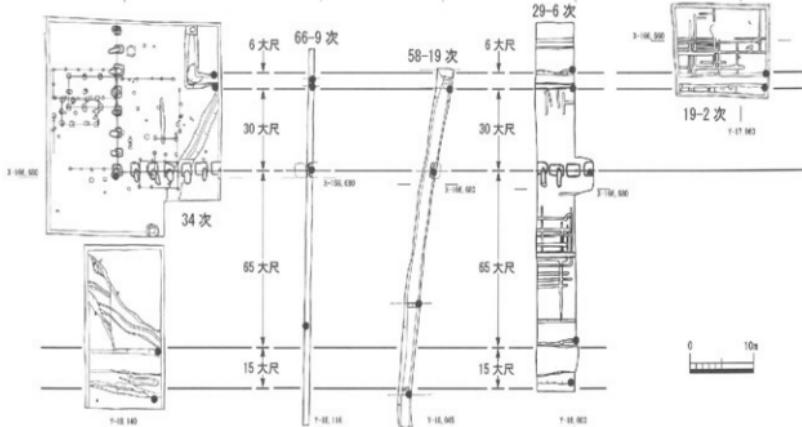


Fig. 64 藤原宮南面外郭施設(大垣を水平、直線 各遺跡図を表示) 1:800

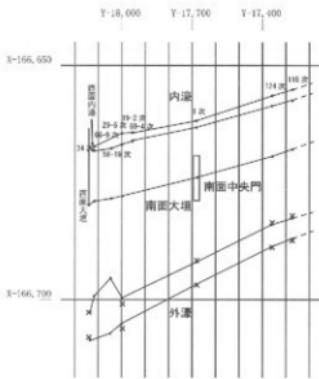


Fig. 65 Tab.4をグラフ化

6次間、第124次～第118次間では外濠の国土方眼に対する振れの角度は大垣・内濠のそれに近いが、宮南面中央門の前を挟む第29～6次～第1次間、第1次～第124次間では、内濠と大垣は $0^{\circ}43'45''$ から $0^{\circ}50'12''$ であるのに対し、外濠はそれぞれ $1^{\circ}46'55''$ 、 $1^{\circ}18'07''$ であって、東で極端に北に振れる角度を示している。このため、外濠に関しては整合性の高い直線の式は成立しがたいとし、藤原宮の西南隅の発掘調査では大垣から65大尺の距離をおいて15大尺の幅で、宮南面中央門の前では門の中心から50大尺の距離をおいて15大尺の幅で、宮南面東部にあたる高所寺池の両岸の調査では大垣から40大尺の距離をお

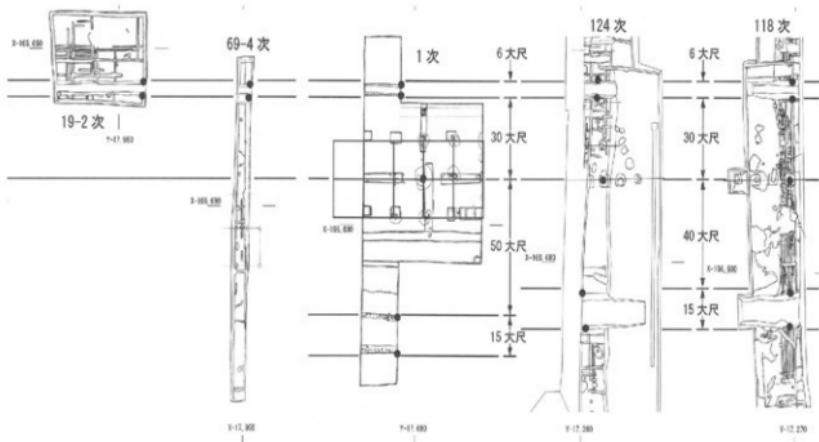
いて15大尺の幅でそれぞれ設定されていたと指摘する。

本稿では、Fig.64に各調査区の大垣の遺構が描くように配置し、遺構の計測ポイント、井上が指摘する設定寸法（1大尺 = 0.3540m = 0.295m【1尺】×1.2）を示した。Tab.4には遺構の計測ポイントの座標値を各調査時の基準点ももっていた誤差等の修正を行い、世界測地系数値に置き換えたものを記した。Fig.65は、検出した遺構の座標値を、東西方向に対して南北方向を20倍に強調したグラフで、井上が推定した設定位置を×印で示した。

それらによると、西端の第34次、中央の第1次、東端近くの第118次では設定寸法と遺構の計測位置の関係は、ほぼ一致するようであるが、第29～6次では遺構が設定寸法より若干北寄り、第124次では若干南寄りに見受けられる。各所で設定寸法として解釈した遺構が結果的にその数値に近かったのか、両報告の後で新たな検出事例が加わったわけではないので、現段階では判断は難しい。しかし、少なくとも外濠と大垣・南面大垣の振れが異なるという推定を積極的に否定するだけの材料は得られなかった。今後、宮南面での調査成果の蓄積を期待したい。

註

- 1) 花谷浩・小谷徳彦・小澤毅「東南官衙地区および左京六条二坊の調査－第118・124次－」『奈良文化財研究所紀要』2003年、85～92頁
- 2) 井上和人「藤原宮南面外郭施設設定規格復元考」『奈良文化財研究所紀要』2004年、26～28頁



2 出土瓦の問題点

一小山庵寺の寺地に関連して—

はじめに『日本書紀』天武9年(680)5月乙亥条に「京の内の廿四寺」の記載がある。これをどの寺跡にあてるかは諸説あるが、十条十坊の正方形をした広い藤原京とともに寺院跡24を数え上げることは困難である¹⁾。さらに、藤原京内に所在した寺院がどれくらいの寺地を備えていたのかは、これまであまり議論されたことがなかったように思う。

伽藍の配置計画(中軸線など)が藤原京の条坊と合致する、本薬師寺(櫻原市城殿町)²⁾および小山庵寺(通称・紀寺跡、明日香村小山)³⁾は、中心伽藍が4町(坪)、文武朝大官大寺(明日香村小山)は6町に復元されている。だがこれは、伽藍中心部いわゆる「塔金堂院」の範囲であって、寺地のすべてを指し示しているのではない。

飛鳥の寺院を例に検討してみると、飛鳥寺(明日香村飛鳥)に関しておおよその寺地が判明する。飛鳥寺の寺地は、かつては、南門の前方に広がる石敷広場を含めて2町四方に復元されていた(『飛鳥寺報告』38頁)が、その後の発掘調査によって四面の大垣が各所で確認され、その形状が南北に長い台形をしていて、東南部は斜めに切り欠かれていることがわかつてきたり。

その規模は、大垣間の距離で、南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000m²におよぶ。中心伽藍は、この寺地の西南隅に片寄った位置にある。

ただし、実際の寺地は、北面大垣外側の北外濠SD501(『藤原概報8』『年報1998-II』)、西面大垣外側の石組溝SD6685(『藤原概報15・20』『年報1997-II』)そして南門前の石敷参道や石敷広場を含めるならば、さらに広大な範囲となるとの考えもある⁴⁾。

最近、川原寺でも北面大垣SA600が確認され、南面大垣との距離が約333mあることがわかつた⁵⁾。これは、南門前の石敷参道などを含めたときの飛鳥寺の南北規模と近似する。東西規模は、現況や周辺の調査成果からみて200mをこえると推測され、面積は65,000m²を超える。寺地の北端部には金屬工房や瓦窯があり、それと講堂との間、および、中心伽藍西方には附属施設群が配置されていたと推定できる。この二つの例によって、飛鳥寺院の寺地の規模が推し量れよう。そしてそれは、本薬師寺や小山庵寺について現在推測している4町という広さをかなり凌駕するのである。

さらに、本薬師寺については、その寺地を推測するこ

とができる史料がある。

薬師寺の寺地 『薬師寺縁起』(薬師寺本)には、宝亀年間(770-781)注釈と推測される「寺内流記帳」によるとして、寺地を16坊4分の1の広さと記録している。

さらに、同書におさめる11世紀後半⁶⁾の「僧行」の記事には、そのうちの「塔金堂并僧房等院四坊」と「大衆院二坊」は「本寺」つまり本薬師寺のものとしている。したがって、本薬師寺では藤原京右京八条三坊の4坪が「塔金堂并僧房等院四坊」に該当し、それ以外に「大衆院二坊」があって、合計6坪の寺地が備わっていたのである。「大衆院二坊」が右京八条三坊の北・東・西のいずれにあたるかは、それらの地域で発掘調査が少ないこともあって判明しない。しかし、4坪分の中心伽藍地(「塔金堂并僧房等院」と2坪分の附属地(「大衆院」という構成は、藤原京内の寺地を考えるうえで一つの基準とはなるであろう。

小山庵寺の寺地と瓦 今回報告した、第113次調査区(藤原京右京七条二坊西北坪)では、東西溝SD9323などから藤原宮所用ではない瓦が比較的まとまって出土した。それらは、第IV章第2節で報告したように、小山庵寺の所用瓦を含んでいる。

先述したように、小山庵寺の寺地はこれまで左京八条二坊(岸説)の4町と推測されてきたので、第113次調査区はこれを大きくはずれる。だが、今回の調査区と小山庵寺の中心伽藍とを空間的に繋ぐことのできる資料が存在する。

高所寺池の南約100mに、現在、市道が東西に敷設されている。この道路建設に先立つ発掘調査は、1993年末から1994年にかけ、飛鳥藤原第74次調査と第75次調査としておこなわれた(第II章参照)。そのうち、第75次調査で発掘した2基の井戸SE305・SE309を中心として、比較的多量の瓦がみつかった。概要報告では、これらの瓦から、「調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にあたる。あるいは、紀寺付属の苑院などが一部北に延びていた可能性」を考慮した(『藤原概報25』50頁)。以下、まずその瓦をかいづまんで紹介して、その推測の妥当性を検討しよう。

第75次調査で出土した瓦 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚などがある。

軒丸瓦には、素弁蓮華紋と複弁蓮華紋がある。

1は、素弁十弁蓮華紋軒丸瓦。細い紡錘形の蓮弁とT字形の長い間弁をもち、間弁は中房につながる。中房は断面台形で、蓮子は8個ほどあり、中心蓮子のまわりに

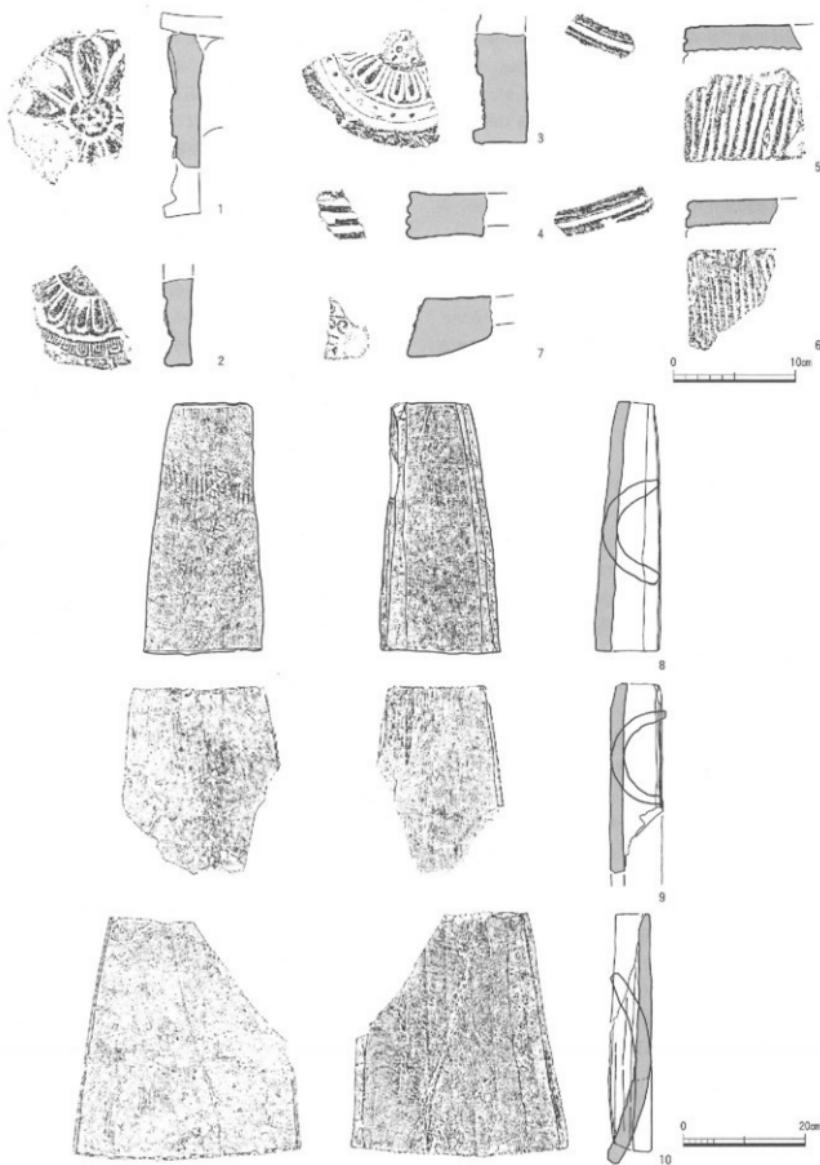


Fig.66 飛鳥藤原第75次調査出土瓦 1:4 (8~10) 1:8

二重にめぐるよりもみえる。

裏面は平滑であるが、磨耗して調整手法は不明。外縁は欠失する。弁区径は14.5cm、中房の直径3.5cm、中房での瓦当厚は2cm、微小なクサリ繩は含まれるが、砂粒をほとんど含まない緻密な胎土で、焼きは軟質である。表面は灰色ないし灰白色、芯は肌色。

この軒丸瓦の蓮弁や間弁の形状は、大庭寺跡から出土した幅線紋縁素弁八弁蓮華文軒丸瓦¹¹⁾に近似するが、異範である。同範例を確認することはできなかった。

2は、雷紋線複弁八弁蓮華文軒丸瓦。小山魔寺創建軒丸瓦(KYM-1)と同範である¹²⁾。中房蓮子に周環はみえるが、蓮弁や雷紋などの紋様にはシャープさがない。

また、連弁と外区との間には大きな危傷が2個ある。瓦当裏面は、板ナテ調整で平坦に仕上げてある。中房部での瓦当厚は2.5cm、側面厚2.2cm。胎土は、微小な砂粒を少量含むだけで緻密である。硬い焼きで、灰色をしている。

3は、珠紋線複弁八弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁には、弁央に凸線を置いて二分するものと、そうでないものとがある。中房は1/4しか残らないが、蓮子配置は1+4+8、であろう。外縁は直立線で素紋である。外区内縁に界線で区画された珠紋帯がある。珠紋数は24と推定できる。

瓦当裏面は、ナテ調整され平坦。側面には調整痕がなく、瓦鉢とカセ型との隙間にできたバリとカセ型内面の木理痕跡がある。復元瓦当径17cm、復元中房径5.2cm、瓦当厚4cm、側面厚4.2cm。砂粒の少ない緻密な胎土で、焼きはやや軟質である。明灰色ないし灰白色。

この軒丸瓦のように、蓮弁中央に凸線を置かない蓮弁が混在し素紋の直立線をそなえた複弁蓮華文軒丸瓦の例として、日向寺跡(櫛原市南浦町)出土例¹³⁾があるが、珠紋数などが違う(H向寺例は16)ので別範である。

軒平瓦は、重張紋と偏行唐草紋がある。

4は、四重弧紋軒平瓦。弧線と凹線はほぼ同じ大きさで、弧線は断面形に丸みがある。顎は、長さ6.3cmの段顎である。顎面にはナテ調整があるが、かすかに縄叩き痕が残る。凹面の、瓦当面から1.5cmの位置に、施紋型のあたりがある。凹面は、施紋後にナテ調整が加えられており、布圧痕がわずかに残るにすぎない。砂粒を含むやや粗い胎土で、焼きは硬い。茶褐色。瓦当厚3.7cm、平瓦部厚2.5cm。

5・6は、ともに顎が脱落していて、弧線2条が残るだけの破片。弧線は平坦で、凹線は断面V字形である。顎が剥離した平瓦部凹面には、重張紋風のカキ口痕が残

っている。5と6とでは、カキ口痕の輪に違いがあるので調整具は違うが、顎の粘土を接合するための工夫である¹⁴⁾。凹面には調整がなく、布圧痕と桶の桶板痕がある。側面には、凸面側から切り込まれた分割截面と、凹面沿いに分割破面があり、破面はごくわずかにヘラケズリ調整がおこなわれている。分割截線のヘラは、瓦当(広端)から狭端方向に動く。凸面側から分割線を入れる例は、飛鳥ではみたことがない。砂粒を少量含んだ胎土で、硬い焼きである。褐色ないし灰色。

7は、藤原宮所用6643型式D種の小破片。長さ7.2cmの段顎。顎面はヘラケズリ調整される。凹面は、瓦当近くにヨコヘラケズリ調整があるが、それ以外は調整がなく、布圧痕が残る。砂粒とクサリ繩が目立つや粗い胎土で、高台・峰寺瓦窯の製品。硬い焼きで、青灰色。

以上の軒丸瓦と軒平瓦はいずれも包含層や中世の遺構から出土したものである。丸瓦と平瓦は、井戸出土資料をおもにとりあげる。

丸瓦は行基丸瓦2点を示す。

8はごく一部を欠失するだけで完形である。凸面は、変形の斜格子叩き痕をナデ開溝でスリ消してあるが、叩き締めの円弧をえぐく叩き痕が残る。凹面には、布圧痕や糸切り痕、そして粘土板合わせ目がある。粘土板合わせ目はS型・Z型の2条が平行して走っている。粘土板が模倣の外周に足らなかったため、細長い粘土板を貼り足したのである。側辺は断面V字形に削られたのち、凹面側に幅広い面取りのヘラケズリをいれてある。広端と狭端には面取りの調整はない。胎土は緻密で、1~2mm程度の石英・長石・クサリ繩と若干の雲母を含む。焼きは硬質。灰色5Y7/2ないし浅黄色5Y7/3。全長41cm、広端幅19.4cm、狭端幅12.5cm、重量4.02kg。井戸SE305の第3層出土。

9は狭端部を残す資料。凸面はナテ調整されて、叩きの痕跡が残らない。凸面向かって右の側近くには、浅い沈線がある。分割截線にしては浅いので、分割の目安に入れたものであろうか。凹面にも調整はなく、糸切り痕(Ur)と布圧痕が明瞭である。凹面向かって左側には、Z型の粘土板合わせ目がある。また、それに隣接した狭端部には、長さ10cmほどの断面半円形の凸帯があるが、用途・機能は不明である。側面調整はc手法で、凹面側の縁に面取りがある。狭端部には面取りのヘラケズリはない。胎土は、1mm以下の石英・長石を含むだけで、緻密である。硬い焼きで、オリーブ灰色5Y6/2。現存長31cm、狭端幅12cm、現存重量1.78kg。井戸SE309第

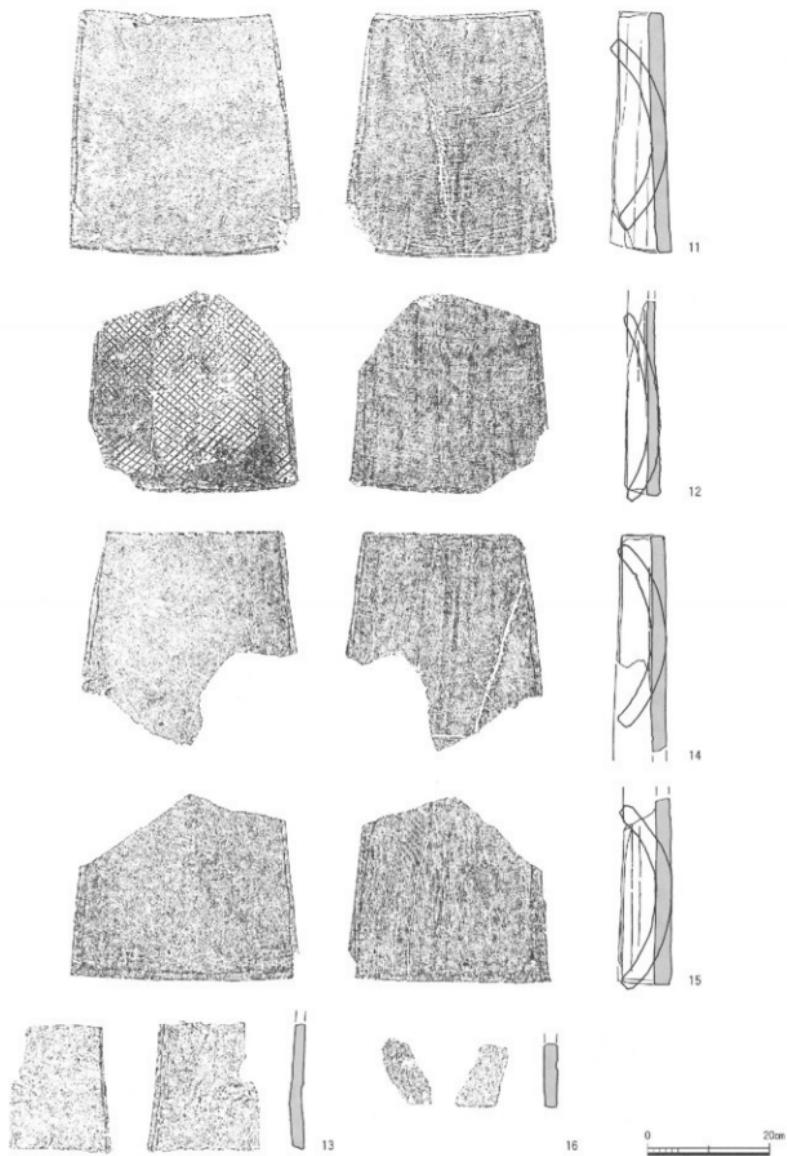


Fig.67 飛鳥藤原第75次調査出土瓦 2 1:8

3層出土。

平瓦については、井戸出土の7点と包含層出土の凸面布目平瓦1点を示す。井戸SE305出土平瓦は5点を図示した。

10は、狭縫部の一部を欠失するが、ほぼ全形をうかがえる平瓦である。凸面は、ヨコナデ調整されて叩き痕を残さない。凹面には調整がおこなわれておらず、糸切り痕（Ur）、粘土板合わせ目（Z型）、布圧痕と布縦じ合わせ目痕、そして桶の側板圧痕が明瞭に残る。側面には、破面調整ののち、凹凸両面に面取りのヘラケズリがしてある。凹面側の面取りは幅が広い。狭縫の凹面線にも面取りがある。

胎土は緻密で、石英・長石・雲母・黒色粒を含む。一部は須恵質の近い硬い焼きで、明灰色ないし明青灰色をしている。全長39.2cm、広端幅35cm、現存重量4.64kg。
第1層出土。

11は、広端の隅をわずかに欠くだけで、ほぼ完形の平瓦である。凸面は、全面ヨコナデ調整されており、広端部にわずかに長方形の叩き痕（木目平行・直交線）かが残るにすぎない。凹面は調整されておらず、糸切り痕（Dr）、粘土板合わせ目（Z型）、布圧痕と布縦じ合わせ目痕（GSmr）¹¹。そして桶の側板圧痕が明瞭である。また、凹面の右側辺に沿って捺り紐の分割界線がある。この井戸からは、同じ布縦じ合わせ目痕をもつ平瓦片が、もう1点出土した。

胎土には、石英・長石・雲母や微小な黒色粒をやや多量に含むが、素地は緻密。硬い焼きで、褐灰色のほか、一部、暗灰色や茶褐色に発色する。全長39.3cm、狭縫幅27.5cm、推定広端幅34.5cm、厚さ2.5cm、重量5.46kg。第2層出土。

12は、凸面に斜格子叩き痕を残す平瓦である。狭縫部と広端の一部を欠失する。叩き痕は、左右では重複するが、上下（狭縫-広端方向）では重複が全くみられない。平瓦の全長にみあう長い叩き板が使用されたと判断できる。叩き痕1単位の幅は7.5cm前後。狭縫からみて時計回り方向に叩かれている。凹面には、糸切り痕（Dr）、布圧痕と桶の側板圧痕が残る。桶の側板圧痕は1枚の幅が約4cmある。側辺は、側面調整ののち凹凸両面を面取りしてある。広端も両方に面取りがある。胎土は緻密で、石英・長石・雲母・黒色粒を少量含む。硬い焼きで、灰色をしている。現存長33cm、復元広端幅32cm、厚さ2.5cm、重量2.7kg。第2層出土。

13は、広縫部の破片。凸面はヨコナデ調整されてほと

んど叩き痕を残さないが、一部に、斜格子目叩き痕が見える。凹面は、側面調整および面取りのヘラケズリをおこなったのち、ヨコ方向の板ナデで調整され、かすかに布圧痕が残るにすぎない。胎土は緻密で、石英・長石・雲母・黒色微小粒を少量含む。硬い焼きで、灰色をしている。広端厚2cm。第2層出土。

井戸SE309出土の平瓦は2点を示す。

14は、広縫部を欠失する大型の破片。凸面調整は全面ヨコナデで、叩きの跡痕が残らない。凹面は調整がおこなわれず、糸切り痕（Ur）、布圧痕と布縦じ合わせ目痕、そして桶の側板圧痕が残る。縦じ合わせ目は、広端側で開いている。側辺は、側面調整ののち凹凸両方に面取りのヘラケズリをおこない、カドをおとしてある。面取りのヘラケズリは、いずれも狭縫方向にヘラが動く。狭縫は、凹面側だけに面取りがある。

胎土は、石英・長石・雲母・黒色粒を含むものの緻密で、焼きは硬い。凹面は灰色、凸面は灰色ないし淡褐灰色をしている。狭縫幅25.5cm、狭縫厚2cm、現存長36cm、現存重量3.26kg。第3層出土。

15は、広縫部を含む大型の破片。凸面はヨコナデ調整（狭縫からみて時計回り方向）される。格子目ないし斜格子目（木目平行）の叩き痕がかすかにみえるにすぎない。凹面は調整されず、糸切り痕（Ur）、布圧痕、そして桶の側板圧痕がある。側面と広縫面は、ヘラケズリ調整ののち凹凸両方を面取りしてある。

胎土は、石英・長石・雲母・黒色粒を含むものの緻密で、焼きはやや硬い。灰色ないし明灰色。広縫幅32.5cm、広端厚2.5cm、現存長30.5cm、現存重量3.68kg。第3層出土。

16は、凸面布目平瓦の広縫部片。凸面には、桶の側板圧痕と布圧痕があり、凹面はヨコナデ調整で平滑である。広端厚2cm。包含層出土。

出土瓦の性格 第75次調査で出土した瓦のうち、軒瓦には、今回の高所寺池関連調査で出土した資料に同様品はない。しかし、丸瓦と平瓦は、井戸SE9330や第J13次調査区で出土したものに類似がある。

まず、丸瓦は、細部調整に違いはあるが、基本的には丸瓦1類（第IV章第2節）として報告した行基丸瓦と近似する。

平瓦では、木目に斜交する斜格子目叩き板をもちいた平瓦（12）が、平瓦2類b（Fig.18-39）に一致する。ほかの斜格子目叩き痕の平瓦も、高所寺池調査区で出土した平瓦（本報告にいう「平瓦2類」）に類似しており、

これらは基本的に同一グループの半瓦と判断してよい。

先述したように、高所調査区から出土した瓦は、六条大路を隔てて、その北から出土する藤原宮所用瓦と、その南から出土する瓦の2つとに、明確に区分できる。第IV章第2節でも述べられたように、後者の一群は、調査地の南方にある小山廃寺の瓦と強い共通性をもっている。このことは、その中間でおこなわれた飛鳥藤原第75次調査で出土した瓦についてもあてはまることは、ここで示したとおりである。第75次調査では、小山廃寺創建軒丸瓦も1点出土していることも、これを補強する。

しかし、すべての瓦が小山廃寺でこれまでみつかった瓦と一致するとまではいえない。第75次調査でみつかった重弧紋軒平瓦は、凸面側から粘土円筒を分割する分割截線を切り込む特徴をもつ。このような重弧紋軒平瓦は、小山廃寺では確認されていないし、重弧紋の紋様も小山廃寺の既知の資料にはみいだせない。ただし、瓦当部の頭接合面に重弧紋風の調整をおこなったのちに頭の粘土板を張り付ける手法は、高所寺池調査区から出土した重弧紋軒平瓦と一致する。この手法は、小山廃寺の資料に未だ見出せていないが、本薬師寺金堂の創建軒平瓦6647Cbや6647I、あるいは藤原宮6647Caにはあり、飛鳥藤原地域で孤例ではない。

では、小山廃寺でも出土しない軒瓦が数点存在することから、別の新たな寺院跡を想定することはできるだろうか。左京七条二坊西南坪に位置する第75次調査区で、ここに報告する瓦が出土したのは、藤原宮期の井戸である。左京七条二坊に、別の寺院を想定した場合、その南部の西南坪は、伽藍の中枢施設が位置する区画であるはずで、そこに井戸を開削したとは、にわかに想像しがたい。

このように、解明すべき問題点も多々あるが、高所寺池調査区からその南方、藤原京左京七条二坊一帯は、京内としては多量の瓦が出土し、それらが小山廃寺とかなり共通することは強調しておいてよかろう。小山廃寺の寺地は、從来、考えられていたような八条二坊の4町の範囲にとどまらない。しかし、未だ調査の手がおよんでいない七条二坊東北坪の状況はあきらかでなく、東南坪を調査した飛鳥藤原第74次調査区からは、多くの瓦は出土しなかった。

小山廃寺の寺地が、左京七・八条二坊をすべて含んだ8町なのか、八条二坊に七条二坊の西側2町を含む6町なのか、現状では、判定することは困難である。しかし、どちらにしても、藤原宮南面東門に接続する東一坊大路

に沿う位置にあったことは間違いないく、しかも、その寺地の北が、宮南面の六条大路に接していたとすると、これは、京内としては一等地といつても過言でない立地である。

藤原京内の寺院の広さ、規模の問題を提起したという点でも、高所寺池の調査は、大きな成果を示したといえ、今後、同じような視点で、京内寺院のあり方を考える必要があるだろう。

註

- 1) 秋山日出雄『日本歴史地図』原始・古代(下)、1982年、106頁。阿部義平『新益京について』『千葉史学』9号、1986年。大瀧潔『新益京の建設』『新版日本の古代』第6巻近畿、1991年。花谷浩『京内廿四寺について』『研究論集 XI』奈文研、2000年
- 2) 花谷浩『本薬師寺の発掘調査』『仏教芸術』235号、毎日新聞社、1997年。小澤毅『本薬師寺の遺産と藤原京条坊』『条里制・古代都市研究』通巻第15号、条里制・古代都市研究会、1999年
- 3) 泉森俊『紀寺跡の主要伽藍と藤原京条坊』『条里制・古代都市研究』通巻第15号、条里制・古代都市研究会、1999年
- 4) 飛鳥資料館『承烏寺』資料館図録第15冊、1986年、40頁
- 5) 奈文研『川原守寺城北限の調査』飛鳥藤原第119.5次調査報告、2004年
- 6) この記載の年号については、坂池春峰は「承保二年」と訟読し『藥師寺縁起文』薬師寺、1967年、18頁)、藤田經世は「永保二年」と讀んでいる(『校刊美術史料』寺院篇中巻、中央公論美術出版、1975年、142頁)。承保二年は西暦1075年、永保二年は1082年にあたる。「藥師寺報告」には堀池説による記述がある(同書204頁)
- 7) 保井芳太郎『大和上代寺院志』1932年、図版第18、疏瓦1
- 8) 近江俊秀「7世紀後半の造瓦の一形態—明日香村小山廃寺を中心として—」『瓦衣千年』森郁夫先生還暉記念論文集、同刊行会、1999年
- 9) 保井『大和上代寺院志』前掲註7) 図版第23、疏瓦2
- 10) 藤原宮6647Caと本薬師寺6647Cb・6647Iに同じ手法がある。
- 11) 布綴じ合わせ目の痕跡を観察すると、綴じ目痕の右側に布端のほつれがみえる。あるいは、布袋を裏向きに使用したのであろうか。

付記

小山廃寺(紀寺跡)出土瓦の調査にあたっては、権原考古学研究所の近江俊秀氏と山田隆文氏、同研究所附属博物館の大西貴氏のお世話になった。記して、感謝を示します。

3 中世遺構についての覚書

高所寺池の中世遺構 今回の調査区では、井戸や溝など13~14世紀の遺構を確認した。建物跡は検出できなかつたが、高所寺池東岸の中部で井戸群（第113次調査区）、池の西南部で濠状の東西溝や井戸、土坑（第131次調査区）があった。これら2ヶ所の中世遺構集中地点は、100m以上の距離を隔てるので、互いに別々の集落に関連する可能性が高いと考える。

これまで、藤原宮城の発掘調査において中世の遺構に出くわすことは、それほど稀なことではなかった。最近、安田龍太郎がこれらをまとめているので、この論考¹¹⁾によりながら、近傍で確認された中世遺構を概観しておこう。

藤原宮城の中世遺構 藤原宮城およびその周辺で発掘された中世方形区画は15地点にわたる。「方形区画」とは、方形にめぐらる濠状の深い溝を指し、中世環濠集落の「壕濠」にはば該当する。今回の調査地周辺では、高殿集落（橿原市高殿町）、や別所集落（同別所町）の近辺で発掘例がある。高殿集落周辺での発掘調査例は、いずれもごく小面積の調査ではあるが、集落の北・西・東の各地点で、方形区画を構成すると推定される溝が確認されている。そのうち、北地点（第99~12次調査、「年報2000-II」）の溝は12~13世紀、東地点（第114~9次調査、「紀要2003」）の溝は14世紀のものであった。

別所集落内では調査は実施されていないが、集落南方にある残丘南斜面で発掘調査がおこなわれた（第75次調査、「藤原既報25」）。この調査では、残丘の南斜面を造成し、四周に溝（濠）をめぐらせてた集落跡が確認されている。方形区画は、当初、東西57.5m×南北42.5m以上（約25,000m²）、の規模であったが、造り替え後は、東西52.5m×南北36.4m（約20,000m²）の規模である。建物跡はみつかなかつたが、井戸を検出することができた。

安田は、藤原宮城とその周辺の中世方形区画が、13~14世紀の時期と、14世紀後半~15世紀の時期の2つに区分できること、そして、後者は、方形区画が現集落の位置へと再編される段階だと、評価している。

今回報告した、第113・131次調査区における中世遺構は、おもに14世紀以前の時期に属しており、現在の集落への再編成以前の段階にあたる、こととなる。

史料からみた周辺の中世集落 高殿庄は、12世紀頃から史料にその名が現れる。

保延五年（1139）以前、と推定される「東大寺御油庄

公事注進状」（『東大寺文書』4~34）には、欠字があるが、その庄名は「高殿庄」かとみられている。十市庄と飛羽庄が双壁をなし、高殿庄はこれに次ぐ位置をしめる。

高殿庄は、東大寺の灯油領所として、一目置かれる存在だったようである。領主は撰閑家と推測されるが、25町の田圃をもち、東大寺御油2斗5石、兩米5石を納めていた（嘉応二年（1170）「興福寺西金堂講堂等解案」「平安遺文」7~3547）。平安末期には、源宰相（參議・源雅頼）の家領であったが、その後、東大寺のほか、春日社、興福寺西金堂、薬師寺、角寺、川原寺、神通寺などが領有権を保有する状況となっていた。

鎌倉時代の様相をうかがえる史料は少ない。

文永二年（1265）、東大寺僧權少僧都聖寔が高殿庄内に私領3町3段余をもち、これを10か寺と春日社に寄進した（〔高殿庄名主得分注〕「鎌倉遺文」13~9381）。高殿庄の領有権が細分化されている状況なのであろうか。

室町時代初期の史料によれば、高殿庄には東大寺領と興福寺領があった。また、一乘院門跡領に「巣岐別所、法花寺庄」がみえる。

室町中期には、興福寺西金堂領矢田庄・鳥見庄とともに興福寺北院領となつたらしい。文明三年（1471）に、越智家栄が將軍義政から高市郡知行を認められた。

一乘院門跡領であった「巣岐別所」は、天文十八年（1549）の「越智管段錢帳」（『春日大社文書』842号）に「高殿庄 八十五町六段」とともにみえる「一岐別所十町五反」と同所であろう。

「古跡略考」が「別所村 ユキの別所といふ是也。其本拠 里民もしらず。按ニ朝の別所歟」とするのは、これである。

しかしながら、近世初期の文書では、元和三年（1617）から五年に作成されたと推定される「大和国内懸高」が、高市郡高との村855石（本田左京）として、「別所村」や「法花寺村」を掲出しない。

ようやく、正徳三年~享保四年頃（1713~1719）の「大和国郷帳」に高殿村784石3斗1升4合（植村右衛門佐）、法花寺村（高殿村の枝郷）80石3斗1升6合（植村右衛門佐）とみえ、その位置づけが判明する。法花寺の分村は、17世紀に降るのであろう。

註

- 1) 安田龍太郎「藤原宮周辺の中世方形区画」「飛鳥文化財論叢-納谷守宰氏追悼論文集-」同刊行会、2005年

第VI章 結語

4カ年にわたる高所寺池改修工事に関する発掘調査は、調査総面積が7,000m²をこえ、近年、奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査としては、飛鳥池遺跡（明日香村）に次ぐ大規模調査であった。調査地は、北は藤原宮東南隅部から南は左京七条二坊の地および、その間に南面大垣などの宮区画施設の存在が予想された。

1 南面大垣および外濠・内濠の確認

今回、高所寺池の東西两岸で、南面中門（朱雀門）以東としては初めて外郭施設の遺構を確認した。大垣は柱間2.7m（9尺）の掘立柱塀。外濠と内濠は素掘りの溝である。大垣と内濠は、これまで南面中門以西で調査されたものと、規模・構造、そして遺構の方位は一致していた。ところが、南面外濠に関しては、過去に判明していた事例とくらべ、大垣との距離が小さかった。これについては、当初、外濠が大垣および内濠とは異なる施工方針をもつ、と判断した。

これに対して井上人は、南面ではその中央、西部、東部で、外濠が大垣との距離をたがえている、と復元した。第V章第1節に記述したように、井上の指摘に蓋然性は高いものと思われる。この距離の差は、南面3門の前面の状況や外周帯の幅に直結する。それが、どのような要因に基づいて決定されたのか、検討が必要である。

2 藤原宮東南官衙南地区の遺構

東南官衙南地区では初めて、まとまった面積を調査し、建物や塀の配置状況が判明した。調査区の西北には、大型の建物がL字形（あるいはコ字形か）に配置される。このような建物配置は、内裏東方官衙地区に類似がある。また、建物の東方には、幅狭く区画された一部を確認した。内部に建物をみつけるにはいたらなかったが、大型建物とセットでこの地区を構成しているとすると、宮内にはほかに類例がない。ただし、藤原宮では官衙地区の建物配置について多くがわかっているわけでなく、これから調査に期待するところが大きい。

平城宮の官衙についてはその官署名が明らかになりつつあるので、それとの比較も今後の課題である。なお、今回の調査区では、内裏東方官衙地区のような建物の建設がなかったことも、留意しておきたい。

3 条坊関係遺構

六条条間路などの宮内先行条坊および、六条大路と東二坊坊間路の側溝を確認することできた。いずれも、ほぼ想定位置にあったが、京内での東二坊坊間路の西側溝に掘り直しが判明した。また、外周帶部分での東二坊坊間路東側溝は、一時期、官外濠と共に存していた状況が残っていた。

4 藤原京左京七条二坊の遺構

左京七条二坊西北坪の一部を調査した。建物はみつからなかったが、類例のない正五角形をした蒸籠組井戸が特筆される。京内では少ない横板組井戸である。

この地区からは、藤原宮所用ではない一群の瓦が比較的まとまって出土した。類似した瓦が、今回の調査区の南方にある小山廃寺（通称、紀寺跡）からみつかっていることから推測すると、小山廃寺の寺地がここまでおよんでいる可能性がある。藤原京内寺院の規模を考えるに、重要な知見を加えることができたと考える。

5 古墳時代の集落と古墳および遺物

調査区では、正方位をとらない建物や塀、溝が多数あったが、これらの厳密な時期を定めることは容易ではなかった。そのなかで、池の東岸にある井戸SE9570は須恵器、土師器のほか韓式系土器を出土し、5世紀後半のものと判断できた。これとほぼ同時期にあたる古墳の痕跡は、池の西岸にまとまっていた。埴輪をもつ円墳の痕跡である。おそらく、池中央部を南北に走る浅い谷をはさんで、東に集落、西に古墳群が営まれたのであろう。

このほか、中国製の鏡や水晶製三輪玉といった副葬品の一部がみつかり、破壊された古墳の内容を補った。

6 中世集落

調査区の南半部分を中心に、中世期の井戸や土坑が分布する。調査区周辺は高殿庄にあたり、その関連遺構であろう。九州産の石鍋が出土したことでも特筆される。

今調査区からは、绳紋時代から近世に至る遺構遺物がみつかったが、なかでも上記した6項目を、注目すべき成果と評価できよう。

報告書抄録

ふりがな	こうしょうじいけばっくつちょうさほうこく
書名	高所寺池発掘調査報告
副書名	藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	花谷浩・内田和伸・西田紀子・飛田恵美子・長谷川透・竹本晃
編集機関	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1 TEL 0742-34-3931
発行年月日	2006年3月27日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤原宮跡 ほか	奈良県 橿原市 別所町 高殿町	29205	14-A-26	34°29'41" (日本測地系)	135°48'52" (日本測地系)	2001.1.15 ～ 2003.12.25	7,150m ²	高所寺池 改修工事 にともな う事前調 査

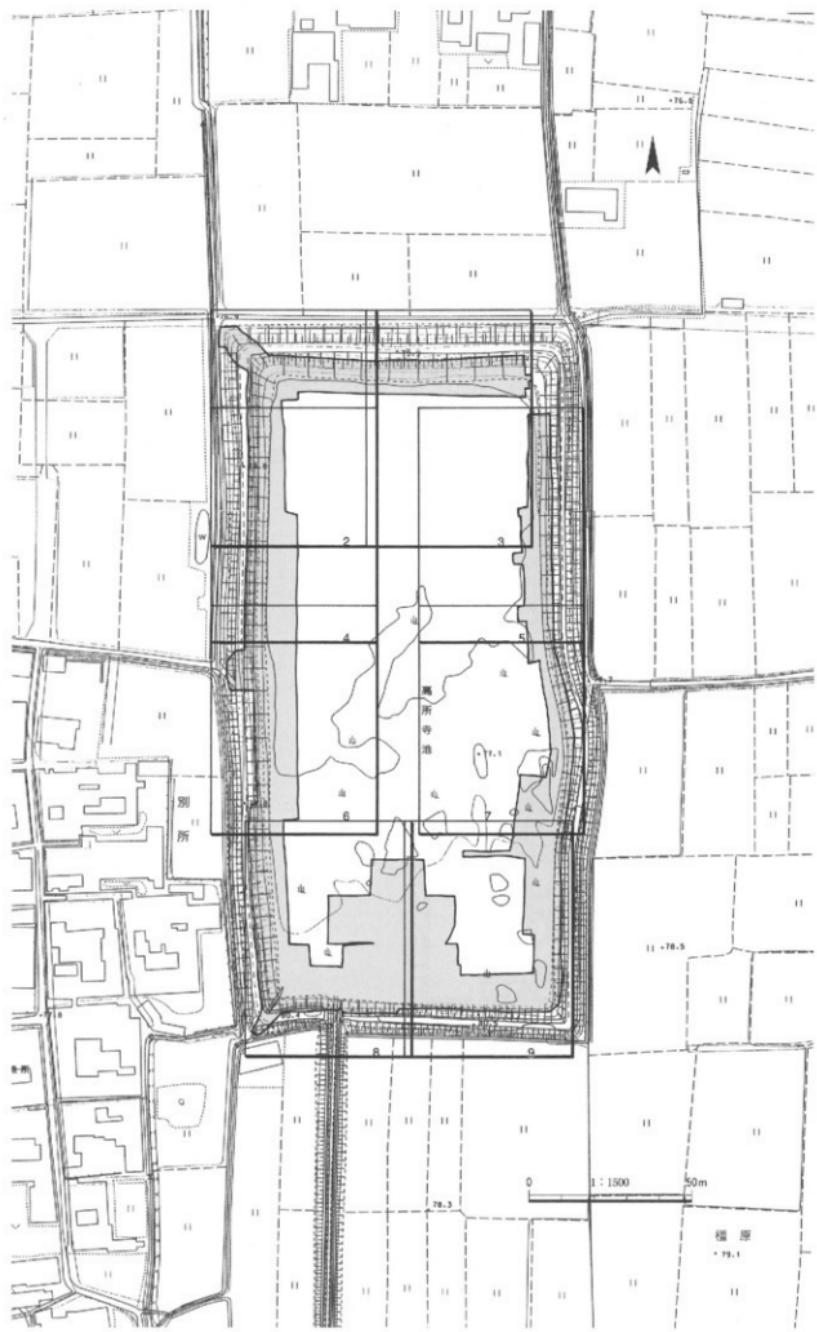
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤原宮跡 ほか	宮殿、 官衙	古墳時代 ～ 鎌倉時代	藤原宮南限施設、藤原 宮東南官衙地区掘立柱 建物・区画塀、藤原京 の条坊道路側溝、井戸、 斜行溝など	軒瓦、道具瓦、丸瓦、 平瓦、土器器、須恵器、 木簡、金銅製品、石製 品、木製品など	藤原宮の外郭施設遺構を 南面中門（朱雀門）以東 で初めて確認。藤原宮東 南官衙南地区の建物・溝 の配置状況を明らかにし、 藤原京の条坊関係遺構も 確認した。

図 面

PLAN

- | | | |
|---|----------|----------------|
| 1 | 平面図の割り付け | |
| 2 | 池北西隅 | 第118次北区・西区 |
| 3 | 池北岸 | 第118次北区・東区 |
| 4 | 池西岸北半 | 第118次西区・第124次 |
| 5 | 池東岸北半 | 第118次東区 |
| 6 | 池西岸中央 | 第124次 |
| 7 | 池東岸中央 | 第113次 |
| 8 | 池南西隅 | 第131次東北区・東南区 |
| 9 | 池南東隅 | 第113次・第131次東北区 |

平面図の割り付け PLAN 1

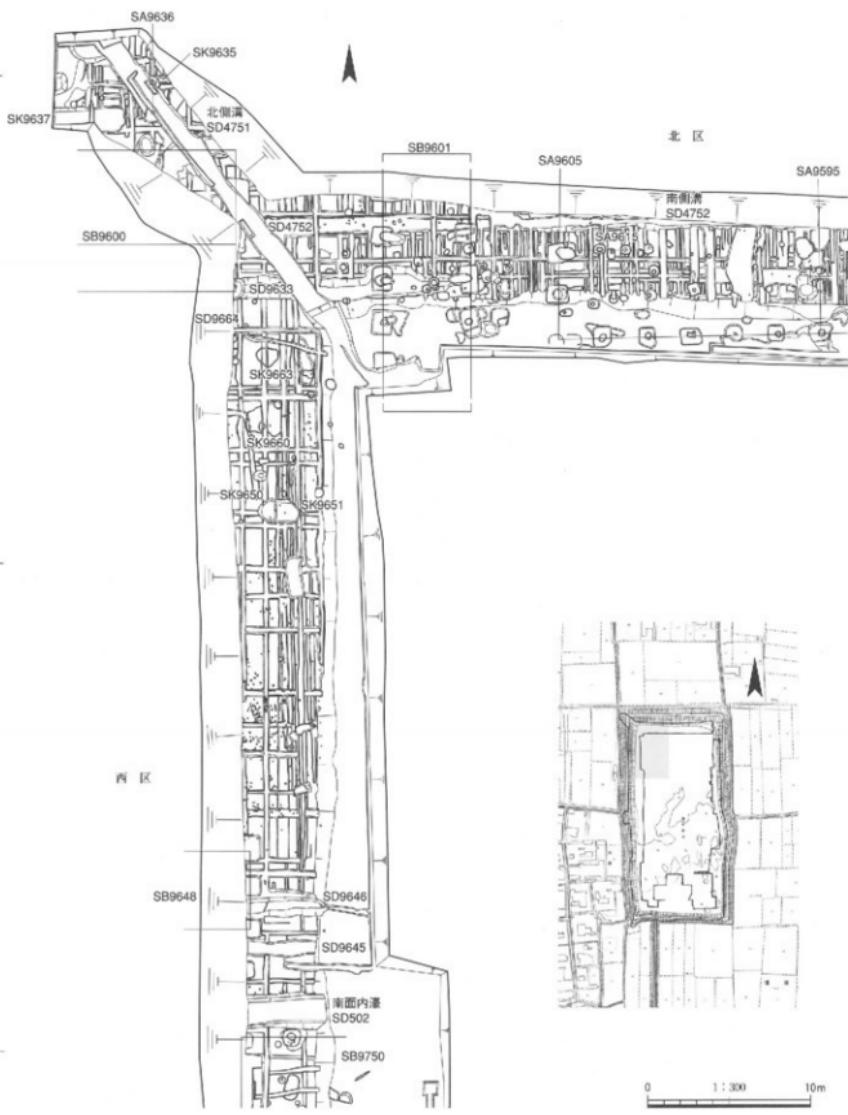


PLAN 2 池北西隅 第118次北区・西区

Y - 17,360

Y - 17,330

X - 166,600

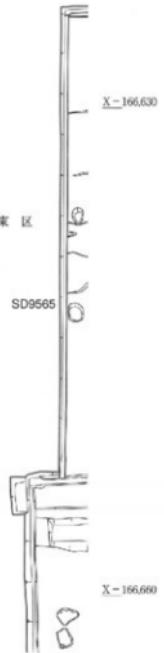
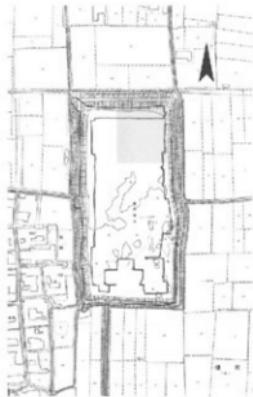
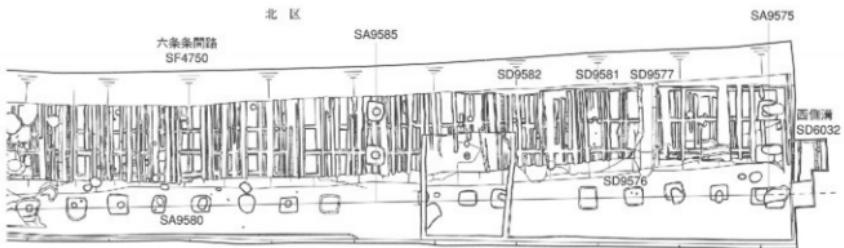


0 1 : 300 10m

Y - 17.310

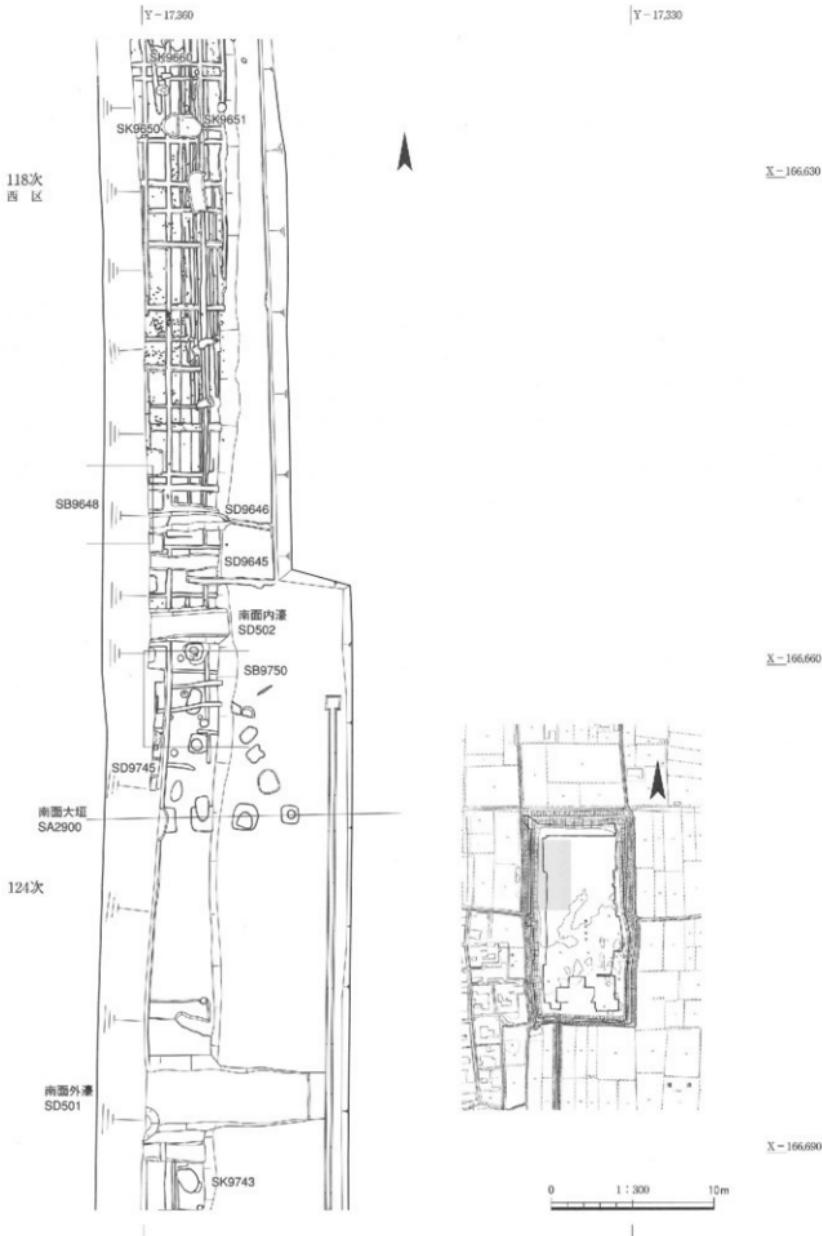
Y - 17.280

X - 166.600



0 1 : 300 10m

PLAN 4 池西岸北半 第118次西区・第124次



Y-17.300

Y-17.270

東側溝
SD6031

SD9561

SD9567

X-166.630

SD9566 SD9565

SE9570

SD9563 SD9562

SD9560

南面内濠

SD502

SB9550

南面大堤

SA2900

SB9548

SB9543

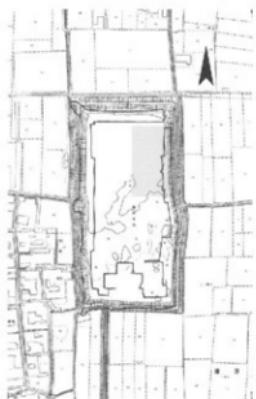
南面外濠

SD501

SD9540

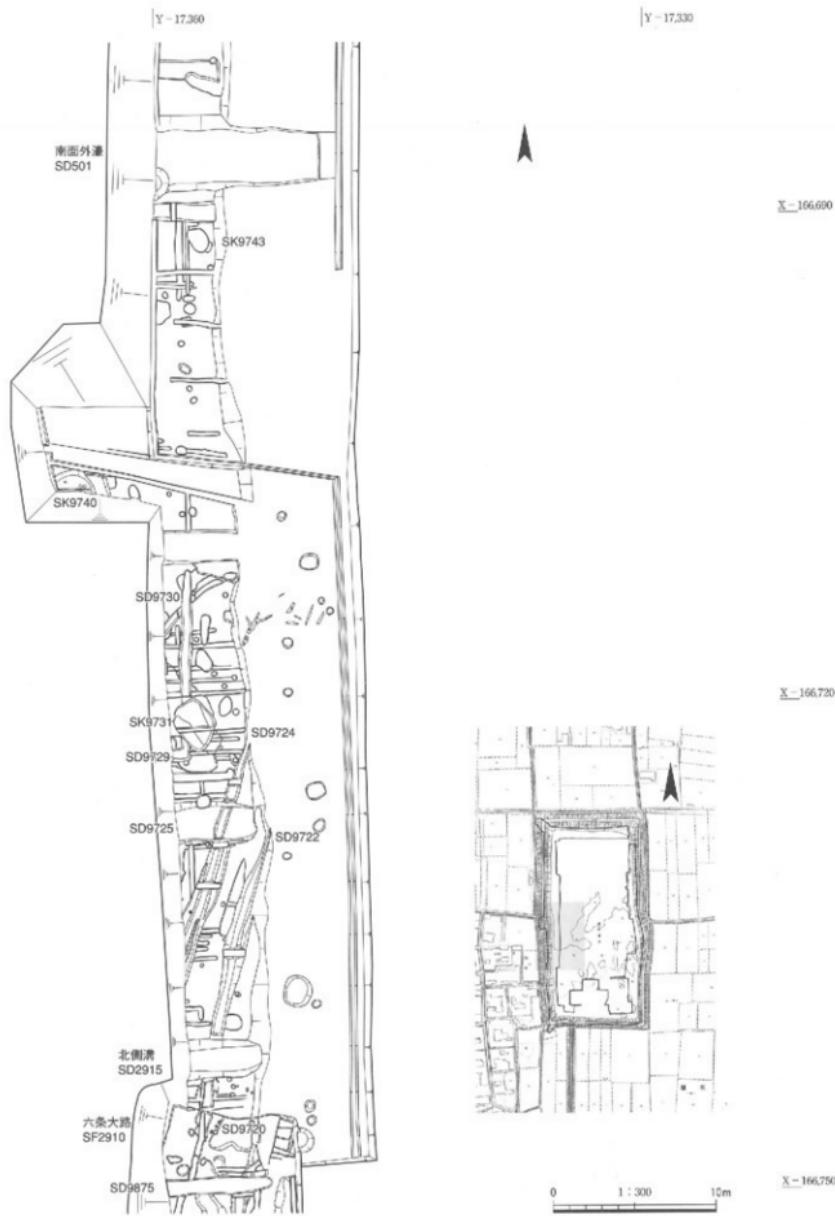
X-166.660

X-166.690



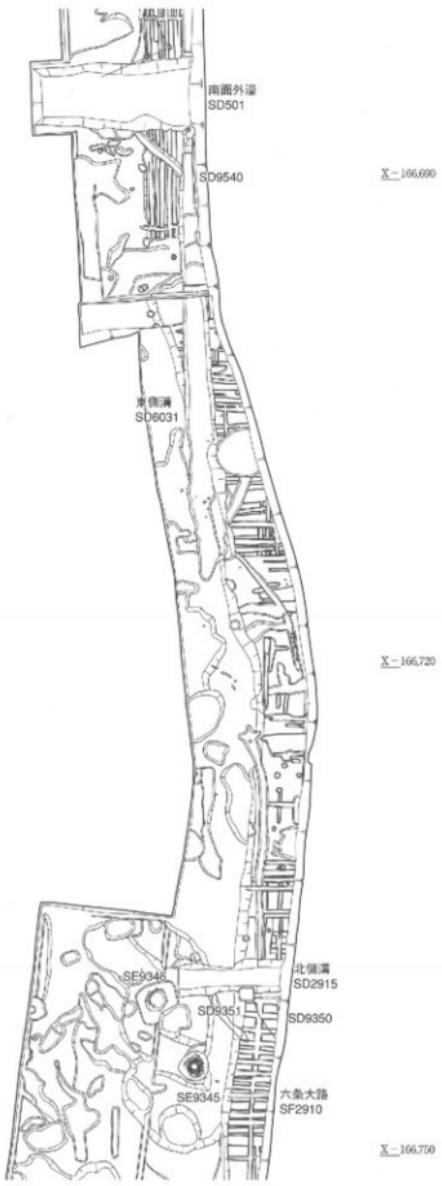
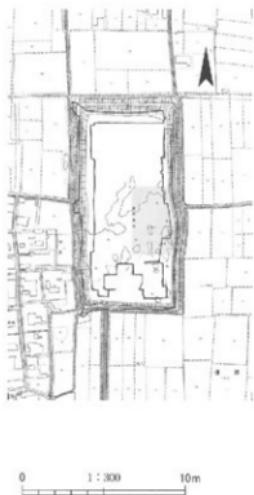
0 1 : 300 10m

PLAN 6 池西岸中央 第124次



Y-17.300

Y-17.270

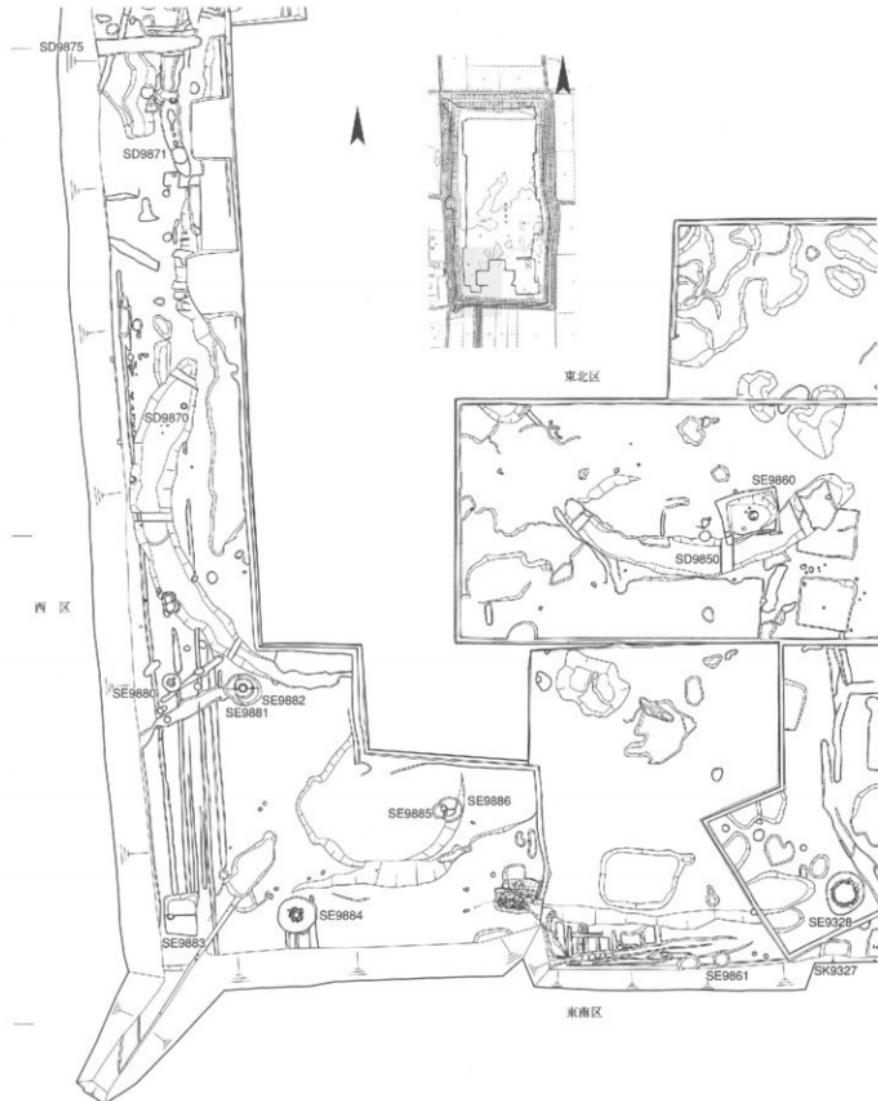


PLAN 8 池南西隅 第131次東北区・東南区・西区

Y - 17,350

Y - 17,320

X - 166,750



0 1 : 300 10m

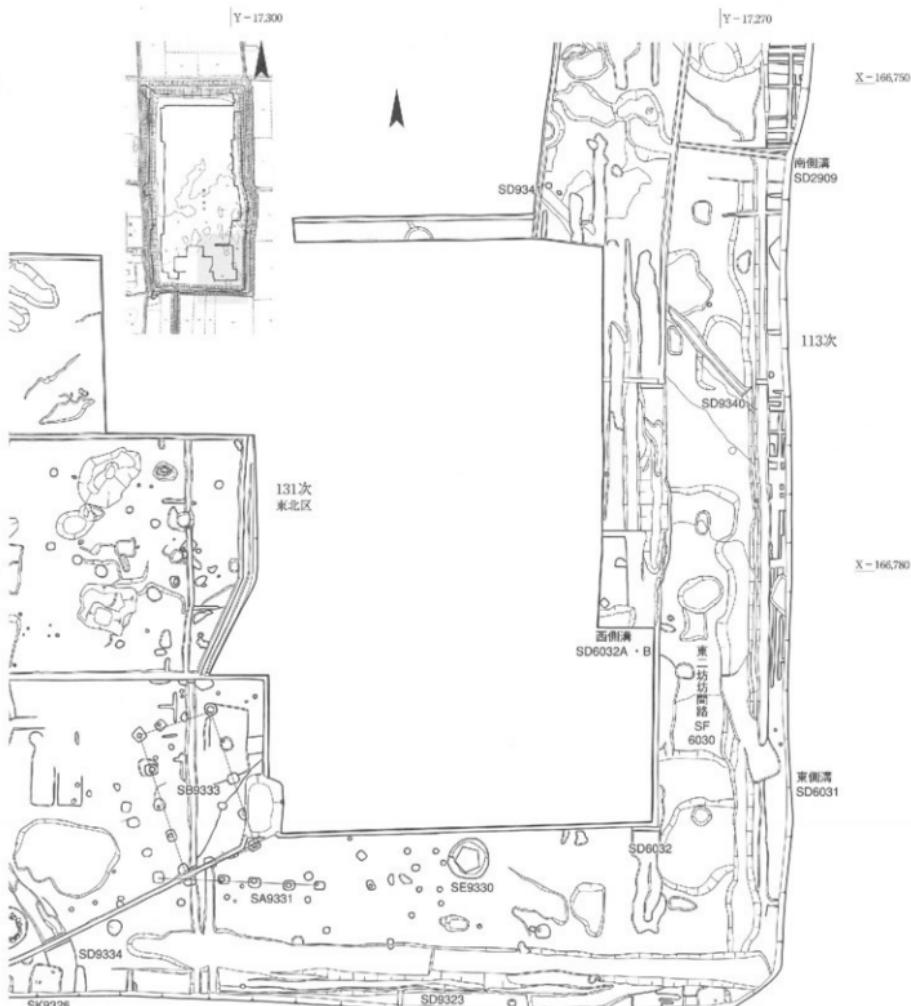


図 版

PL.

- | | | | |
|-------|----------|-------|--------------------|
| 1~13 | 遺構 | 32~35 | 藤原宮・京出土土器 |
| 14~15 | 土器類 | 36 | 五角形井戸出土土器 |
| 16~18 | 軒瓦 | 37~40 | 古墳時代の土器 |
| 19~21 | 丸瓦 | 41~42 | 中世の土器 |
| 22~29 | 平瓦 | 43 | 特殊土製品・金属製品
・石製品 |
| 30 | 道具瓦 | | |
| 31 | 条坊遺構出土土器 | | |





1



2

1. 高所寺池南岸から東岸 (第113次)

2. 高所寺池東岸から北岸 (第118次)

PL. 2 高所寺池西南部発掘調査区



1. 高所寺池西南部 南から



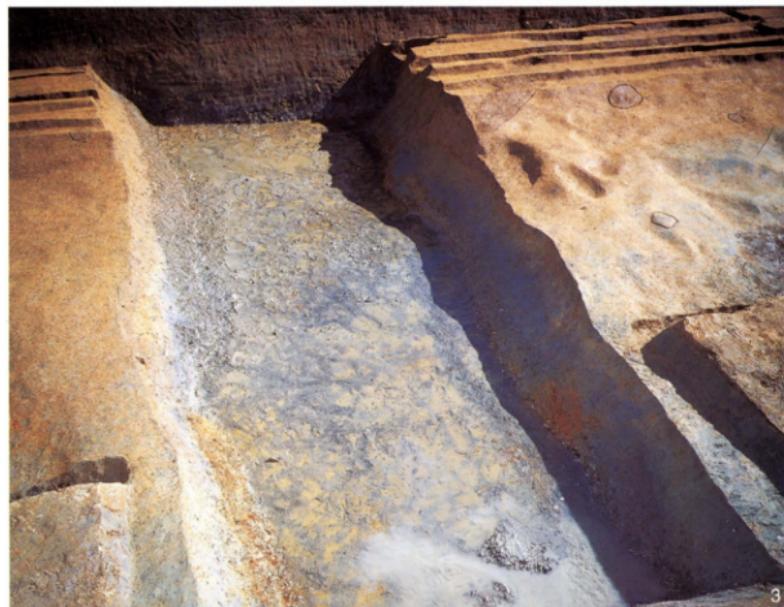
2. 高所寺池西部 北から

3. 高所寺池南西部 西から



手前が藤原宮の南面内濠、中央が南面大堤、左上が南面外濠 北東から

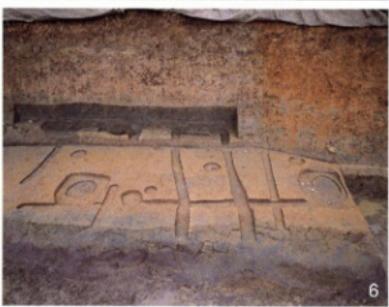
PL. 4 藤原宮の南面大垣と外濠



1. 宮の南面大垣（第118次）東から

2. 宮の南面大垣（第124次）東から

3. 宮の南面外濠（第118次）北西から



1. 宮の南面内濠（第118次） 東から 2. 内濠（第118次） 西から 3. 外濠（第118次） 西から
4. 宮の南面内濠 東から 5. 外濠上面瓦出土状況（第124次） 北から 6. 掘立柱建物SB9750 東から

PL. 6 北区全景と西区の東西溝SD9564



1. 北区全景 東から

2. 南北堀SA9575 北から

3. 北区全景 西から

4. 東西溝SD9564 東から



1. 北区南北棟建物SB9601 北から

2. 高所寺池西南隅導水口 南西から

PL. 8 東区全景と東西砂溝



1



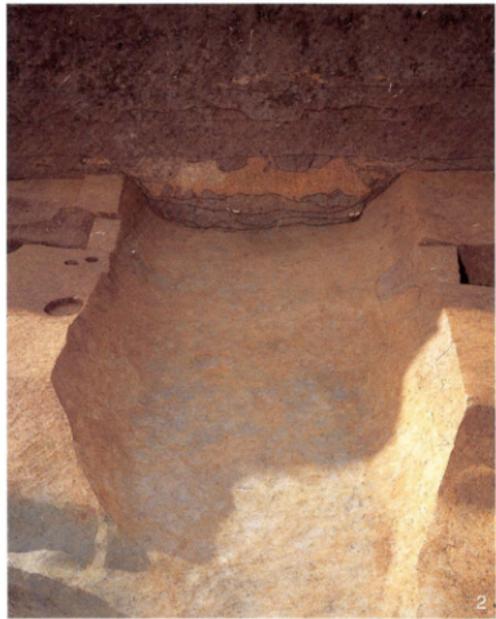
2

1. 東西砂溝SD9560 北西から

2. 第118次東区全景 北から



1



2



3

1. 東二坊坊間路と両側溝
北東から

2. 六条大路北側溝SD2915
東から

3. 外濠と東二坊坊間路の合流点
北西から

PL. 10 南区の井戸・斜行溝と西区の土坑



1. 井戸SE9330 北から 2. 2本の斜行溝と六条大路北側溝 北から
3. 土坑SK9749 北東から 4. 木肩土坑SK9740 北から



1



2



3

1. 建物SB9333 北西から

2. 古墳時代の井戸SE9570 東から

3. 井戸SE9570完掘後 東から

PL. 12 西区・南区の古墳周濠



1. 池南辺発掘区と古墳周濠SD9850 西から

3. 古墳周濠SD9850 北西から

5・6. 古墳周濠SD9870 北から

2. 古墳周濠SD9871 北から

4. 古墳周濠SD9870 北から



1. 井戸SE9328完掘後 北から
3. SE9884 北から
5. SE9883 北から

2. SE9882と先行するSE9881 東南東から
4. SE9345精査後 東から
6. SE9880 西から

PL. 14 東西大溝SD9633出土土器





1



2



4



3



5

1. 土師器壺 (185) 2. 壺内面の酸化鉄 3. 須恵器大壺 (179) 粘土紐の土質の差
4. 円筒埴輪 5. 須恵器大壺 (179) の復原



1
6273B 1:4



1
6273B 瓦当裏面



2
6275A 1:4



2
6275A 瓦当裏面



2
6275A 全形



2
6275A 接合丸瓦部の先端



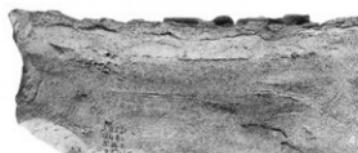
3
6275B 1:4



3
6275B 瓦当裏面



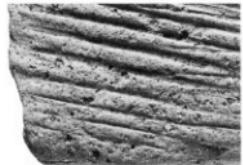
4
6276C 1:4



6276C 瓦当側縁

5
三重賦文 1:4

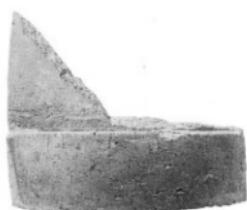
東坡文軒平瓦稜部 1:4

6
底板文軒平瓦平瓦部 1:46
底賦の押し引き痕

稜部接合面

8
6642C 1:412
6643C 1:49
6643Aa 1:411
6643Ab 1:413
6647C 1:410
6643Ab 1:4

PL. 18 軒平瓦の技法写真



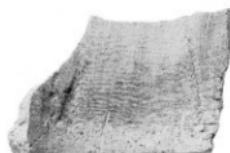
12
6643C 凸面



12
6643C 凹面



11
6643Ab 凸面



11
6643Ab 凹面



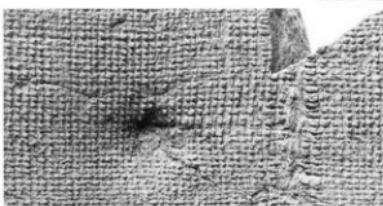
10
6643Ab 凸面



10
6643Ab 凹面



13
頓挫接合面



橋の突起痕跡



14

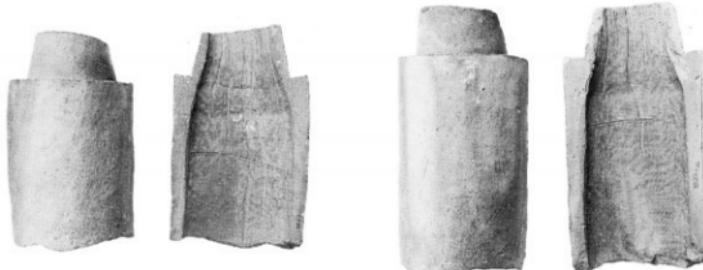
15

16



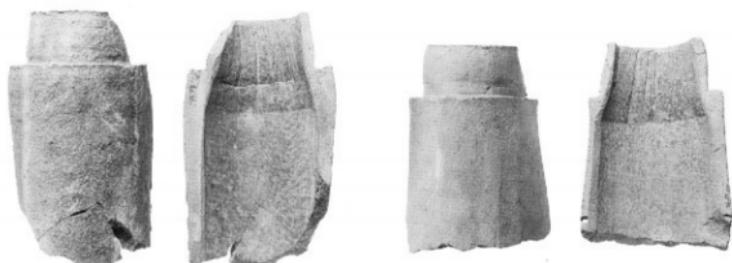
17

18



19

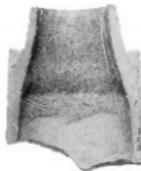
20



21

22

1:6



23

24



25

26



27

28



30

31



29

32



33

33

右下約1:3 他は1:6



34



35



36



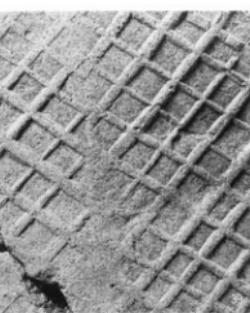
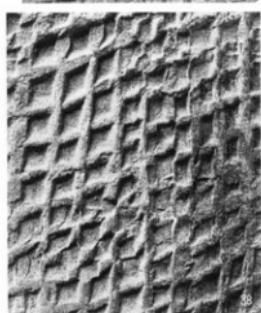
37



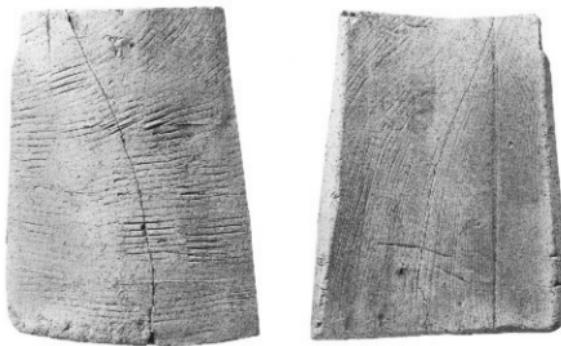
39



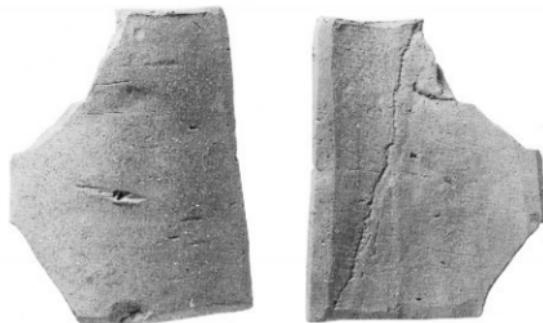
41



下段及び下二段左約1:1.2 他は1:6



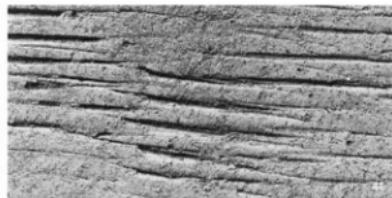
44



45



47



50



52

下二段目右約1:1 他は1:6



53



54



58



59



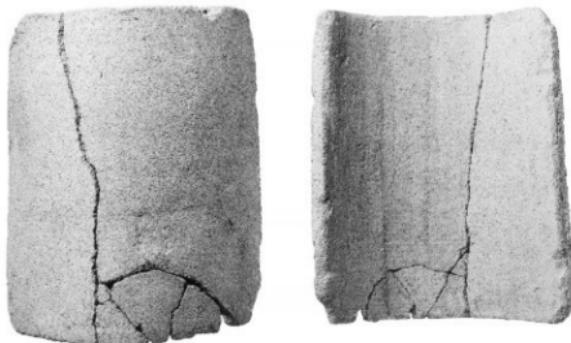
56



60



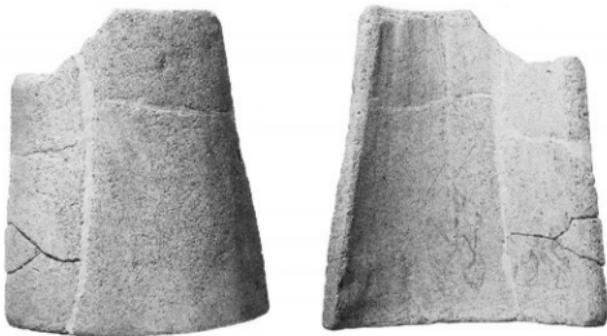
56



61



62

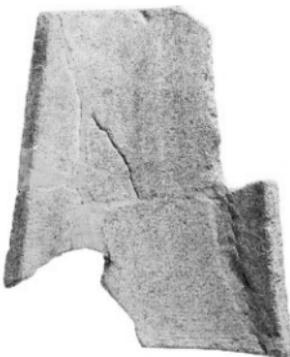


63

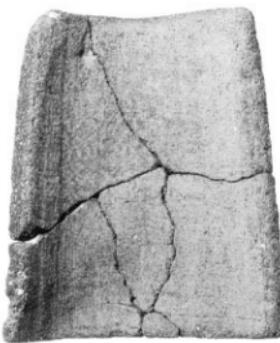
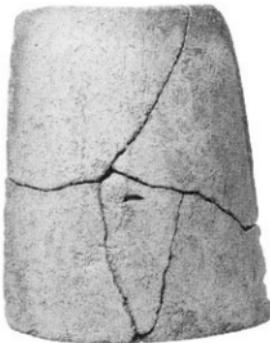
1:6



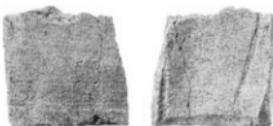
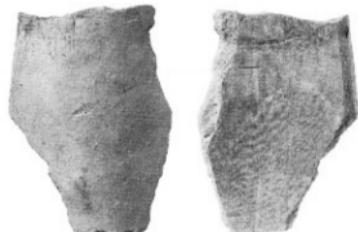
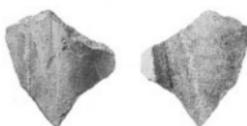
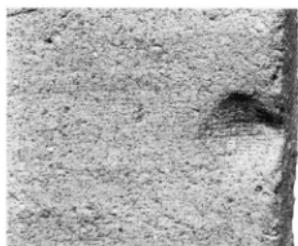
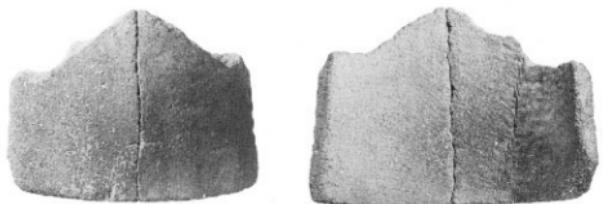
64



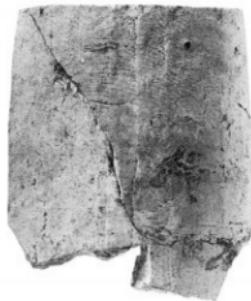
65



66



上三段目左約1:1 他は1:6



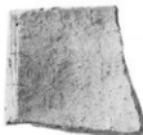
77



74



75



76



79



78



80

86



81



85



87



84



83

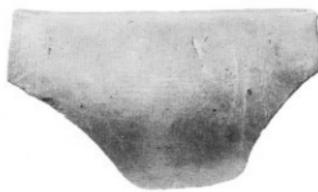


82

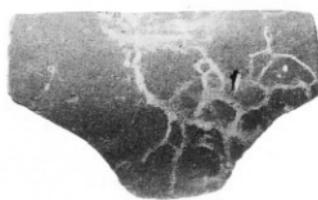


86

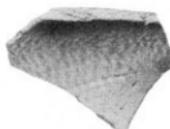
右下1:1.3 他は1:4



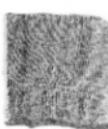
88



89



90



91



92



93



94

93



6



2



10



13



12



11



19



18



19



16

19下は1:1 16・18は1:3.5 他は1:3



61



53



46



54



47



52



49



58



50



57



35



67



65



70



64



68



72



81



76



82



77



83



88



78



80



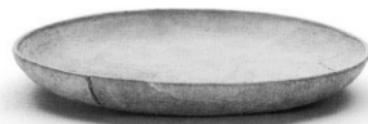
84



79



85



92



95



113



107



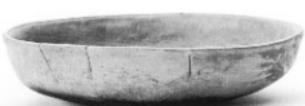
106



109



120



116



167



166



168



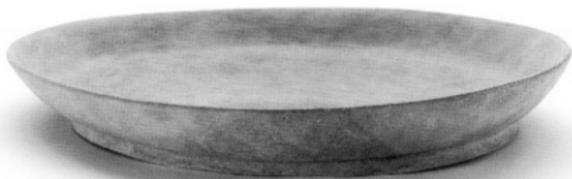
148



150



156



151
1:3



144



143



137



141



141



139



140



171



176



177



183



185



184

183・184・185は1:3.5 他は1:3





190



193



191



188



192



189



207



208



205



203



199



210



201



211



202



223



214



218



215



220



217



222



225



224



226



230



229



231



228

1:2.5



244



236



239



245



242



260



247



249



258



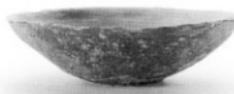
252



253



262



267



263



271



339



293



320



1



3



2



3

2006年3月20日 印刷
2006年3月27日 発行

高所寺池発掘調査報告 —藤原宮および藤原京左京七条二坊の調査—

著作権所有
発行者 奈良市二条町2丁目9番1号
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所

印刷者 京都市左京区油小路仏光寺上ル
有限会社 真陽社

ISBN 4-902010-39-9

高所寺池発掘調査報告

付 図

1 造構全図

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所

2006

高所寺池発掘調査報告（遺構全図）

